梁瀬光世 Yanase Mitsuse 著

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

新水社

梁瀬光世 Yanase Mitsuse 著

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

新水社

装丁◉奥定泰之

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

梁瀬光世 著

新水社

9784883850549

ISBN4-88385-054-4

C0098 ¥2200E

1920098022007

新水社

定価：本体2200円＋税

梁瀬光世 Yanase Mitsuyo 著

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

新水社

梁瀬光世 Yanase Mitsuyo 著

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

新水社

古代ギリシャ神話と現代の地球論が、
2700年ものへだたりをこえて、ここにまじわる
——もうひとつのギリシャ神話。

新水社❖定価：本体2200円＋税

梁瀬光世✸著

新水社

「ガイアとは、地球生物圏のシステムでした。そのメイン・システムとなるものが、ゼウスとプロメテウスです。ゼウスは、地球生物圏の調節システムであり、プロメテウスは、進化システムとなるものです。ヘシオドスはそういう地球生命史の記憶を、神話という形式をかりてあきらかにしたことになります。さて、それはいったい、どんな内容なのでしょうか？」……（本文プロロゴスより）

ガイアのたくらみ

梁瀬光世 *著

ガイアのたくらみ

ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

新水社

目次

◉おもな系統図

◉プロロゴス　11

1……原初に生じたもの……29

2……ガイアの最初の子たち……55

3……根源悪の起源と破局への仕組み……85

4……アプロディテ　生誕の秘密……107

5……ゼウスの誕生……135

6……ゼウスによる王権……159

7……プロメテウス　生命知の反逆……193

8……うつくしき禍根……213

◉参考となる本の案内　242

◉あとがき　245

ガイアのたくらみ

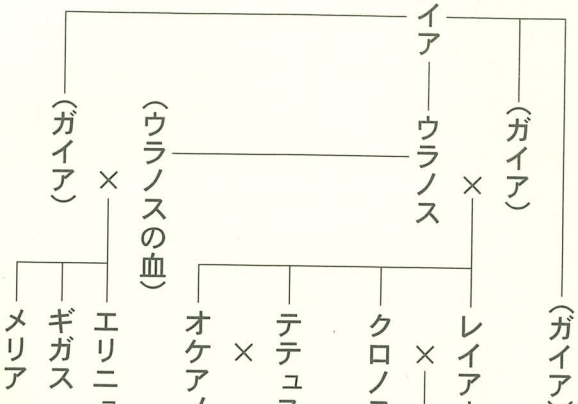
――ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

ヘシオドスとミューズ（ドラクロワ）

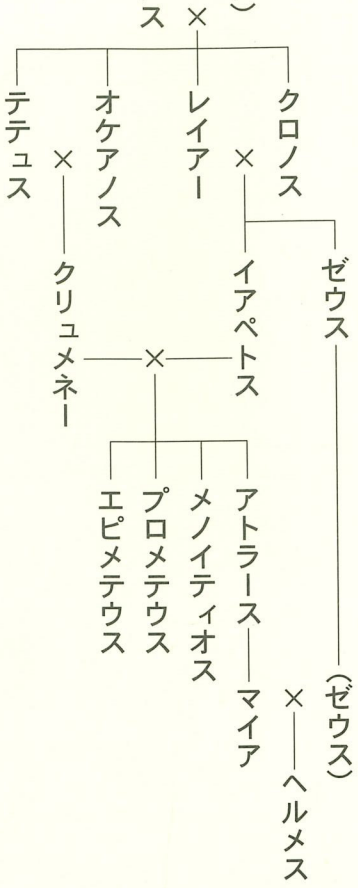
○原初の神々とその系統

- カオス
  - ニュクス
    - ニュクスの子たち
    - エリス ―― エリスの子たち
    - ×
      - ヘメレ
      - アイテル
    - エレボス
  - ガイア
    - ポントス（海）
    - 山々
    - ウラノス（天）
      - ティタン神族 ―― オリュンポス神族
      - ×
        - キュクロプス
        - ヘカトンケイル
      - （ガイア）
    - ×
      - テュポエウス ―― 悪風たち
  - タルタロス
  - エロス ―― （アプロディテ） ―― （ヒメロス）

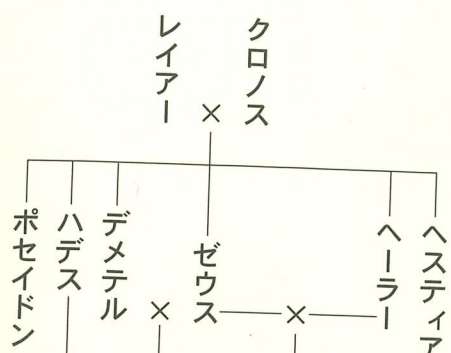
○ウラノス～クロノス～ゼウスの系統



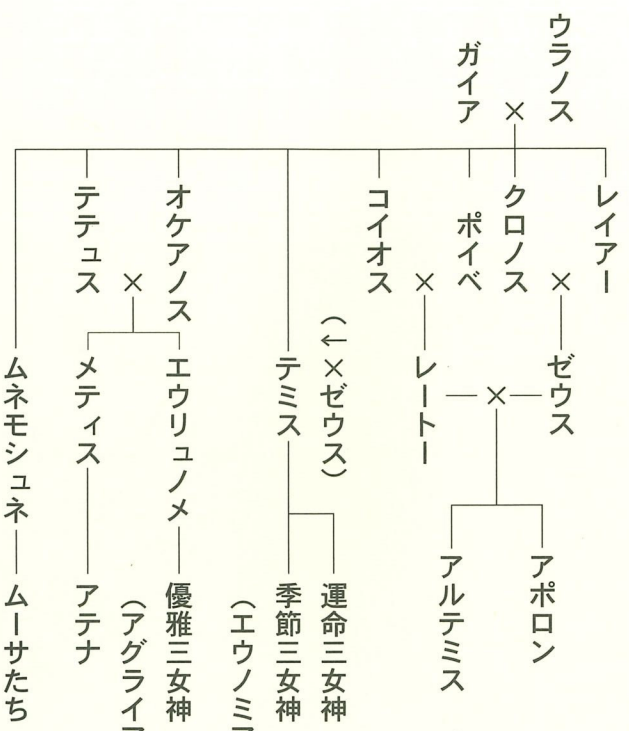
○プロメテウスへの系統



○オリュンポスの神々



○ゼウスの「結婚」



○ディオニュソスへの系統

ゼウス—×—ヘーラー
　　　　└—アレース—×—アプロディテ
　　　　　　　　　　└—ハルモニア—×—カドモス
　　　　　　　　　　　　　　　　└—セメレ—×—（ゼウス）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└—ディオニュソス—×—アリアドネ

○ヘパイストスへの系統

ヘーラー—ヘパイストス—（乙女）
　　　　　ヘパイストス×アグライア

プロロゴス

私たちは　たくさんの真実に似たいつわりを話すことができますけれども
私たちは　その気になれば　真実を声を大にして語ることもできるのです

異様な超神話

ギリシャ神話というのは、きわめて異様な神話であるといえます。それは、世界のどの地域の神話ともまるでちがっています。

ギリシャ神話に登場する神々は、人間とあまり変わりないようにみえます。ただ、不死であるというだけの違いです。しかも不死なる神々が、死すべき人間をつくったわけでもなく、両方とも起源はおなじ。「食べ物」がちがうだけのようです。

しかも神々は、愛欲、妬み、憎悪、怒り、争いなどの、とりこになっているようにもみえます。まるで現代のテレビドラマみたい。神々というのは、まるで人間の欠点だけを投影した、人間以下の生き物なのかもしれません。

「人間の世で恥とされ、やましいとされるあらゆるものを神々にささげたのだ。彼らは神々のあらんかぎりの無法な仕業を語った、すなわち、盗み、姦通、だましあいを」

このようになげいたのは哲人クセノパネス（紀元前六世紀）です。そして、こんなおぞましい神話を語りきかせる詩人たちをはげしく非難しました。

けれども、それどころではありません。ギリシャ神話は、その始まりからして、じつに奇妙です。天地自然についての見方が、まったくひっくりかえっています。

なにしろ天が生じるよりも先に大地がうまれます。しかも、その大地から天がうまれるのです。また太陽や月は大地と天との孫としてうまれます。

さらに、太陽や月や星よりも、昼や夜が先にうまれます。しかも昼と夜は同時にできたのではない。夜から昼がうまれています。私たちにとって大切な光よりも、おぞましい暗黒のほうが先なようです。

そのせいか陰気で邪悪な神々の生成が、これでもかとばかり、ならんでいます。

カオスから生じた「夜」からは、死・眠り・非難・苦悩・憤り・欺瞞・愛欲・老齢・争いなどの子たちがうまれます。

その最後の「争い」からはさらに労苦・飢餓・悲嘆・戦争・殺人・紛争・破滅などの子たちがぞくぞくとうまれでてきます。

じつに、これらまがまがしい子たちがはびこり、そら恐ろしくて暗い、というのがギリシャ神話の世界だともいえそうです。でも、なぜ、こんな神話ができたのでしょう?

ギリシャ神話は、ほかのさまざまな神話とは、つくられ方がちがうようです。日本神話やゲルマン神話などの神話と一緒にするなんてこと、とてもできません。

いわゆる神話というのは、国家や種族や宗教教団の立場から整理し統廃合されながら、意図的に創作されたものであるといえます。すなわち、ある特定の集団の内にとざされた、手前勝手な

内容をもっています。しかしギリシャ神話は、そういうたぐいの神話ではありません。

そもそもギリシャ人なるものは、種族あるいは民族の名称なんかではない、という考えさえありました。たしかにギリシャ人は、ギリシャ以外の周囲の人々をバルバロイとよんでいました。これは野蛮人と訳されてはいます。

しかしバルバロイとは本来、どもることや分別をめぐらせないで語ることを意味していました。これも差別かもしれません。でも、ギリシャ人は分別をめぐらして語る、知性をもつ人であろうとしたことは確かです。

そのためもあり、ギリシャ神話はやがて西洋の文化にかくれた影響をあたえるようになります。いや、それどころか、ひろく世界にひらかれています。

このようなわけで、ギリシャ神話は、いわゆる神話というよりは、「超神話」であるといえます。その内容は特殊で異様にみえても、それでいて、どこか全地球に共通するものをもっています。

謎の人物ヘシオドス

だがそれにしても、ギリシャ神話の内容は、あまりにも異様です。その異様さの責任の大半は、

ヘシオドス（正確にはヘーシオドス）という人物にありそうです。紀元前七〇〇年ごろの人です。さきのクセノパネスは、神々と人類の起源の秘密をあかすなど、神々の無法な仕業を語った「彼ら」として、二人の詩人をはっきり名指ししています。その二人とは、ギリシャ最古の叙事詩人である、あのホメロス（紀元前一〇〇〇年ごろ）と、そしてこのヘシオドスです。

ホメロス（ホメーロス）とヘシオドス。しかし、この二人はまるでちがっています。『イーリアス』や『オデュッセイア』で有名なホメロスは、職業的な古代吟遊詩人でした。

ホメロスはただ、種族にふるくから伝わる詩歌を人々に語りきかせたにすぎません。だからホメロスにはそれほど責任はありません。

これに対して、ホメロスから三〇〇年後のヘシオドスは、神々の起源と生成の秘密を系図のようにしてまとめあげました。さらに、人類の起源と生成の秘密もときあかしています。

彼はそのなかで、じつに大それたことをしています。たとえばホメロスにおいては、ただの門番でしかなかった一女神を大抜てきして、人類の将来をたくす第一の女神にすえています。

はたしてヘシオドスに、そんな勝手なことをする権限があるのでしょうか。秘儀を伝授された、神秘的な神官や大王なら別です。しかし彼は、ただの芸能民なのです。

オルフェウス教の神官でもなければ、国家や民族の指導者でもない。吟遊詩人といっても、農牧にもたずさわっている、いわば田舎のしろうと詩人？

でもなぜこんな人物が、こんな大それたこと、つまり神々と人類の起源の秘密をあかすなどという、そら恐ろしいことができたのでしょう？

ある一つの奇妙な事件がきっかけかもしれません。

ギリシャの地図をひろげてみましょう。

そのほぼ真ん中に、あの「汝みずからを知れ」で有名な神殿のあるデルフィ（デルプホイ）があります。そこには神殿が建てられるはるか以前、悠久の昔から、大地ガイア（あるいはテミス女神）の託宣の場がありました。

洞窟や地の割れ目からは、ぴゅーとガスが吹き出し、それが大蛇ピュートーンとなってたむろしていたといいます。そして、その風をうけて恍惚となった巫女たちが託宣をしていました。

かの哲人ソクラテスもここで、自分よりも知恵ある者は「だれもいない」と告げられました。そのおかげで彼は、やがて「無知の知」をさとります。そして、知ったかぶりして彼と問答する者は「毒蛇にかまれた」ような激痛になやまされることになるわけです。

このデルフィからすこしばかり南東のほうをみると、標高一七四八メートルの聖ヘリコン山があります。そして、その東麓にアスクラという村があります。ローマ時代までは、このあたりは有名な観光地だったそうです。なぜなら、ヘシオドスがそこに住んでいたからです。

ただし現在のギリシャの観光案内書には、デルフィはあってもアスクラはのっていません。と

ても残念なことに、すっかり忘れさられています。観光局の地図をみると、アスクラという地名はあります。しかしそのあたりは、ほとんど畑のようです。

ともかく観光地であった当時は、山にのぼると「ミューズの渓谷」とか「ミューズの林」などの名所もありました。しかしそこは牧歌的イメージとはほどとおく、「冬はきびしく、夏つらく、よい時はいつだってない」という、ひどい気候の土地だったと、ヘシオドスはぼやいています。もっとも彼は、先祖代々の根っからの農牧民というわけではありません。父親は、現在のトルコ西岸、エーゲ海に面する小アジア沿岸のキュメ（ペルガモンとスミュルナの間にある）で、貿易をいとなんでいました。

当時すでにギリシャ人の商船団は、黒海や地中海西部にまでくりだすほど活躍していました。小アジア沿岸地方はその中心地として栄えていました。

キュメの上流にあるリュディア王国では、刻印で品質保証した鋳物の貨幣（エレクトロン）が発明されました。これこそ世界最初の貨幣です。またヘシオドスより後の時代には、ギリシャの古代科学であるイオニアの自然哲学がおこる、そういうひらかれた土地柄でした。

ところが父親は事業の失敗もあって、商いや航海の才覚を、新しい生き方をもとめる方向にむけようとしました。

のちに哲人プラトンは『法律』で、商いの術や航海の技術よりも人間としての根源のあり方

（アレテー）が大事であると強調しています。これとおなじ考えもあったのでしょうか。

商業貿易の神といえば、ヘルメス（ヘルメース）がもともとそうでした。やがて錬金術にもつながるヘルメスの不思議な知恵を、ほんとうに生かそうとしたのでしょうか。

ともかくトルコから海のむこう、ギリシャ本土にわたったのです。ところが一家が入植した土地というのが、あの「みじめな村」アスクラなのでした。

それでも村には、ひとつだけとりえがありました。「すみれ色した泉」があちこちに湧いていたのです。なかでもヒッポクレーネ（馬の泉）は、天馬ペガソスのひずめ跡から湧きでたものとされていました。馬の足跡のような形の泉とは、なんだか異様な感じもしますね。

このような不思議な気配のする土地というのは、人々が、祖先のミュトス（物語・神話）をするのに、まさにうってつけの場所でありました。ここで人々と、地域と祖先の物語は一体となり、物語は神の語りとなります。

また、そこへ詩歌学芸の女神ムーサたちもおとずれるのです。

なにしろこの地方一帯は、たくさんの昔物語であふれていました。

アスクラから東北東二〇キロちょっとのところには、七つの門をもつ大都市テーバイがあります。そこは、かの英雄ヘラクレスのうまれたところであるとされています。

テーバイはまたデュオニュソス神の活躍した地でもあります。さらに、のちのギリシャ悲劇で

は『オイデュプス王』の舞台にもなりました。郊外の岩山にはスフィンクス（スピンクス）もかくれ住むといいます。

一方、太古に由来する「クロニア」の祭もありました。それは、ゼウス以前の神クロノスに関係する祭であるとされています。

でも、息子ヘシオドスは、そんなポリスに所属することをきらい、一生を寒村アスクラですごしたようです。でもそこには「泉」がありました。それで十分だったのでしょう。泉はさまざまな昔物語を、ただのお話ではなく、バーチャル・リアリティ体験させてくれる場所なのです。

ある日、この泉のあたりで若いヘシオドスはひとり、羊たちの世話をしていました。そこへ泉水のゆらぎわきでる、ここちよい音に乗じて、あのムーサたちがやってきました。

ところが、大勢ではなくヘシオドスたったひとりだけだったからでしょうか、詩歌学芸の女神ムーサたちは奇妙な、あまりにも奇妙なことをささやいたのです。

私たちは　たくさんの真実に似たいつわりを話すことができますけれども
私たちは　その気になれば　真実を声を大にして語ることもできるのです

ムーサたちの「いつわり」と「真実」

いったい、どういうことなのでしょう？　「真実に似たいつわり」とは、要するに、これまで人々のあいだで生きていた、さまざまな物語のことです。それがうそである、と告白したにほかなりません。

つまりホメロスの『イーリアス』や『オデュッセイア』なんか、真実なんか語っていやしない。ウソっぱちだということです。むしろ、真実をおおいかくしてきたといえるのです。

それはなぜでしょう？

ホメロスをはじめとする職業的な吟遊詩人たちは、昔に起こったとされることがらをただ雑然と語りつたえているだけです。詩は詩人が神がかりの状態になって朗誦されるものです。そのため、すごい迫力があります。

それはまるで、ムーサたちから霊感を吹きこまれたかのようです。これがムーサたちの仕事なのでした。しかしこんなことだけがムーサたちの仕事ではなかったのです。

このムーサたちは、記憶の女神ムネモシュネ（ムネーモスュネー）の九人の娘です。それでムーサを「思いだす者」と解することもあります。

ただし記憶といっても、暗記する記憶（メモリー）だけではありません。こちらの記憶は、ホ

メロスのような吟遊詩人たちの得意とする記憶でしょう。

ほかにもう一つ記憶があります。それは人々が生きていくための、圧縮された記憶で、思いだされる記憶です。大脳の表面でしかない新皮質の学習記憶ではなくて、身のうちに定着した記憶、大脳の奥ふかい辺縁系あるいは全身の記憶です。

なにしろムーサたちは、記憶というのは、「今あること、このさき起こること、すでに生じたことがら」のことだといっています。

それはまず、現在のうちに（今あること）はたらいているものです。また、未来をよびよせる

ヘリコン山のムーサ

記憶、すなわち期待や創造でもあります。そのなかで過去の記憶のイメージもふくらみます。

でもそのためには、ただ過去の英雄時代をなつかしむだけの職業的な吟遊詩人とはちがう、あたらしいタイプの詩人がいなくてはなりません。

そうしてようやくここに、ムーサたちは「その気に」なる、ヘシオドスという人物をえたのでした。あの、商いや航海の才覚を転換させた父の息子としての感性、ヘルメスのような術・知恵をもった詩人です。

その気になれば「真実を声を大にして語る」と、ムーサたちはいっています。

それは、長いあいだの苦痛からこれでようやく解放されたといったような、ハレの喜びの気持ちをあらわしています。そうしてムーサたちはヘシオドスに、月桂樹の若い枝をおってスケープトロン（御杖）としてさずけました。それによって彼の、「身のうちに、神の声を吹きこまれた」といいます。

これら一連の出来事は、とても神秘的な感じがするかもしれません。

まさに神秘体験といってよいでしょう。でも、幻覚的な宗教体験とはちがうようです。だいたい、これは幻覚によるイメージではありません。イマジネーションではないのです。「身のうちに神の声を吹きこまれた」とは、イメージ以前の、原初の動き・力を自分の身のうちに、まざまざと感じることです。

それはまさに泉の体験。泉の水のようにフツフツと湧きでてくる、ふかい奥底からの渦巻く体感の湧き上がりです。

いいかえればインスピレーションです。インスパイアされて、身のうちがうごめき、力にみたされます。そのインスピレーションの渦が、雑多なイメージを巻きこんでは整理しなおしていきます。やおよろずのように雑然とならぶ神々は、系譜のかたちで統一されていきます。

その神々の系譜は、単なる血縁のつながりのようにもみえます。しかしそれは、神々の性格や性能をくらべ、本末の関係をはっきりさせたものです。これが政治的あるいは宗教的な立場からのトップ・ダウン式ではなく、ボトム・アップ。根源からの泉の体験からなされたことを強調しておきましょう。

こうして「むかし起こったことがら」が、そのまま「これから生ずることがら」であるような、未来への記憶の物語になる。やはりそれは、詩歌の女神ムーサたちの仕業というほかありません。

よみがえる「ガイア」

こうしてヘシオドスは、二つのすてきな作品をのこしました。それが、

『テオゴニア』（神々の起源・生成）
『エルガ・カイ・ヘメライ』（仕事と日々）
です（それぞれ『神統記』『仕事と日』という題名で訳本がでている）。

そのなかでヘシオドスは、とても重要な神をあきらかにしました。

ひとつは、もちろん「ゼウス」（ヅェウス）です。もうひとつは、人間たちに〈火〉をあたえたという「プロメテウス」（プロメーテウス）です。

でもヘシオドスは、それよりももっと重要な女神をあきらかにしていたのでした。

それが「ガイア」（大地）です。

大地の女神・ガイアというと、世界各地にみられる大地母神を思い浮かべるかもしれません。でもそれはギリシャ神話においては、むしろデメテル（デーメーテル）にあてはまります。ガイアは、そのような大地母神ではありません。

ガイアはひとつの女神であるとともに、また、神々（や生き物たち）の背後にいる神でもあります。神々の母。このガイアを偉大なる母として、主要な神々がうまれています。その神々は、ガイアを舞台として活躍します。ガイアの暗躍のもとに、神々は登場し没落するのです。

ガイアは神々や生物や人類を生かす根源のちからです。ガイアだけが不滅のようです。したがってガイアは、過去の物語にだけでなく、現在も生きており、そして未来にも生きつづけます。

ムーサたちはヘシオドスに「これから生ずることがらと、むかし起こったことがらを」うたうようにうながしました。それは、いいかえれば、ガイアをたたえてうたうということにほかなりません。

とはいえ、ヘシオドスの後すぐに、ガイアはわすれさられてしまいます。

タレースからプラトン、アリストテレスにいたるまで、ガイアはただの大地としかみなされていません。デルフィの神殿も、ほんとうならガイアだろうに、アポロンなんかをまつっています。

しかし、二一世紀をむかえるころになって、まるで奇跡のようなことがおこりました。不滅のガイアがよみがえったのです。

地球生理学を提唱する科学者ジェームス・ラブロックと、微生物学者リン・マーギュリス。一九七三年、二人は地球物理学雑誌『テラス』に、地球生物圏についての仮説を発表しました。それが始まりです。

彼らの友人である作家ゴールディングは、この地球生物圏のシステムに、「ガイア」と命名しました。もちろん、ギリシャ神話の大地の女神にちなんで。ガイアは、いまではもう流行語になっていますね。

しかしながら、地球生物圏を大地の女神にみたてて礼賛するだけでは、悪しき科学的神秘思想におちいります。それよりももっと大切な発見があります。それは、ヘシオドスのいうガイアこ

そ、地球生物圏のシステムのことだったのではないか、ということです。

こうしてガイアは、じつに二七〇〇年という時をこえ、私たちにもっとも大切なものとして再発見されることになります。

もちろん、ガイアだけがよみがえったのではありません。ヘシオドスのギリシャ神話にまつわるさまざまな謎もまた、よみがえることになりましょう。宇宙や人類や地球生物圏の、起源と生成をあかす不思議な物語として。

ガイアとは、地球生物圏のシステムでした。そのメイン・システムとなるものが、ゼウスとプロメテウスです。ゼウスは、地球生物圏の調節システムであり、プロメテウスは、進化システムとなるものです。

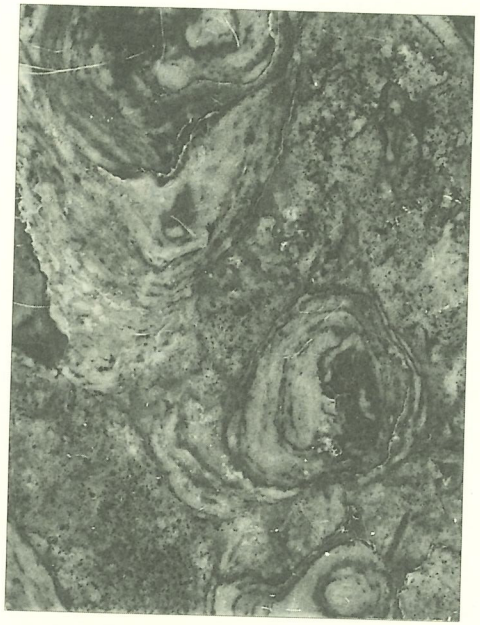
ヘシオドスはそういう地球生命史の記憶を、神話という形式をかりてあきらかにしたことになります。さて、それはいったい、どんな内容なのでしょう?

「語りたまえ」と、ヘシオドスが、ムーサたちに静かによびかけています。

神々と大地、それに河川と海、星と天空が、いったい、どのようにして生まれたのか。また神々の力がどのように配分されて、この世界ができるようになったのかを。

はじめから。物語りたまえ　それらのうちで原初に生じたものはなにかを。

1 原初に生じたもの



ガイアのなごりをとどめるストロマトライト化石

これらのことどもを　私に語りたまえ　オリュンポスにいるムーサたちよ
はじめから。物語りたまえ　それらのうちで原初に生じたものはなにかを

現代の創世神話

原初に生じたものはなにか？

「物語りたまえ」というヘシオドス（ヘーシオドス）の切実な呼びかけに対して、かのムーサたちの口からでてきたのは、

「カオス」
「ガイア」
「タルタロス」
「エロス」

の四つの言葉でした。これこそが「原初に生じたもの」だというのです。

でもこれでは、なんのことかよくわかりません。わたしたちには、これらの言葉を受けいれる態勢がととのっていないからです。

しかも、われわれ現代人はすでに、ひとつの宇宙創世物語をもっています。約一五〇億年前のビッグバンのことです。これが、受けいれの邪魔をしているかもしれません。最近このビッグバン仮説はぐらついているようです。ただ、その代案がまだよわいので生きながらえているといったところです。

この科学物語がなかなかすたれないのは、ほかにもわけがあります。それは、古代のユダヤ神話や、キリスト教の教義となんだか関係がふかいようにみえるからです。まず旧約バイブルの「創世記」にある、有名な文句があります。

神が「光あれよ」というと、光ができた。神はその光をみて、よしとした。神は光と闇との混合をわけた。

さらに紀元三世紀にはいり、キリスト教会がエクス・ニヒロ創造、すなわち「無からの創造」宇宙論を打ちだしています。

この物質世界は、悪にみちみちているため、不完全なようにみえます。神は全能ではないのか？　それになやんだ神学者たちは、宇宙について解釈しなおしました。こんな不完全な状態が永遠のものであるわけがない。ならば始まりと終末があるはず、と。

それで、無から創造された始まりの瞬間をもつ、というのです。

さて一九三一年、ルメートルというカトリックの神父でもある物理学者が、花火宇宙論なるものを、どーんと打ちあげました。

時間をずうっとさかのぼるほど、このわれわれの宇宙はどんどん小さくなっている。だから、

宇宙には最初がある。それは、神の創造した「原始アトム」、密度の高い一大原子核であった、というものです。

そしてこの原始アトムは、夜空に咲く打ちあげ花火みたいに爆発して、どんどん分裂していきます。それにともなって、宇宙はどんどん膨張していきます。その分裂が何百回もくりかえされて、ついに今日の宇宙となったのだ、と彼はいいます。

これこそ、ビッグバン宇宙論の初期モデルなのでした。

ルメートル神父が、こんな花火宇宙論を提唱したのには、おおきな理由がありました。それは、天体物理学の成果と、バイブルのいう「光あれよ」と、キリスト教会の「無からの創造」。この三つを結合させたかったのです。

やがて「花火」は「火の玉」にかわります。一九五〇年、物理学者ガモフは、火の玉宇宙論のやさしい解説書『宇宙の創造』を、世界中にひろめました。

それによると、はじめに、物質の密度が最大で超高温の、火の玉のときがありました。宇宙はまばゆいばかりの光でした。そうして膨張しながら冷えていき、現在のような宇宙になったということです。

現在のわれわれの常識もこんなところでしょうか。

これを読んで、もっとも喜んだのはローマ教皇ピオ十二世でした。やり手として知られる教皇

はさっそく翌年、声明を発表します。

「現代科学は長い世紀をいっきょにさかのぼり、『光あれよ』との神の言葉が発せられた最初の瞬間の証人となることに成功した。そのとき、物質とともに無から光と放射が吹きだし、一方、元素の粒子は分裂し、無数の銀河をつくった」

そして教皇は「それゆえ神はある！」とぬけ目なく宣言したのです。まさにユダヤ神話とキリスト教教義の勝利です。

まず原初にカオスが生じた

しかしながら、異様な神話であるギリシャ神話においては、そのように、この宇宙を無から創造する神なんかいません。誰も「光あれよ」とは言ってくれません。ギリシャ神話からは、花火も火の玉も、ビッグバンもでてきそうにありません。

それならギリシャ神話なんか無視すべきでしょうか？　いや、現在のビッグバン宇宙論に欠陥があるのは確かです。それを補足したり、あるいはそれにかわりうる宇宙論が必要でしょう。ギリシャ神話は、その参考になるかもしれません。

しかし、それよりももっと大切なことがあります。

それは宇宙の最初よりも、もっと最初のことです。といっても、ビッグバン以前をいうのではありません。われわれにとって、そして宇宙にとっても、宇宙の最初よりもはるかに重大な最初、あるいは原初といったほうがいいでしょう。

では、その最初、いや原初に生じたものはなんだというのでしょう？

まず原初にカオスが生じた　さてつぎに
胸はばひろいガイアと
道ひろい大地の奥底におぼろなタルタロス
さらに不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。

ヘシオドスのよびかけに対して、ムーサたちは、このように語りはじめたのです。カオス、ガイアとタルタロス、そしてエロス（エロース）の四つ。これこそが「原初に生じたもの」だといいます。

これは、ヘシオドスがはじめて明らかにしたことでした。

ホメロス（ホメーロス）の物語とは、まったくちがっています。ホメロスの『イーリアス』に

おいては、オケアノス（オーケアノス）すなわち大洋＝オーシャンが、神々や人間の起源だとされていました。

ムーサたちは、それを「いつわり」として、はっきりしりぞけたのです。

かわりにムーサたちの胸の奥から口へとはきだされたのは、それまでに聞いたこともない不思議な言葉。それがまず「カオス」（クハオス）でした。これもホメロスにはない。まったく新しい言葉なのです。

カオスというと、ふつうは混沌を意味していますね。最初に混沌があり、そこから秩序が形成されていったと、おおくの神話ものべているようです。

混沌（カオス）から秩序（コスモス）へ。ギリシャ神話も、これとおなじだと考えたくなるでしょう。でも、ちょっとちがうようです。カオスが混沌をさすようになるのは、ずっと後のことだからです。ヘシオドスのいうカオスは、混沌ではありません。

ともかく、カオスというのは、混沌ではない不思議な何者かです。しかも、です。はじめにカオスありき、などとも言ってはいません。「まず原初にカオスが生じた」とあります。あったのではなく「生じた」のです。たいした違いではないようにみえるかもしれません。そんな重箱のすみをつついてどうなる？　と思われることでしょう。

カオスが混沌でなくても、そのような、モノあるいは状態なら、カオスありきでいいでしょう。

しかしカオスとは、そういうものではありません。

カオスとは、もともと、

「大口をあける、あくびをする」

ということでした。

カオスを英訳するなら、ＣＨＡＯＳではなくて、ＹＡＷＮになりましょう。あくびをする、ふち・割れ目などがおおきく開く、といった意味です。

漢字にあてるなら「欠」。われること、また、人が口をあけているさまをいいます。欠伸といえば、あくびと、のびです。

カオスをもうすこし正確に発音すると「クハオス」となります。「カ」は気息音ｈをともなうｃで、むしろクハァというのです。それで、さきにカオスのあとに（クハオス）と書いたのでした。

あくびをしたときに、のどの奥からクハーッホゥーというような音がでますね。その音を古代ギリシャ風に表記するとクハオスです。

ただし気息音といっても、ビッグバンのような破裂がおこるのではない。あくびをするとき大口をあける、そのおおきな開きの感触をしめすものです。

ムーサたちが「まず原初に」とのべたあとで、「クハオス」と大口をひらく様子を思いうかべてください。うつくしくも滑稽なので、大笑いしたくなるかもしれません。でも、これはいったい、

どういう事態なのでしょう？

まず原初にひらくこと（カオス）が生じた。これを、まず最初に、ひらくこと、すなわち天地開闢（かいびゃく）が生じた、などとこじつけるとわからなくなります。

文学者の埴谷雄高は、その宇宙論的人間論で、「のっぺらぼう」がおもわず「あくび」をすることにより、宇宙が創造されたなどといっています。こんな「ユーモアめかした真面目な」とらえ方のほうがよいかもしれません。

でも考えこむのはよして、つぎにすすんだほうがいいでしょう。あとでふり返ればわかることがおおいものです。

宇宙の四つ組み

さて、カオスのつぎにガイア（大地）とタルタロスが生じます。これは「と」でつながれており、同時だということに注目しましょう。ただ同時だというだけでなく、この二つの間には、なにか関係がありそうです。

タルタロスは「大地の奥底」に、すなわちガイアの奥底のほうに、あるといいます。ならガイアは奥底の反対で、表面にあることになります。この、表面―奥底の関係というのは、なんとなくわかるでしょう。

そして、つぎにエロスが生じます。このエロスも、私たちはなんとなく、愛欲のように思いがちですね。しかし愛欲ならむしろ、カオスの子である女神・夜の、そのまた不吉な子たちのひとり、ピロテスのほうにあてはまります。だからエロスは愛欲とはいえません。カオス同様、エロスもわかりにくい。

とはいえ、エロスの性格はのべられています。「神々のうちでも並びなく美しい」のでした。さらに「よろずの者の　胸うちの思慮と考えぶかい心をうちひしぐ」ともいうのがエロスです。エロスには、さからえない引力のような魅力が感じられます。

どうやら、カオスとエロスは反対の性格をもっているらしい、ということがわかってきました。エロスが引力なら、カオスは反発力。カオスはあくびして口をひらくのでした。なら、エロスは口をとじることになるでしょう。

カオスが、なにかひらく・わける感じがするのに対し、エロスの魅力は、それをふたたびむすびつけるような感じがします。カオスとエロスは、反感と共感、あるいは分裂と結合の関係にあるといえます。

ここで先まわりして、次のような見立て図をえがいてみましょう。あくまで見立て、メタファ

1（隠喩）です。

地球を思いうかべてください。地球には、球状の表面があり、奥底には中心がありますね。その表面と中心は、ある力によってへだてられているとします。一方、表面と中心をむすぶ力もあります。こうして地球の形がたもたれることになります。

でも、地球でなくてもかまいません。もっと単純にすれば球体です。その球の表面をガイア。中心をタルタロス。表面と中心をひらく分裂力をカオス。むすぶ結合力をエロス。このように名づけてみましょう。

さきほど、ガイアとタルタロスが同時に生じたとのべました。しかし、こうみると、これら四つが、原初に同時に生じたともいえます。

それで、まずカオスの分裂力がはたらき、つぎにガイアとタルタロス、つまり表面と奥底にわかれます。さらに、ガイアとタルタロスの間にエロスの結合力がはたらく、という順序になったのだというわけです。

でも、それが何から生じたのかは言っていない。ならば、無から生じたのでしょうか？

いえ、何から生じてもいいのです。無だろうが、何だろうが、どうでもよい。とにかく生じた、そして生じているのです。

このあまりにも意外な真実こそ、かのムーサたちがヘシオドスにさとした、この宇宙の原初の

記憶、究極の秘密なのでした。

ムーサたちの原初についての教え。それは、ただ単に宇宙の始まりについてだけ、のべているわけではありません。なぜならそんなものは、とおいとおい昔に「すでに生じたことがら」でしかないからです。

カオス・ガイア・タルタロス・エロスの四つ組みは、それで消滅してしまったわけではありません。そのあとだって、宇宙球のような力としてずっと活動しつづけるのです。とりわけ、ガイアを舞台として、神々や人間は生まれ、活躍し、エロスにより結合しつづけます。

そう、宇宙の始まりはまた、そのまま「今あること」の始まりでもあるのです。さらに「このさき起こること」の始まりでもあります。つまり出発点としての始まりと、そのあとに起こりつづける・すべてのことの始まりを、一切ひっくるめた原初。

この、滑稽でありながらおそるべき、しかもうつくしい、そんな原初に生じることの構造についてこそ、ムーサたちはまず語ったのです。

生きている惑星

カオス・ガイア・タルタロス・エロス。

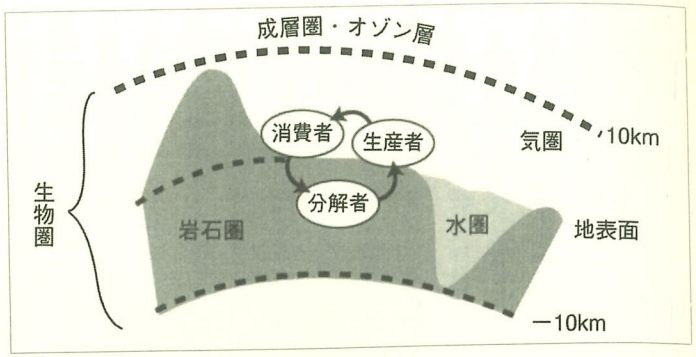
この四つ組みは、宇宙のもとのもの（原理）として、いろいろな形で、いつでもどこにでもはたらいています。もちろん、いま現在にだって。さらに宇宙大のガイアだって、また極微なガイアだってあるでしょう。

けれどもそのなかでも、いちばん親しみがわくのは、やはりわたしたちの身のまわりにあるガイアでしょう。地球上のあらゆる生き物たちと人類のいる、大地（地球生物圏のシステム）としてのガイアです。

しかし、そのガイアはただの土地、大地の女神ではありません。それはそのまま、星たちや太陽や月でもあり、そしてまた地球でもあるようなのです。ガイアには、そのまま星や太陽や月などがかさなっています。

このようなガイアこそ、ムーサたちの最高の贈り物ではないでしょうか。そしてこの地球上では、以上のべてきた、さまざまな宇宙の秘密が、もっとも複雑なかたちであらわれているのです。

ガイアのことを、ムーサたちは「道ひろい大地」とも説明していました。大地が、ひろい道であるとは、なにを言おうとしているのでしょうか。



地球生物圏

大地というと、まず思いうかべるのは陸地や土壌でしょう。でも、「道ひろい」というからには、それだけのものではないはずです。道としての大地、もっともひろい意味での大地を考えてみましょう。

地球の表面、大気圏の最上層部と岩石圏の最下層部にまたがる領域をみてください。ここでは、土があるだけでなく海もあり、水が流れ、太陽の光がそそぎ、風がふいています。そしてそれらが混合して、みごとに一体をなしています。

ここには「自然万有の四つの根」がそろっています。古代ギリシャの自然論者エンペドクレースのいう四つの根です。その四つとは「火・空気・水・土」をいいます。太陽光は火にあたり、風は空気にあたります。

これら四つの根が混合してこそ大地、ガイアといえるのではないでしょうか。

その範囲は、だいたい海面の上下一万メートルくらいで

しょう。地球の半径の三〇〇分の一程度の厚さです。そして、その生きた薄い膜状の場所に、地球の生き物たちがくらしています。それを、大地とよぶのではまぎらわしい。

そこで現在では地球生物圏（バイオスフェア）とよんでいます。

そのなかで、つぎつぎとたくさんの生き物がうまれでては、死んでいきます。また、たがいに競争したり共生したりして、進化してきました。その薄い膜において、生きた地球がたえずつくりなおされています。

そういう創造的な道筋そのもの、それが大地（クトーン）です。したがって、大地は目にみえるものではありません。透明な一筋の働きのようなものです。

それでガイアを「道ひろい大地」ともよぶわけです。それは生き物たちが存続していく大道であり本道です。なかには脇道、抜け道、裏道もあるでしょう。しかしそれは大道あってのことです。

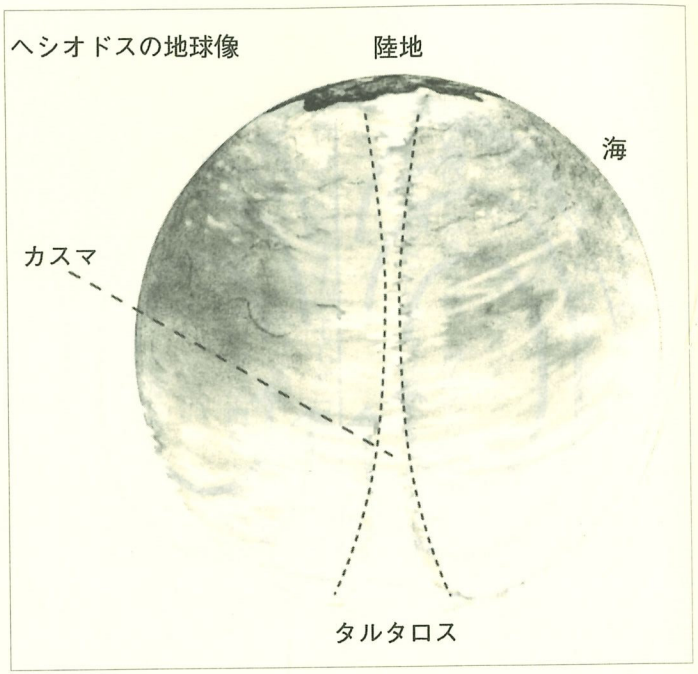
そのひろい道は、地球上の生き物たちが生きていく方法・手段としての、道でもありましょう。それこそが、ガイアです。

さて、このガイアの奥底のほうにあるというのがタルタロスでした。さきほどは、地球の中心がタルタロスだといいました。そこにはコア（核）があります。それがタルタロスにあたります。

ただしヘシオドスは、そんなこと知らないかもしれません。ならば、どんな風に彼は感じていたか想像してみましょう。

図のように、球体のようなものがあります。その球体の上面のほうが陸地のおおい部分です。そこから下のほうの球面は海におおわれています。そしてその海の彼方の下面、いちばん奥底にタルタロスがあります。

ガイアとその奥底のタルタロスとの間には、天と地ほどの距離があるのだと、ムーサたちはいいます。これは球の直径の距離にあたります。さらに、そこには巨大なカスマ（裂け目、怪

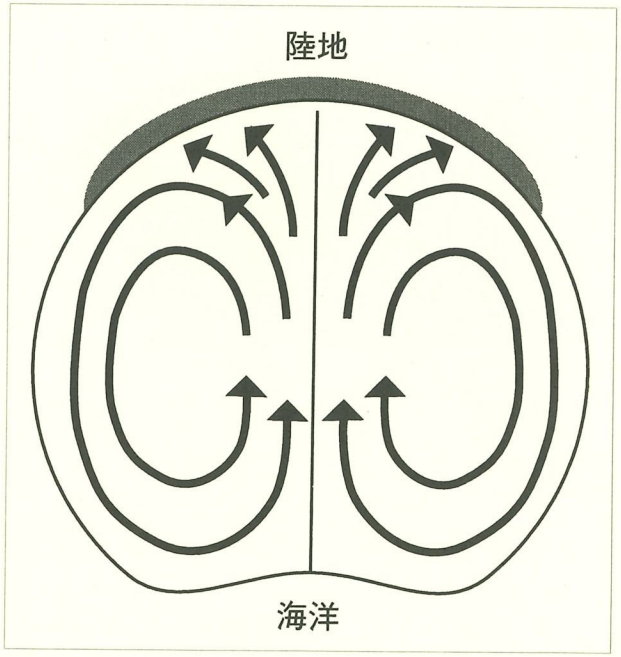


ヘシオドスの地球像

しいもの）があるともいいます。このカスマとは、カオスの別名であり、カオスのポイントです。

このカオスが、ガイアとタルタロスをへだてわけていることが、はっきりしました。でも、こんなのが地球の姿だなんて、内心あきれているでしょう。

ところが、です。これは、コアができる前の地球の姿、地球が生成された初期のモデルの一つとよくにているのです。地殻・マントル・コアの三つにまだわかれていないこ



地球生成の初期モデル（月の段階の地球）

ろの地球です。

図のように、ぐるぐると循環する対流のため、上向きの流れにともなって、内部にあるどろどろした溶岩性の物質が地表にでてきます。そして、そこにおおきな陸地がつくられていきます。またその反対側は、へこんでおおきな海洋となります。

この状態のままとどまったのが月です。

わたしたちからみえる月の半球、つまりウサギのいるほうは、海水のない海洋になっています。また、みえない裏側の半球は、陸地になっています。わたしたちは月のタルタロス側をみていることになります。

これに対して地球は、月の段階をこえて発達していきます。そしてコアをもつことになります。ヘシオドスも知らないうちに、タルタロスが中心にうつったわけです。

大きさは、地球の半分くらい。その核（コア）はまた内外ふたつ、内核・外核にわかれています。

外核は金属性の液体になっています。それに対し、内核のほうは固体になっています。その固体の内核のほうこそ、タルタロスとよんでいいでしょう。大きさは、月とおなじくらいです。

この内核の上に外核があり、その上にマントルのようにかぶさってマントル層があり、岩石圏があります。そしてさらに生物圏がかぶさります。

生物圏と内核の間には、上から順番に、岩石圏・マントル層・外核があるわけです。このうちカオスのポイント、カスマにあたりそうなのは外核でしょう。この液体金属の外核があるために、地球は生きた惑星とよばれるようになるからです。

たしかに外核の内部には、夜闇のうごめきのような、動きや流れがあります。ムーサたちは、カオスには、ニュクス（夜）とエレボス（闇）という子どもがいるといいますが、それをおもわせます。それは、金属性の液体の流れであり、はげしい電子の流れをともなっています。液体の静かな流れがエレボスで、電子のはげしい流れがニュクスでしょうか？

ともかくなぜ、このような流れがあるのか。その原動力はカオスだといわれています。最近の物理学でいうカオス（軌道不安定性）は、初期の条件がわずかにちがうと、その違いがどんどん拡大されていく、というものです。ムーサたちのいうカオスとにています。

そのカオスによる流れが発電機となり、電流が巨大な電磁石をつくります。そして、それによって地球磁場ができます。こうしてコンパスが北をさすことができるわけです。

しかしです。このような磁場は、地球のような岩石性天体（地球型惑星）には、本来みられないものなのです。

たしかに水星、金星、火星、月といった岩石性天体には、磁場がほとんどありません。どれも地球の一万分のいくつか、あるいはそれ以下なのです。これらの天体には、液体の核もないとみ

られています。

だから地球だけが例外なのであり、それで、

「生きた惑星」

ともよばれています。固体の内核と液体の外核があり、しかも外核のなかで液体や電気が流れていて磁気をだしているのは、なんと、私たちのこの地球だけだったのです。

二七億年前の巨大事件

地球は生きている！

しかも地球磁場はさらに、生物たちにとって、もっと大切なものをもたらしています。それは、磁気圏です。

地球表面よりずっと上の、超高層（バンアレン帯）にまではりだした磁場によってつくられる、磁気圏です。この磁気圏は、太陽からふきだしてくるはげしい太陽風から、地球をまもるバリアとなっています。

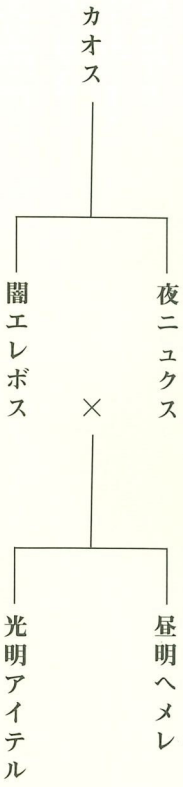
皆既日食のとき、黒い太陽のまわりに、絹の光沢をしたコロナがあるのを写真などでみたこと

があるでしょう。そこからふきだすガス、プラズマ（電子と陽子の集団）の流れを、太陽風といいます。ハレー彗星がながい尾をひくのも、太陽風のせいです。この太陽風は、冥王星のはるか遠くまでふいていきます。

このプラズマ流は、秒速五〇〇キロメートルという猛烈なものです。これがもろに地表をおそえば、どうなるでしょう。地球上の生物たちは、陸地はもちろん、浅い海でも生きていくことはできません。

生物たちは、太陽の光のとどかない闇（エレボス）のなかで、ひっそりとくらすほかないのです。生物たちにとって昼はありません。そして磁気バリアーのできる以前の生物たちには、まさに夜（ニュクス）しかありませんでした。

ところでムーサたちは、エレボス（闇）とニュクス（夜）との間に、高空の光明エーテルであるアイテル（アイテール）と、昼間の明るさであるヘメレ（ヘーメーレ）が生まれたとしています。



エレボスとニュクスは、地球磁気をおこす外核の流れを背景としています。磁気バリアができる以前の生き物たちにとっての、闇と夜です。

その外核の流れにより磁場が発生し、高空の磁気圏アイテルがうまれます。そして、磁気のバリアによって、はじめて生物たちに、生きる光明アイテルと昼間の明るさヘメレがもたらされます。夜から昼が生まれるという異常な表現は、こういうことをさしていたのです。

この不思議な事件がおきたのは、二七億年ほど前のころとみられています。

このとき、地球につよい磁場が誕生しているからです。

またこのとき、光合成をして酸素をだす微生物も、浅い海にあらわれています。

さらにこのとき、地球中心に固体の内核もできています。

地球磁場・固体内核・光合成微生物。不思議なことに、どれも、おなじ二七億年前にあらわれたようです。

もちろん、この二七億年前より以前にも、地球には微生物がいたことはいました。高温・強い酸性・無酸素というひどい環境で、硫黄や鉄などをたべながら、ほそぼそと生きていました。

太古の火星も、水があったようなので、やはりそうであったのでしょう。けれども、火星ではそれがつづきませんでした。磁気バリアがなかったため、火星生物圏は、その後とだえてしまい

ました。

この二七億年前の巨大事件がなければ、地球もまた、火星とおなじようになっていたはずです。もしそうなっていたら、わたしたち人類も生物もこの地上にいませんでした。そして宇宙のはじまりについて頭をなやますこともなかったでしょう。

ならば宇宙のはじまりは、ないも同然ですね。

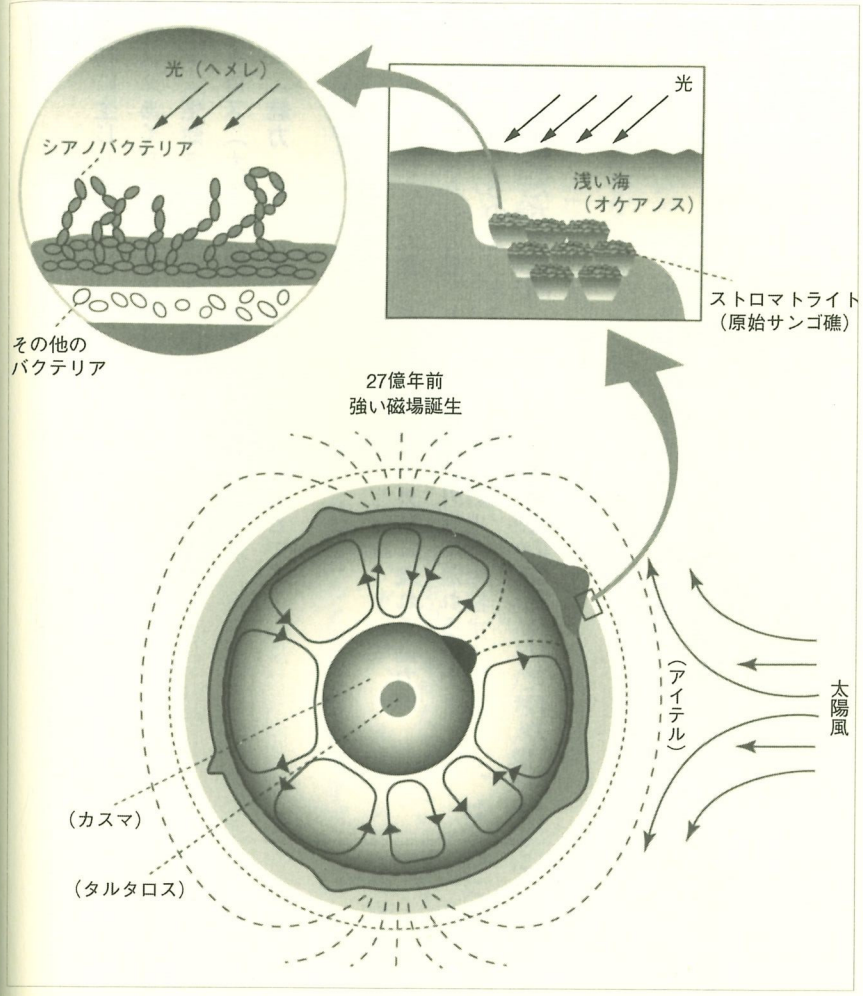
だから二七億年前の地球、このときこそ、現在のわたしたち人類や生物にとって、ほんとうの原初といえるのではないでしょうか。それは生物が誕生するよりも、はるかにむずかしいことでした。そして宇宙の誕生とならぶほどの、大変な宇宙的大事件だったといえます。

そしてこの地球という場所に大規模に、カオス、ガイア、タルタロス、エロスという、四つ組みの宇宙力があらわれたのも、二七億年ほど前のころとみられるのです。

○原初に生じたもの
カオス（あくび　あるいはひらくこと）
ガイア（生命ある大地　あるいは表層）
タルタロス（大地の奥底　あるいは内核）
エロス（魅力　あるいは結びまとめあげること）

○カオスの子・孫たち
ニュクス（生物たちの夜　あるいは地球の外核に流れる動力）
エレボス（生物たちの闇　あるいは地球の外核に流れる静力）
ヘメレ（生物たちの昼　あるいは太陽光）
アイテル（生物たちの光明　あるいは地球高層の磁気バリアの力）

2　ガイアの最初の子たち



27億年前の大事件

だがひろい大地は　腹いっぱいにつめこまれて心のうちで
うめいていた　そこでまがまがしくも意地悪い計略をたくらんだ

緑色じみた泥のかたまりの化け物

ガイアは　まずはじめに彼女自身とおなじ大きさの
星ちりばめるウラノス（天）をうんだ　天がガイアをすっかりおおいつくし
さきわう神々の　とこしえにゆるぎない御座となるようにと。
またガイアは　高い山々をうんだ
緑こい山々にすむニンフたちのたのしい遊びの場所を。
また大波あれる不毛の海
ポントスをうんだ　よろこばしい情愛のちぎりもせずに。

ガイアは、まずはじめに天をうみました。相手もなしにひとりで。同じようにしてまた高い山々をうみ、海をうんだといいます。大地から天・山・海が誕生したというのは、ずいぶんおかしな感じがします。

しかし、原初の大地というものが、天・山・海とともに、いまだわかれていないで一体であった、ということなら理解できないことではありません。天でも山でも海でもあった大地。そしてそんな大地から、天・山・海がうまれた。

その謎をといてみることにします。

オーストラリア大陸の西岸、シャーク湾のハメリン・プールにでもいってみましょう。シャーク＝サメの湾は、世界遺産にも登録されている有名な地域です。大陸南西端の都市パースからバスにのり一〇時間以上という、不便なところにあります。

ハメリン・プールには、ある貴重な「生きている化石」が、地球上でもっとも大規模にあることで知られています。生きている化石とは、「大昔にさかえていた生物が、現在はなんらかのかたちで、おとろえて（ほそぼそと）生きのこっているもの」をいいます。

その場所の沖には海草の大森林がひろがっています。海草森がひきおこす化学反応や、さかんな蒸発により、海水の塩分がふつうの二倍。そのためこの生きた化石の天敵である貝類が生きられな

原始サンゴ礁の断面（ハメリン・プール）

い。それで、かろうじて生きのびられたのだといいます。

潮が満ち引きするあたりには、緑色じみた泥のかたまりが、ごろごろとあつまってマット状をなしているのがみられます。それは海亀の大群のようでもあり、巨大なブロッコリーのようでもあります。

ひとつのかたまりの直径は三〇センチほど。ぬめってどろどろして、硫黄のような臭いもします。鉱物のようでもあり、植物のようでもあり、動物のようでもある。なんだか不気味でいやな感じがしてきたかもしれません。

この化け物の正体は、何百種類もの微生物からなるコロニー（集団）です。

そのコロニーの内部にはカルシウム分がためこまれ、ドーム状にかたまっています。それがつもりつもっていって、球や円錐や円柱やブロッコリーの形をしたストロマトライト（ふとん石）になったのです。原始サンゴ礁のようなものともいえます。

このような生きている化石ストロマトライトは、西オーストラリアだけでなく、ほかでもみられます。フロリダ湾やその南東にあるバハマ諸島、ペルシャ湾、太平洋の環礁などがあげられています。

でも、わざわざ海外へ行く必要はありません。日本でも、島根県浜田市の畳ケ浦には、まるい腰掛けをおいたようなものが多数ならんで奇怪な風景をなしています。これはストロマトライト

ではありませんが、外形だけはなんだかよくにています。

本物のストロマトライトはちいさな規模ながら、宮城県の鬼首温泉の地獄地帯などで発見されています。また草津温泉（群馬県）の湯畑や、中房温泉（長野県）、平湯温泉（岐阜県）など各地の温泉にみられるイデユコゴメも、それにちかいものです。

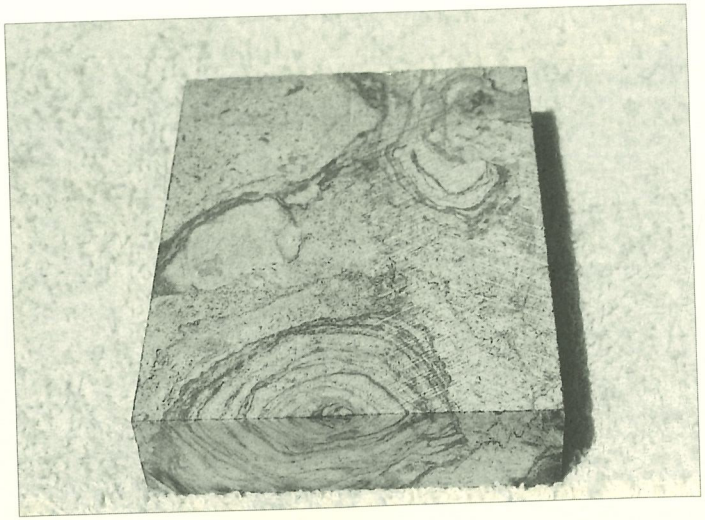
いずれも環境がきびしくて、ほかの生物がくらしにくいような場所です。そういう場所にこそ、生きている化石がいます。では、このストロマトライトは、いったいなんの「生きている化石」だというのでしょう？

これこそ、太古のガイアのなごりなのでした。

この生きている化石をなす微生物群のうちで、もっとも重要な働きをしているもの。それは、いちばん表面の層にあって青緑色の糸状になった微生物です。それは、「青緑バクテリア」（シアノバクテリア）とよばれています。

青緑バクテリアは、昔は「らん藻」とよばれていました。らん色（あい色）、すなわち青緑色をした藻みたいにみえるものだったからです。ただし藻とはいっても植物の藻ではありません。あくまで微生物なのです。

ただしこの微生物の細胞には核がありません。といっても、ＤＮＡがないというのではなく、ＤＮＡが膜でかこまれていないという意味です。



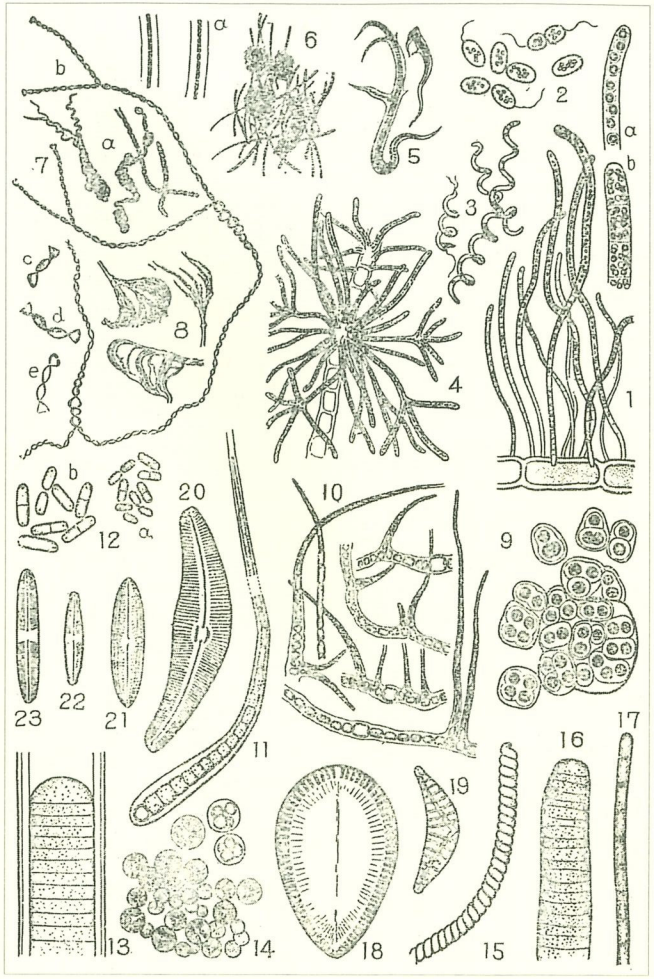
ストロマトライトの石材

この核がない微生物を、前核（ぜんかく）生物といいます（ちなみに現在いる生物のほとんどは細胞のなかに核があり、真核生物という）。原核生物ともよばれますが、これではわかりにくい。核以前という意味の、前核生物のほうがただしい呼び名です。

とにかく核がないということは、とても古いタイプの微生物であることを意味しています。

もちろん、この生きた化石が文字どおりの化石となったものが、世界各地の大陸中央部から発掘されています。しかもそれらは渦巻き石灰岩とよばれる石材となって、あちこちのビルの床や壁にかざられています。東京新宿のホテルセンチュリーハイアットと第一生命ビルをつなぐホールの床に

草津温泉の湯畑にみられるイデユコゴメ



温泉バクテリア（9～17　青緑バクテリア類）

は、びっしりとしきつめられています。

その化石のうちでもっとも古いのが、シャーク湾より北東五〇〇キロ以上はなれた、大陸の西北岸ピルバラ地域の、赤茶けた炎熱の砂漠で発見されています。一〇〇キロメートルにわたって地面に露出しているというから、すごい規模です。

この原始サンゴ礁の化石は、およそ二七億年前からのものとされています。

そう、なぜか地球の磁場が急につよくなったという、あの謎の二七億年前のものなのです。この時期から、太陽からの強烈な微粒子の風がさえぎられるようになりました。

それで微生物たちは、ようやく浅い海にのりだして、太陽の光をあびられるようになります。そして、そのいちばん上の層にいた青緑バクテリアこそ、地球上ではじめて光合成というバイオテクノロジーを開発しぬいた微生物だったのでした。

光合成とは、光により水と炭酸ガスから、ぶどう糖などの糖分を合成することだといいます。教科書ではそれでいいのでしょう。でも、こんな説明ではどうもぴんときません。光合成とは、光のエネルギーを糖分にかえてためこむこと、といえばわかりやすい。

ぶどう糖にしろ砂糖にしろ、またでん粉にしろ、もとは光エネルギーの塊でした。わたしたちがご飯をたべるのも、そのエネルギーの塊をたべていることになります。青緑バクテリアは、太陽光のエネルギーの塊をたくわえる能力をもつ微生物なのでした。

天・山・海、その誕生の秘密

原始サンゴ礁は浅い海にどんどんふえていきました。

そうして生き物たちが目にみえて繁殖するようになる、五億年ほど前のカンブリア時代にはいるまでに、地球上のあらゆる浅い海の底をうずめつくしてしまいました。水面から二〇〇メートル以内。太陽の光のとどく浅海底です。

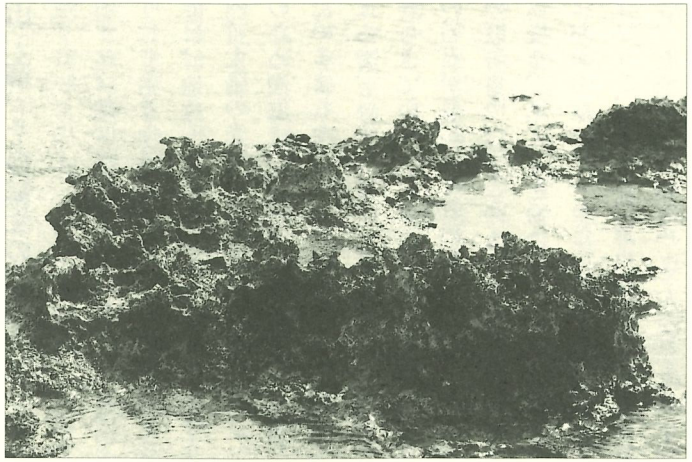
そのため浅海は、どろどろになっていました。そして、そのドロドロに太陽からの光エネルギーがためこまれた。それが、ガイアの太古の姿だったというわけです。

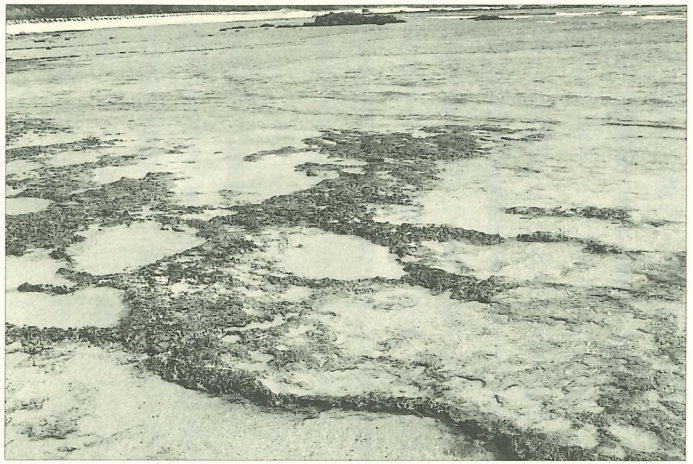
ところで、いまのべた「カンブリア」という奇妙な名称は、イギリスのウェールズ地方の古い地名からきています。ケルト語で同郷人を意味しています。この地方で、五億五〇〇〇万〜五億年前の岩石が最初にみとめられました。それでこの時代をカンブリアといいます。

昔の教科書では、このカンブリア時代より以前の化石はないとされていました。それでカンブリア以後を、見える生物の時代（顕生代）といいます。それほどこの時代から生物の化石の量が急激におおくなっているということを表現する言葉です。

カンブリア、それは地球生物の大繁栄のはじめをいわう歓声でもあります。

でも、原始サンゴ礁は、そんな見える生物の時代よりずっと前に、大繁栄していたのでした。





サンゴ礁（奄美大島土浜）

それは、見えない生物の時代にさかえた生物だともいえます。

当時は、地磁気のバリアにより、猛烈な太陽風の攻撃がさえぎられたとはいえ、昼光へメレの紫外線はまだまだ強烈でした。なんと現在の一〇〇倍以上です。その紫外線に遺伝子の核酸はよわい。このままでは遺伝子がこわされてしまいます。

そこで紫外線のバリアがうみだされます。

原始サンゴ礁は、さや・粘液・土砂からなるバリアにつつまれます。それで紫外線をカットすることができました。そのバリアこそ、ガイアがひとりでうんだ子、ウラノスの初期の状態にあたります。

ここで、最初の天・山・海の誕生の話にもどることにしましょう。

ウラノスは「ガイア自身とおなじ大きさ」であり、また「ウラノスがガイアをすっかりおおいつくし」ていた、とムーサたちはいいます。まさにバリアです。

だから天とはいうものの、このときのウラノスは、まだ大空のかなたの、あの「天」になってはいません。あくまで、ガイアをおおいつくす紫外線バリアでした。

ところが、男根が切断されるという奇怪な大事件がおきて、ウラノスはほんとうに天になってしまいます。これについては、後でくわしくのべます。

ガイアはまた、山々をうみました。この山々とは、原始サンゴ礁においてどんどん下にためこ

まれていくカルシウム分、石灰岩のことです。もちろん、これだけではまだ山々とはいえません。

しかし、この石灰岩の地層はどんどんつもっていきます。そうして厚さが数キロにもおよぶことさえあります。厚くつもっていくぶん、海底が徐々にしずんでいったからです。チリもつもれば山となる。そうして海底に大山脈ができました。

これが地殻の大運動でもりあがり、陸上の巨大な山系となったのがアルプスやヒマラヤなのです。事実、エベレスト山は石灰岩の塊りです。しかも頂上から数百メートルまでのあたらしい層では、カンブリア時代のウミユリなどの化石さえみつかっています。

ヒマラヤやアルプスは、海（テーチス海）の下にあったのでした。これらの山々も、ガイアがうんだみたいなものです。

ギリシャの土地というのも、その八割が、そんな石灰岩からなるそうです。

古代ギリシャ人たちは、岩石の中から海の貝ガラがでてくるのにも気づいていました。歴史の父といわれるヘロドトスも、足もとの土地が海底につもった土砂から生じたと、はっきり書いています。

ガイアはまた、ポントス（海）をうみました。海といっても、ふつうの海ではありません。「大波あれる不毛の海」であるといいます。

大波あれるというのは、ガイアの外、外洋のことでしょう。しかし不毛というのは、どういうことなのでしょうか。

ガイアは山々をうみだすために、海水からたくさんのミネラル成分をぬきとっていました。山々をつくるほどのカルシウム分も、もとは海水にとけこんでいたものです。それで大波あれる外洋の海は、ミネラル不足の不毛の海となってしまったのです。

これで大地ガイアから、天・山・海が誕生した謎がとけました。

それらは、紫外線バリアであり、石灰岩の塊であり、またミネラル成分のうすくなった原始海洋でした。ガイアはさらに、さまざまな種類の子たちをうんでいきます。

ガイアとウラノスの子たち

ガイアは、ウラノス（ウーラノス）との間にたくさんの子どもたちをうみます。今度は相手なしではなく、自分の子、ウラノスが相手です。自分の子との間に子がうまれたなんて、あまりにも異常な感じがすることでしょう。

でも、ウラノスが、ガイアの紫外線バリアだとわかりました。だから、どうということありません。

ガイアとウラノスとの間の子たちをティタン（ティーターン）といいます。そこから金属のチタンという名ができています。とはいえティタンは金属とはまったく関係ありません。

ティタンとは、王のことです。しかしヘシオドスは「ティタンが王であること」を無視して、ウラノスが子どもたちをののしって、ティタンとよんだのだと説明しています。向こう見ずにもウラノスにむかって手いたくティタイノ（手をのばす）して反抗したからだそうです。

ウラノスに添い寝してうんだのは　ふかい渦のまくオケアノス（大洋）
コイオス　クレイオス　ヒュペリオン　イアペトス
テイアー　レイアー　テミス　ムネモシュネ
黄金の冠つけたポイベ　愛らしいテテュス
これらのあとから　末っ子　悪知恵たけたクロノス

反抗する子たちのうち、注目したいのはまず十二体。これもムーサたちが、ヘシオドスにはじめてあかしたことです。

それぞれオケアノス、コイオス、クレイオス、ヒュペリオン、イアペトス、テイアー、レイアー、テミス、ムネモシュネ、ポイベ、テテュス、そうして末っ子がクロノスと名づけられています。

とてもおぼえきれない神名がずらずらならんでいます。でもこれは、以下にのべるように、ただの名前ではありません。

ガイアとウラノスとの間に子たちができるというのは、つまり、ウラノスの紫外線バリアができることによって、ガイアが進化したということでしょう。

その進化したガイアの機能が、上にあげた子たちの名前によってあらわされているのです。またその機能が、ウラノスのバリアにティタイノして反抗したことになるわけです。それでは、その反抗する子たちを見ていきましょう。

○男神オケアノス（オーケアノス）

オーシャンの語源であるこの神は「ふかい渦のまく大洋」です。ただしこれは、さきのポントス（不毛の海）とはちがう海です。外洋ではなく、大陸の周囲をとりまいてながれる、大河のような海流です。

古代ギリシャ人は、世界には大陸がひとつだけあり、周囲をオケアノスが循環しているという世界モデルをえがいていました。

でも、このモデルを無知のせいとしてわらうわけにはいきません。

現代の科学だって、四〇～二〇億年前の地球モデルの一つとして、これと似たものをえがいています。古大陸は、現在のようにバラバラに分散しているのではなく、ひとつにまとまっていたとするのです。

このモデルでは、地球は陸半球と海半球におおきくわかれています。そして海は陸半球のまわりを、ぐるりととりかこんで循環しています。この海半球の原始大洋は、やがて太平洋に発展していくものとされています。

さて、陸半球のまわりのどろどろした浅い海にも、大河のようにながれる海流が循環しています。そこはまた、ガイアの居場所でもあります。オケアノスとは、大陸をとりまいて、循環している状態のガイアのことだったのです。

その意味でホメロスにおいて、オケアノスを世界の始まり、万物の父とするのは、そんなにマト外れではないともいえます。しかしオケアノスだけが、始まりなのではありません。オケアノスのほかにまだ、十一体もの子どもたちがいるからです。

○女神テテュス（テートュス）

オケアノスの連れあいです。

テテュスは、オケアノスより内側にあるどろどろした水域です。それは内海や、大陸水系という内部環境で循環しています。そしてこの女神の子たちは、河川・湖沼や泉になっていきます。たとえば娘オケアニデスは、後に生き物をやしないはぐくむことになる湧き水です。

なお、テテュスの名称は、地質学にまでとりいれられています。二億年前の中生代初期に超大陸パンゲア（パン・ガイア）があったとされています。その大陸の、おおきくいりこんだ湾が「テーチス海」とよばれています。

オケアノスとテテュスは、生命の海の大循環と小循環といえましょう。

○女神ムネモシュネ（ムネーモスュネー）

すでにのべたように、ムーサたちの母であり、生命の記憶です。生命記憶というと遺伝子をおもいうかべるかもしれません。たしかに青緑バクテリアとしてのガイアには遺伝子があります。その遺伝子がムネモシュネでしょうか。

いや、遺伝子は記憶というよりは記録装置です。そういう遺伝子の記録を、遺伝のための道具としてつかう、細胞内あるいは細胞群内の文化（伝統と創造）が、むしろムネモシュネです。

それはガイアの内にあって、変化しながらも一筋につたえられ、つむがれていく生命の糸です。

○女神テミス

テミスは、裁きの天秤をもつ正義と秩序の守護神として、西欧ではなじみのあるものです。書斎、学校、病院、法律事務所などに、目隠しをしたテミス像がよくおいてあります。長野県松本市の「はかり博物館」にもあります。

テミスは古代ギリシャ語で、掟・法・慣例をいいます。いいかえれば、ガイアの生命を積極的に維持していくための、自然法のようなルールです。

このテミスはのち、ゼウスの妻となります。

○男神イアペトス（イーアペトス）　男神クレイオス

イアペトスは、その四体の子どもたち（プロメテウス、アトラスほか）が、知性あるいは知能の四つの性格をもっています。またクレイオスは、くまなくてらす照明です。その三体の子どもたちが、思慮分別においてすべての者にぬきんでていたとされます。

このことから彼らは、ガイアの原初の知力をいうものとおもわれます。イアペトスについては、後でのべます。

このイアペトスやクレイオスが生命の文化の創造面ならば、テミスのほうは伝統面となります。そしてムネモシュネは、創造と伝統をまとめあげている働きということになります。

○女神テイアー　男神ヒュペリオン（フュペリーオーン）

テイアーは、神々しくひかるもの。ヒュペリオンは、高きをいくものをいいます。彼らの間には、太陽ヘリオス・月セレネ・曙エオスがうまれています。これには、あきれてしまうかもしれません。

でも、天体たちをうんだということではないのです。あくまで、ガイアの内なる天体のこと。これをわすれないようにしましょう。

これらは、生命にとって大事な時間、生命時間の起源を説明しているといえます。高きをいく神々しい太陽や月の運行がもたらす、神々しい宇宙リズムがガイアの内部にとりこまれます。そしてその体内でくりかえされています。

時間生物学によると、生物は内に一日とか一年、あるいは月の満ち欠けや潮の満ち引きのリズムをもっている。またそのリズムは日の出・日の入りの光の変化によって調節されるといいます。なにしろ青緑バクテリアにさえ、日周期リズムがあることが発見されています。ストロマトライトの内部にも、日周期、月周期、季節周期、年周期のどれかが、層状にきざまれています。

テイアー、ヒュペリオンとは、生体時間、あるいは体内時計のもととなる生命のリズムのことだといえます。

○男神コイオス　女神ポイベ（プホイベー）

コイオス、ポイベは、おおきな周期性、あるいは生命の微光のような未知の調和のちからといったところでしょうか。

彼らの間には、アステリアー（星空）と、神々のうちでもっとも柔和な、黒衣をまとうレートーがうまれています。このレートーもゼウスのつれ合いとなり、そしてアポロンとアルテミスの母となります。

○男神クロノス　女神レイアー

彼らの間には、ゼウスがうまれています。

恐るべき子、クロノス

クロノスとは、時のことです。

後世には、大鎌をもって人々をおびやかす、あの有名な時間の神クロノス像がえがかれています。しかしこれは誤解で、ここでのクロノスとは関係ありません。時といっても、私たちのえがく時間のイメージとは、まるでちがうものです。

鎌で想像するなら、穂のみごとにみのった麦の根株におしあてる収穫の鎌がいいでしょう。いつもはのどかな畑にも活気があふれ、人々もあたりの空気も躍動しています。

この活気と躍動を表現するのが、太古のクロノス祭なのでしょう。クロノスは、収穫の農業神として太古から農民のあいだでまつられていたのです。

クロノスでいう「時」とはライフ（生）のことであり、創造的な原動力、ぴちぴちとした生命の活発な動きをいいます。

それはクロノスの兄や姉の神々がそろったうえではたらきだす、生きいきとした活動です。「悪知恵たけた」といっても悪ではなくて、アクティブなだけです。

生命の海の大小の循環、生命の文化の伝統と創造、生命のリズム、生命の調和的な周期の働き。これらのもとにクロノスが発動するわけです。

しかし父ウラノスは、この末っ子クロノスを「恐るべき者」としてひどく憎みました。それだけでなく、十二体およびその他の子たちの、すべてを恐れて憎みました。そうして、ことごとくガイアの腹の奥におしこんでしまいました。

父は　その子たちが生まれるかたっぱしから

みな大地の奥にかくしてしまい　光のなかにあがってこさせなかった。
天は　この悪事にうつつをぬかしていたのだ
だがひろい大地は　腹いっぱいにつめこまれて心のうちで
うめいていた　そこでまがまがしくも意地悪い計略をたくらんだ。

ウラノスはガイアの覆いでした。しかし、クロノスに代表される生の活発な活動は、その覆いをこわしかねない「恐るべき者」となります。それで、その活動はむりやり奥におしこまれてしまったわけです。

そのためガイアはうめき苦しみました。そうしてひどく腹をたてます。そこで「まがまがしくも意地悪い計略」をたくらむわけです。するどい歯のついた大鎌を用意して、子たちによびかけました。

「わたしとあのふらちな父から生まれた子たちよ。おまえたちがわたしの言うことをきいてくれるなら、わたしたちはあの非道なしわざに復讐することができるの。あの人がさきに、恥しらずなことをたくらんだのですからね」

子どもたちは、この言葉をきいてひるみます。あまりにも恐ろしいことです。しかし末っ子のクロノスは勇気をふるってこたえました。

「父とよぶにもいとわしいあの男のことなど、僕はいささかも気にとめていませんし、なにしろ、あいつのほうが先に恥しらずな仕業をたくらんだのですから」

ガイアはおおいによろこび、クロノスにするどい歯のついた大鎌をわたして密計をうちあけます。そしてクロノスを、隠れ場にひそませました。

おおいなるウラノスが夜をひきいてやってきた　そしてガイアのかたわらに身をのばし
その上全体にながながとおおいかぶさった　情愛をもとめながら。
そこで息子は　待ち伏せの場から左手をのばし
右手にはするどい歯のついたおおきな長い鎌をとって
すばやくわが父の陰部をかりとり
背後になげつければ　それはうしろへ飛んでいった。

やがてニュクス（夜）がやってきます。その夜とともにウラノスがやってきて、ガイアの上におおいかぶさります。そのとき、クロノスは隠れ場にひそんでいました。左手をそっとのばしてウラノスの男根をつかみます。そうして右手にもった大鎌で、なんと、それをちょんぎってしまったというのです。

猛毒の酸素とウラノスの変身

凶器をもったクロノスとは、いったい何なのでしょう?

それは猛毒の酸素です。十二の機能をもったガイアの活発な活動により排出された、酸素をしめしています。

光合成の働きにより、大量の酸素が発生します。その酸素が泡となってぶくぶくふきだせば、ガイアのバリアはどうなるか。なにしろ当時は、酸素というものがなかったのですからたまりません。

その酸素のため、ガイアをおおっている、さや・粘液・土砂（つまりウラノス）はたちまち酸化します。ぼろぼろに傷ついてこわれてしまいます。しかしまた、その酸素のおかげでこそ、ウラノスはおおきく変身することになります。

酸素はオゾンとなり、紫外線をさえぎるあらたなバリアが高空にできていきます。そう、オゾン層です。

こうしてウラノスは、上空はるか高いところにおしあげられ、オゾン層になります。男根を切断されたせいか、ウラノスは老人のような姿としてえがかれることになっています。それがすなわち「天」としてのウラノスです。

こうしてウラノスは、天を意味するようになったのです。

新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層
きらびやかな氷窒素のあたりから
すてきな化石を発掘したり

と、宮澤賢治も「春と修羅」の序文で、こんな謎めいたことを書いていました。「すてきな化石を発掘」するというのは、大気圏最上層のウラノスが、かつては原始サンゴ礁の上におおいかぶさっていたことを発見することなのでしょう。

さらに、天のオゾン層とガイアとの間には、あたらしく大気圏ができます。これまでの大気成分には酸素がありませんでした。酸素のある大気圏がすなわち「天空」です。それが、クロノスの子ゼウスとなっていきます。

○最初のガイア（緑色じみた泥のかたまりストロマトライト）

○ガイアの最初にうんだ子たち
ウラノス（天　またはガイア表面のバリア）
山（ガイアにたまったミネラル分）
海（ミネラル分のぬけた原始外洋）

○ガイアとウラノスの子たち
オケアノスとテテュス（循環する水の男神と女神　または原始大陸の周囲を循環する海流と大陸内部を循環する水系）
ムネモシュネ（記憶の女神　または生命の文化）
テミス（自然の掟・法・慣例の女神　または生命の文化を維持していくルール）
イアペトス、クレイオス（知の男神　または生命の文化を創造していく知的能力）
テイアー、ヒュペリオン（神々しくひかる女神、高きをいく男神　または生命リズム）
コイオスとポイベ（星空と柔和な黒衣の父母神　または調和的な周期性の力）
クロノスとレイアー（ゼウスの父母神）

○クロノス（時の男神　または生命の活発な躍動）
○クロノスの鎌（クロノスの男根を切断する凶器　または猛毒の酸素）
○切断されたウラノス（天　またはオゾン層）

3　根源悪の起源と破局への仕組み

ついで躁苦モモスといたましいうつ苦オイジュスをうんだ
暗い夜の女神がたれとひとつ床にはいることなく　うみたもうたのだ

カオスの子、夜（ニュクス）

クロノスの大鎌によって、大地ガイアから切りはなされたウラノスは、高い大空の天となりました。しかしウラノスがあがってしまったあと、暗黒の勢力がはびこることになるのだと、ムーサたちはいいます。

それが、夜ニュクス（ヌュクス）の子たちの誕生です。

ニュクスはそもそも、カオスの子でした。カオスからは、相手もなしにエレボスとニュクスがうまれたこともすでにのべました。エレボスは、死のような静寂・虚無としての、闇です。これに対してニュクスは、生の動乱・生成としての、夜です。

このように、エレボスとニュクスは、静と動、正反対の性質をもっています。

エレボスとニュクスは、カオスの本源の性質である、へだてわける分裂性をそのままうけついでいます。しかもそれがもっと具体的になっています。

つまりカオスのもつ分裂性が、正と反の対になってあらわれる。そして破局にすすみゆく悪の性質へと、よりはっきりとしていきます。

この破局は、一方では虚無へとむかい、もう一方では混沌へとむかいます。

虚無への破局は、分解し、破壊し、崩壊していく。いわゆるエントロピーの増大する方向でも

あります。そうして、ついにはすべての活力がうしなわれてしまい、光のとどかない闇、死のような静寂・虚無におわります。このような悪がエレボスです。

しかしながら、活力の減少だけが悪なのではありません。

その反対に、なまじ活力がありすぎるために、混沌（いわゆるカオス）へとむかう悪があります。それは、ねずみ算のように、むやみやたらに増殖していき、ついには爆発して混沌におわります。ガン細胞の増殖や、ウランの連鎖反応のようなものです。

そんな活力過剰の悪がニュクスの系統です。

なのに、このまがまがしいエレボスとニュクスの間には、アイテル（アイテール）とヘメレ（ヘーメーレー）がうまれたのでした。すなわち、高空の光明エーテルと昼間の明るさです。

アイテルは、ガイアのバリアとなる高空の磁気圏であり、ヘメレは、それによって生き物たちにとって親しみのあるものとなった昼光でした。アイテルはガイアの生命活動に光明をもたらし、ヘメレは昼間の活動をもたらしたわけです。

このエレボスとニュクスの結びは、よき掛け合わせといえましょう。

というと意外におもわれるかもしれません。でもマイナスとマイナスを掛け算すると、かえってプラスがうまれるようなものです。虚無と動乱とのよき交わり、あるいは破壊と増殖との和合です。

諸悪の勢力、ニュクスの子たち

しかしながら、ここでいうニュクスの子たちは、アイテルやヘメレとはまるでちがう、まがまがしいものばかりです。この子たちは、ニュクスがひとりで、相手もなしの無性生殖によって、まるで細胞分裂のようにしてうんだものなのです。

それは、ニュクスにまつわる悪のおのずからの展開であるともいえます。

これら悪の勢力は、混沌・動乱をひきおこす、はかりがたい巨大な力として、生き物の世界をすっぽりとつつみこんでいます。まるで意志をもっているかのような不思議な力であり、生き物たちの生存を圧倒するようにおびやかします。

まさに暗黒の勢力・悪鬼悪霊としかいいようがなさそうです。でも、あくまで神々なのです。ただしモノノケのような神々です。

ここで、そのニュクスの子たちをあげてみましょう。

○いまわしいモロス（死の報い）と、ケール（死の定め）と、タナトス（死）
　また死に関連して、
○ヒュプノス（眠り）と、オネイロス（夢）

ついで、
○モモス（非難、冷笑する陽気さ、躁状態）
○いたましいオイジュス（いたましい苦悩、うつ状態）
また、
○ヘスペリス（たそがれの娘）たち
また、
○モイラ（運命）の三女神（すなわち、運命の糸をつむぐクロト・運命をわかつラケシス・のがれえぬ定めアトロポス）
また、
○死すべきものにとってのわざわいネメシス（公の憤り）
まだまだあります。
○アパテ（欺瞞）
○ピロテス（愛欲）
○いまわしいゲラス（老い）
○かたくなな心のエリス（争い）

まず「死」です。しかも、死の報い・死の定め・死と、わざわざ三つにわけているなんて、じつに念入りなものです。

これは自然の死ではないということを意味しています。変死・横死です。寿命による自然死ではない。ここでいう死は、死への衝動とでもいえるものです。そういえばフロイトは、死の衝動のことをタナトスと名づけていました。

躁状態、うつ状態などというのもあります。これは心理としての躁うつというよりは、それをひきおこす、生の異常な興奮（躁）とその反動としての失調（うつ）です。

また、運命もモイラの三女神として、ていねいに三つにわけられています。これらは、運命をきりひらくというときの運命（立命）とはちがいます。むしろ死や苦悩の宿命のようなものでしょう。

ほかの神々もあわせて、以上のたたり神のような神々は、ほとんどが、生き物の生存にまつわるさまざまな苦悩であるといえます。それが、つぎつぎとうまれでてきたわけです。しかし、これで終わりではありません。

悪徳の母エリスとその子たち

ニュクスの子たちで最後にうまれでたのが、エリス（争い）です。そのエリスを母として、父なしでまたまた、まがまがしい子たちがうまれでてきます。もちろん争いの、おのずからの展開です。

○いたましいポノス（労苦）と、レテ（忘却）
○リモス（飢え）と、涙にみちたアルゴス（悲嘆）
○ヒュスミネ（戦闘）と、マケ（戦争）
○プホノス（殺害）と、アンドロタクシア（人殺し）と、ネイコス（紛争）
○プセウドス（虚言）と、ロゴス（理屈）と、アンピロギア（口争い）
○デュスノミア（不法・不正）
○アーテー（迷妄と、それにもとづくあて外れによる破滅）
また、
○誓い破りを容赦しないホルコス（誓い）

以上をみると、まさにエリスこそ悪徳の母という感じがすることでしょう。

なかでも迷妄アーテーは、仏教でいう無明や四苦八苦、キリスト教の原罪にもあたりそうな根源悪といえます。これらの悪徳は、人間社会だけのもののようにみえるかもしれません。

しかし、人間社会の言葉に翻訳すればこうなる、というだけのことです。いずれも生命活動の過剰にまつわる争いなのであり、生存競争（生存への争い・もがき）のさまざまな現れであるといえます。

ここからふりかえれば、さきのニュクスの子たちは、自然淘汰のさまざまな現れであることになります。とくにネメシスが、それを象徴しています。

ネメシスは、ふつう復讐の神として知られていますが、それは誤りで、憤りのことです。ただし私的な感情としての憤りではなく、公の憤りをいいます。

ネメシスは、英雄たちが名誉にもとるふるまいをしたときに、人々からうけるとがめのことです。あざ笑いなどによって社会的に完全に抹殺してしまう制裁であり、これをうけた英雄はもう死ぬほかありません。

これはなにも古代ギリシャだけではないでしょう。日本でもかつて、武士が庶民から笑いという制裁をうければ、もう切腹するしかありませんでした。英雄や武士にとって、人々や庶民というのは、環境になります。

ネメシスをもっとひろくとらえれば、環境による制裁・淘汰作用をさしています。ニュクスの子たちの正体は、自然淘汰。孫たち（エリスの子たち）は、生存競争だったといえます。

酸素が環境汚染をひきおこした

地上の生き物の世界における、きびしい淘汰と生存競争。

これが悪といわれるものの、正体なのではないでしょうか。でも、なぜ淘汰があるのでしょう？　生き物はなぜ争わなくてはならないのでしょうか？　いいかえれば、なぜ悪をなさざるをえないのでしょうか？

わたしたちはここで「進化」という用語をおもいうかべます。そうだ、すべて進化のためなのだと。すると、以上のまがまがしい悪の勢力は、悪のようにみえても、じつは進化をもたらすために悪役を演じている神々なのだということになります。

でも、この論法はちょっとおかしくありませんか？

なぜなら、この進化なるものはあくまで、自然淘汰と生存競争の結果としておこるだけのことでしょう。進化はあくまで結果なのであって、けっして目的にはなっていません。

それに、進化はほんとうに自然淘汰と生存競争によってのみ、もたらされるものなのでしょうか。そうとはかぎらないようです（これについては、また後でのべることになります）。

ではなぜ、自然淘汰がおこるようになったのか。なぜ、生存競争がおこるようになったのか。それをつきとめなければなりません。

そもそもの始まりは、生の過剰・生の動乱であるニュクスが自己増殖して、たくさんの子たちをうんだことにあります。しかしいったいなぜ、ニュクスの自己増殖がはじまったのでしょう。

そもそもは、クロノスが誕生したからです。そのクロノスの正体は、ヘメレ（昼）のときにいとなまれる光合成の働きであり、また酸素の発生でした。そのために、ウラノスは高空におしあげられ、のちにはオゾン層になったのでした。

しかし、ほかにもっといろいろな大事なことがおこっていることを、つけくわえておかなくてはなりません。

それまで地上の空気中には、酸素はほとんどなかったからです。しかしクロノスの活動により酸素の泡がぶくぶくと発生します。酸素による環境汚染です。現在なら、汚染どころか浄化でしょう。しかしおどろくことに、酸素ははじめのころ、たちのわるい汚染物質でした。

とはいえ空気中の酸素は、すぐにはふえませんでした。

まずは海水の中に大量にとけこんでいた鉄分をサビさせ、沈殿させてしまいます。それまでは酸素がなかったのだから、鉄がサビることなどありませんでした。その沈殿物は大規模な鉄の鉱床をつくりだしました。二五（〜一九）億年前のこととされています。

このような鉄鉱床は、縞状鉄鉱層とよばれています。

産地としては、西オーストラリアにあるハマスリー地域の鉄鉱山が有名です。日本で輸入する鉄鉱石のおおくはここからのもので、わたしたちの自動車ほか鉄製品は、クロノスの酸素汚染による産物だったということになります。

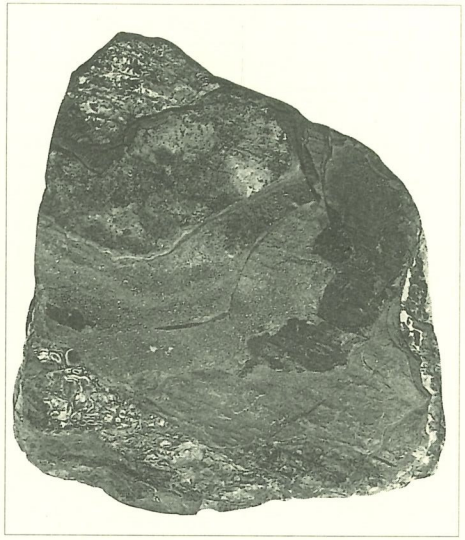
海水中の鉄分がなくなってくる二二（〜二〇）億年前ころになって、ようやく空気中にも酸素がふえていきます。

海水中の鉄分がすくなくなり、鉄の酸化による酸素浄化の仕組みがおとろえてきたわけです。この酸素大気は、それまでの、酸素というものをしらない生き物たちにとっては猛毒でした。

こうして酸素は、地球規模のすさまじいかぎりの環境汚染をひきおこします。

そのため、たくさんの生き物たちが死んでいきます。まさに酸素による、いまわしい死の報い（モロス）・死の定め（ケール）・死（タナトス）です。このようにして死滅した生き物たちは、酸素のおおい環境に淘汰されてしまったことになります。

自然淘汰とは、酸素の猛毒による淘汰であった。この酸素毒による淘汰の働きこそ、ニュクス



縞状鉄鉱石（ハマスリー産）

の子たちなのです。酸素が空気中にふえていったため、生の動乱ニュクスが刺激される。そうして生まれた子たちなのでした。

けれども、これでニュクスの子たちの役目がおわったわけではありません。

酸素毒は、生きのびたものにももちろん、ようしゃなくおそいかかります。そのずうっと子孫である現在の生き物たちにさえ、もちろん人間にも、ニュクスの子たちはようしゃなくおそいかかっているのです。

しかし、どのようにして、一部の生き物は死滅をまぬがれたのでしょう。

簡単なやり方として、酸素のすくない場所ににげるというのがあります。いま嫌気性微生物とよばれているものは、その子孫です。

しかし、そんな安易なやり方をとらないで、酸素のおおい場所でたくましく生きのびたものもなかにはいました。酸素をふせぎ、さらに酸素の毒消しをする方法を発明して淘汰をまぬがれたのです。

生命のエネルギー革命

しかもこの発明は、酸素の毒消しだけにとどまりませんでした。もっとすごい、大変な大発明となった。それが呼吸、つまり酸素呼吸です。

これは、あまりにも画期的な発明でした。この奇跡のような大発明がなかったなら、今日のような地上に繁栄する生き物たちはいなかったでしょう。

呼吸が発明されるまでは、生き物たちはどうしていたのか。酸素のいらない発酵によってエネルギーをえていました。

わたしたちも発酵みたいなことができないわけではありません。筋肉の中で酸素なしにエネルギーをえて、乳酸を廃棄物としてだすことができます。あのつらい筋肉のコリは、この乳酸によるものです。

ただし乳酸は悪者とばかりはいえません。心臓がこの乳酸をエネルギー源につかうからです。とはいえ、わたしたちが発酵だけで生きていたら、乳酸を汗にだしながら、しかもエネルギー不足のため無欲無気力になっていたことでしょう。

発酵をおこなう微生物といえば、酵母をまずおもいだすでしょう。酵母は、でんぷんやぶどう糖から酒をつくってくれる。その酒をのむのはわたしたちであって、酵母はこの酒をのむことはできません。酒は分解しきれなかった廃棄物だからです。

ところが、わたしたちは、この酒をのんで酔っぱらうだけでなく、アルコールからさらにエネ

ルギーをえることができます。

それは呼吸をするからできるのです。アルコールを酸素でもやしています。もちろん酒だけのことではありません。ぶどう糖を呼吸によって、炭酸ガスと水にまで分解し、さらに大量のエネルギーをえています。

発酵と酸素呼吸をくらべると、発生できるエネルギーの量は、なんと一八倍にもなります。ケタ違いの大きさです。こうして、酸素呼吸の発明による、エネルギー革命が生き物の世界におこったのでした。

つまり、それまでの生き物は、光エネルギーの塊である糖分を、単純にまた不完全に燃やしているだけでした。

それに対してエネルギー革命をおこした新型の生物は、糖分をいわば爆発させて利用するのです。ここに生の燃焼から、生の爆発へのエラン・ヴィタル、おおいなる飛躍がなしとげられたのです。

とはいえ、感激ばかりしているわけにはいきません。

呼吸によって体内にとりこまれた酸素は、酸化力が異常につよくなるからです。これを「活性酸素」といいます。そのため体の中のいたるところがサビてしまいます。

活性酸素は、周囲から電子をひきぬく性質をもっています。そのため細胞はぼろぼろになりま

す。生き残った生物たちにも、ニュクスの子たちはようしゃなくおそいかかると、さきにのべました。それは、このことをさしています。

もちろん、それをふせぐために生き物たちは、酸化に対抗する手だてをいろいろ開発しています。

抗酸化物質として、ビタミンC、ビタミンE、またニンジンやカボチャや卵黄などの色素であるベータカロチン、ポリフェノール、ほかさまざまな色素があげられます。これらのものは栄養素であるばかりでなく、酸化をふせぐために開発されたものだったのです。

さらにもっと積極的に、活性酸素の毒を除去してしまう酵素もあります。この除去酵素の能力のたかい生物ほど、生きていくのに有利だということは想像がつくでしょう。

そのとおり、人類は他の動物たちよりも、ずばぬけて除去酵素の能力がたかいのです。その反対に、能力がひくいと、生きるのが大変です。ショウジョウバエの一変種に、除去酵素をほとんどつくれないものがあります。たしかにその変種は異常に短命です。

しかしそんなたくましい人類にしても、除去できないタイプの活性酸素があります。それは、ヒドロキシルラジカルというもので、過酸化水素（オキシフル）の分子が二つにわれた形をしています。

こうして今なお、わたしたちは、ニュクスの子たちの襲撃を完全にふせぐことはできないまま

でいるのです。

争いのもとは酸素呼吸

さて、ニュクスの子たちの一つであるエリス（争い）が、悪徳の母としてまた、子をうみだしているのでした。

それは、酸素呼吸によりエネルギー革命がおこったことからきています。なにしろエネルギーの発生が一八倍にもなったのです。その生エネルギーの過剰が、さまざまな争いをうみだす原動力となります。

病弱だった子が、はちきれるような健康になると、今度はけんかをはじめるようなものでしょう。しかしそんな、なまやさしいものではありません。

それで仏教なんかでは、四苦八苦をまとめて五蘊盛（ごうんじょう）によるものとしています。五蘊盛苦とは、なまじ心身の活力がさかんなことからくる苦しみです。

なまじ活力のあることからくる、生き物たちのあいだでおこる悲惨な争い。それがエリスの子たちです。

こうして生き物たちのあいだで、ヒュスミネ（戦闘）・マケ（戦争）がおこります。

いたましいポノス（殺害）・アンドロタクシア（人殺し）・ネイコス（紛争）がいたるところでみられます。

そのためリモス（飢え）・涙にみちたアルゴス（悲嘆）がはびこり、いたましいポノス（労苦）・レテ（忘却）にみまわれます。

たとえ戦争がなくなって平和になっても、プセウドス（虚言）・ロゴス（理屈）・アンピロギア（口争い）、そしてデュスノミア（不法・不正）が、つねにまかりとおります。誓い破りに死をあたえよというホルコスまであります。

つまりは、生き物たちはアーテー（迷妄）のなかを、あてもなくさまよい、ついには破滅するのです。

なお、『仕事と日々』には、あの有名な「パンドラの壺」の話があります。よくパンドラの箱といわれますが、箱ではなく壺です。

パンドラが壺のふたをあけてしまったため、人間にはあらゆる煩いや災いがもたらされることになったというものです。この壺からとびだした諸悪は、まさにエリスの子たちにあてはまりそうです。

そしてあわててふたをしめた壺のなかには、エルピス（期待）だけがのこります。その期待と

は、ほんとうは何だったのか。またパンドラの壺の話は何を意味するのか。それは謎のままにしておきます。

ともかく、諸悪・悪徳というものが、いったいどこからくるのか。その永遠の謎を、ヘシオドスがはっきりとあかしていることがわかったことでしょう。

それは悪魔がいるからではありません。生への意志がそもそも悪だからということでもありません。それは、ニュクスの子たちとエリスの子たち、すなわち酸素の出現による酸素毒、および酸素呼吸による生命エネルギーの過剰からくるというのです。

しかしそれで、生き物たちはどうなるのでしょう。

ニュクスの子たちやエリスの子たちといった諸々の暗黒勢力につつみこまれ圧倒されてあえいでいるのです。酸素毒による淘汰と生存競争のはて、このままでは迷妄のなかを流れながれて、ついには破滅するほかありません。

しかし、破滅をのがれる復活の道がありました。ただしそれは、特殊な呼吸法や精神修養などによって吸入酸素をへらすような消極的なものではありません。つぎに、それをさぐっていくことにしましょう。

○ニュクス（カオスの子・夜生の動乱）

○ニュクスの子たち（自然の淘汰あるいは酸素毒）
死の報い・死の定め・死。眠り・夢。生の興奮・生の失調。たそがれ。
死や苦悩の宿命。生の憤り。生の欺瞞。愛欲。老い。
エリス（争い）。

○エリスの子たち（生存への争いあるいは酸素呼吸による生命活動の過剰）
労苦・忘却。飢え・悲嘆。戦闘・戦争。殺害・人殺し・紛争。
虚言・理屈・口争い。不正。迷妄。誓い。

4　アプロディテ　生誕の秘密

すなわち娘たちのあまいささやき　笑みと欺瞞
あまい喜悦　情愛と美がそれである。

生誕の背後にある醜悪な事件

ふたたびクロノスの、あの奇っ怪な事件にもどります。
ウラノスはその子クロノスに、大鎌により男根をきられて、天へと押しあげられたのでした。しかしそれよりも気になることがあるでしょう。
それは、切断され背後にとんでいった、あの男根はその後どうなったのか。また男根とはいったい何をさしているか、ということです。

さてクロノスが父ウラノスの男根を鋼鉄の鎌でかりとって
陸から　大波うねる海原へなげすてると
それはながい間　海原のおもてにただよっていた　その周囲に
しろい泡が不死の肉からわきたち　そのなかで　ひとりの乙女が
うまれでた。

なんと、男根は海にすてられ、その周囲にわいた泡から、ひとりの乙女がうまれたといいます。その乙女こそ、泡・あぶく（アプロス）からうまれでた、アプロディテ（アプロディーテー）な

のでした。

ふつうアプロディテは、愛と美の女神・ヴィーナスにあたるとされています。

ボッティチェルリによる「ヴィーナス誕生」の絵はおなじみでしょう。地中海のうつくしい風景を背景に、西風と花の精とニンフにかこまれて、海にうかぶ巨大な貝から乙女がうまれでる情景が目にうかびます。

ホメロスの『イーリアス』では、アプロディテはゼウスの娘、お姫さまということになっています。

しかしムーサたちはこれを否定しています。そしてアプロディテは海の泡からうまれたのだというのです。ボッティチェルリの絵画は、あきらかにヘシオドスのアプロディテをイメージしたものです。

ここまではよかった。しかしボッティチェルリは、アプロディテ生誕の秘密を、あのうつくしいイメージでおおいかくしてしまいました。切断された男根という大変なスキャンダルに、このロマンチストはとてもたえられなかったのでしょうか。

しかしなぜ、ホメロスのいうような、ゼウスの娘ではだめなのでしょう？　またなぜ、海の泡から誕生したというだけの、うつくしい話だけでおさめるわけにはいかなかったのでしょう？

それはアプロディテが、愛と美の女神どころではなかったからです。それを強調するためにも、

醜悪な背景が必要だったとみられます。醜悪の影は、美に深みをあたえることがあります。たしかにアプロディテには、宇宙の奥ふかい力がたたえられていたのです。

ムーサたちは、アプロディテが誕生したとき、

「エロスがつきそい、うつくしいヒメロス（希求）がお供をした」

といっています。そう、エロス（エロース）が登場しているのです。

エロス。それは、宇宙的な結合のもと（本源）となるものでした。それは、「神々のうちでも並びなくうつくしい」また「よろずの者の、胸内の思慮と考えぶかい心をうちひしぐ」ような、ふしぎに魅力的な宇宙引力です。

エロスは、カオス・ガイア・タルタロスとならぶ、原初宇宙球の四つ組みの一つ。そしてカオスによってわけへだてられたものを、ふたたびたがいにむすびつける、あの宇宙的な根源の力でした。

そのエロスが、アプロディテにつきそって世話をしているのだといいます。つまりエロスは育ての親。アプロディテはエロスの子のようなものであり、その発展としての地上におけるエロスなのです。

またお供のヒメロス（ヒーメロス）は、アプロディテが世話をしている子にあたり、アプロディテの性格の現れのようなものです。

ヒメロスは「希求・やさしい欲望・あこがれ」といったものです。これらからみていくと、いわゆる愛や美といったものとは、まるで次元がちがうもののようです。

（エロス）――　アプロディテ　――（ヒメロス）

笑みと欺瞞・情愛と優美

背後のエロスと、現れとしてのヒメロス。アプロディテは、この二つにはさまれて位置づけられました。そうしてようやくムーサたちは、そのアプロディテのもつ特性をあきらかにします。

つぎのような特権をはじめからこの女神はえておられたのだ　このモイラを
人間たちと不死の神々の間でさずかっていたのだ。
すなわち娘たちの（あまい）ささやき　笑みと欺瞞
あまい喜悦　情愛と優美がそれである。

アプロディテのもつ「あまい喜悦、情愛と優美」。この「特権」はモイラとしての、生まれながらのものです。ただしここでのモイラとは、ニュクスの子としての宿命の三女神モイラたちではありません。

そもそもモイラとは、ともに分けて食うこと。そこから分け前という意味がでてきます（そこからやがて、悲しいかげのある宿命ともなる）。

モイラとは、分かちあたえられた持ち分、運命をいいます。職分、使命といってもいいでしょう。すなわちこの特権のうえにこそ、アプロディテらしさがいよいよあらわれてくるのです。

しかしそのモイラは、謎めいた言葉をならべて表現されています。

それは「あまいささやき」「笑みと欺瞞」「あまい喜悦」「情愛と優美」です。なにか関係がありそうで、よくわからない。これらの言葉の配列、あるいは言い換えには、いったいどんな意味があるというのか。ひとつひとつ、みていきましょう。

まず、娘たちに特有の「あまいささやき」、なんだかロマンチックな感じがします。

しかしそう単純にうけとめることができません。なぜなら、その次に「笑みと欺瞞」とくるからです。その謎めいた状態をくぐりぬけると「あまい喜悦」があり、そして「情愛と優美」があるというのです。

笑みと欺瞞。

なんのことかわかりません。しかし日本語には、この笑みと欺瞞を一つにした言葉があります。それは「ハニカミ」です。目をふせて、あいまいなほほえみをうかべたりする。乙女たちによくみられる、あの独特のはじらいの表情です。

このあいまいなほほえみ・ささやくような笑みが、まさに「娘たちの（あまい）ささやき」にあたります。ならばむしろ「娘たちのハニカミ」としたほうがよかったかもしれません。

ところで平安時代初期のころ、ハニカミとは、歯をむくことでした。よく少女が、人に意地悪をするときなどに、下歯をむきだして「いーっ」といいますね。相手に対して敵意をしめし威嚇するときの表情でもあります。

それがもともとのハニカミなのでした。はにかみの裏には、このような原始ハニカミがかくれているということです。このような表裏の構造は、なにも日本語だけに特有なのではないようです。

英語ならば、たとえば「バッシュフル」があります。バッシュは、ジャパン・バッシング（日本叩き）というように、たたいて攻撃することです。そこには敵意と怒りがあります。ところがバッシュフルとなると、ハニカミやの、という意味になります。バッシュフルの裏には、バッシュがかくれています。

しかし乙女たちのハニカミとなると、そんな敵意や威嚇など、とても感じられないものです。

攻撃性どころか、内気で控えめな態度だとして、よく好意的にうけとめられがちです。ハニカミするのは、よい娘なのです。

とはいえ無意識の心理分析からするなら、やはり、その裏には原始ハニカミの攻撃性がひめられています。むき出しにはでてこないものの、内にかくされている。

それで笑みの裏には「欺瞞」があるというわけです。

もっとも、その攻撃性はあくまで、自己を防衛しようとする警戒心からきています。なにしろ相手はオオカミかもしれませんから。したがって攻撃性のかくされた笑みは、相手がなれなれしくつけこんでこないための煙幕でもあります。

笑み自体が欺瞞でもあることになります。

しかし、そのようなハニカミはまた、相手を大切にしたいという配慮をもふくんでいます。少女ならむき出しにするような敵意・威嚇をおさえて、笑みにかえている。それがかえって相手には、自分と一体になったような感じがして、好ましく感じられます。なにかしら喜びさえわきあがってきます。その喜びこそ「あまい喜悦」です。

このあまい喜悦は、なぜわいてくるのでしょう。それは、はにかむ娘の様子から、相手に対してふかく思いやる心配りと、品のよく奥ゆかしい美感がつたわってくるからです。それが「情愛と優美」です。

でも、情愛・優美といっても、現在では死語のようなものだから、ピンとこないかもしれません。国語辞典によると、情愛「親しい人に対するふかい思いやりの気持ち」、優美「上品で奥ゆかしい美しさをもっている様子」とあります。

これでアプロディテが、単なる「愛と美の女神」ではないことが、すこしわかってきました。アプロディテは「情愛と優美の女神」です。ただし深さや奥ゆかしさの感じられるというだけでは説明不足でしょう。

「愛と美」とはまったく正反対のものをかくしている。そういう意味での深い奥行きのある、「情と優」の女神なのです。

アプロディテのやわらかい草

アプロディテの特性である情愛と優美。

これは、人間だけに特有のもののように感じられるかもしれません。しかしそれはむしろ、生命に共通するものであり、しかも自然の奥ふかいところからでてくる力によるものなのかもしれません。

ここでもう一度、クロノスのあの奇っ怪な事件にもどります。

クロノスは大鎌でウラノスの「男根を刈り、背後になげつければ、それは後ろへとんでいった」のでした。しばらく海面をただよううちに、男根の周囲にしろい泡がわいて、ひとりの乙女アプロディテがたちあらわれたのでした。

しかしクロノスは、なぜ男根を背後になげたのか。またこの「背後に」という言葉は、いったいなにを意味しているのでしょうか。

クロノスにすれば、後ろにひっこんでおれ、ということなのでしょう。しかし、もっとひろくとらえれば、それは、背後で後ろ楯になるように、ともみることもできます。もちろん、アプロディテの後ろ楯（保護者）にです。

そういえば周囲にわいた泡を、男根はつなぎとめ保護しているかのようにもみえます。ともかくウラノスは、アプロディテが誕生し生長するのに、おおいに関係することになります。

さて、誕生したアプロディテがどうなったのかを、まだみていませんでした。

まず彼女は「いとも聖なるキュテラ」という島にすすみ、さらにそこから「四面を海のめぐるキュプロス」の島にたどりつきます。

かしこくもうつくしい女神が陸にあがりたまえば　その周りに

やわらかい草がもえでるのであった　やさしい足もとで。

アプロディテが陸地にあがると、彼女の足もとから草がはえてきます。春をよびよせたので草が芽をだしたのかな、と。こう想像すると、ロマンチックな気分にもなってきます。しかしそれならさらに、花がさきみだれ、鳥がとびかってもよさそうです。

なのに花も鳥もでてこない。草だけ。しかも花も葉も茎もなく、ただやわらかいだけというふしぎな草なのです。

なぜか。それは、アプロディテの上陸が太古地球の事件であったからです。

アプロディテが上陸する以前の陸地には、動物がいないのはもちろん、ぺんぺん草さえはえていませんでした。それどころか、生き物らしいもののいない、まったくの荒れ地でした。

それが、アプロディテが陸にあがると同時に、草も陸地に出現した。ということは、やわらかい藻みたいなものが、海の中から陸上へと進出していった有り様をえがいたものとみられます。

実際、生き物たちのうち植物性のものが、まず海から陸上へ進出したのは五億年よりも前のころのことでした。植物の祖先、それはクロレラやアオミドロみたいな緑藻類であり、さらにそれが進化してゼニゴケのような植物になっていったとされています。

アプロディテの足もとにもえでた草とは、このようなものでした。しかし、それだけではなく、

まだ謎がありそうです。

共生する泡が上陸した

陸上への進出。それまで水中にいた生き物・緑藻類が、陸上でも生きていけるようになった。それはなぜなのでしょう。

それは水辺の緑藻類たちが、自分たちのなわばりをひろげようとした当然の結果ではないか。そういうかもしれません。

しかしそれはあくまで内部の要因です。それだけでなく上陸をたすける外部からの、つまり環境からの要因をわすれるわけにはいきません。

なぜなら、生き物たちが陸地に進出できるためには、陸地が、生きていくのに安全な場所になっていなくてはならないからです。水中とちがい、陸地は乾燥しているし、栄養分もたりません。それだけでなく、紫外線がもろにおそいかかってきます。その紫外線がカットされなくてはなりません。それをするのはオゾン層です。

そのころ、空気中の酸素の割合がおおきくなって現在の濃度（約二〇パーセント）くらいにま

でなり、オゾン層が十分に形成された。そのオゾン層のシェルターという後ろ楯によって、生き物たちは上陸できたのだとみられています。

そう、ウラノスは天になったあとオゾン層へと生長していきました。そのウラノスの後ろ楯によって、緑藻類は、陸地にあがったのです。

しかしそれと、アプロディテとは、いったいどんな関係があるのでしょうか。それを知るためには、まず、アプロディテの正体をつきとめなくてはなりません。

アプロディテはアプロス（泡）からでたので、アプロディテといいます。

こんなことは単なる駄洒落でしかないとされていますが、どうして、そんなものではありません。アプロディテは泡の化身でもあるということをしめしています。ならば、その泡そのものをよくみてみましょう。

海で泡がよくみられる場所はどこか。

それは海岸ちかく、陸と海の境のあたりです。男根の周囲に泡がわいたということは、男根は陸地でもある。そうみることもできます。男根はまた島を予想するものでもあり、それでアプロディテはやがてキュテラ島に上陸するのです。

島の周囲にひろがる泡は、風にふかれて陸地にはこばれます。その泡が、やがて「やわらかい草」になります。泡はまさに植物生命の起源です。とはいえ、泡が生き物になったという、生物

の自然発生をいうのではないでしょう。

泡には、微小なものを吸着するという性質があります。鍋に肉や野菜をいれて沸騰させれば、アクが泡にあつまります。それとおなじようにして、泡の表面には、たくさんの微生物、とくに胞子が吸着してきます。

すなわち泡というのは、たくさんの微生物の集まりでもあったのです。

微生物が泡とともにキュプロス、陸上にあがった。しかしこれだけがアプロディテだというわけではありません。今度は泡のもつ性質をみてみましょう。

石鹸水にストローをさしこんで息をふくと、泡がぶくぶくとでてきます。その泡たちはおたがいにくっつきあっています。泡は二つにわれてもばらばらにはなりません。その泡どうしは、互いに作用しあいながら一つによりあつまっています。

泡たちはそれぞれ独立しながら、たがいに干渉しあい、たがいに依存しあっています。こんな関係を「共生」といいます。この泡どうしの関係に、なにかあの「あまいささやき」「笑みと欺瞞」「あまい喜悦」「情愛と優美」みたいなものを、感じることができるのではないでしょうか。たとえばビールの泡やシャボンの泡をみるときに。

アプロディテは、そんな「共生」のことだといえましょう。

「共生」という用語は、今日ではもう日常用語となっています。そのため、本来の意味とはず

いぶんずれてしまっています。自然と人間との共生、機械との共生などと、よくいいますね。しかしこれでは、不干渉の共存共栄と変わりありません。

ここでいう共生は、このような共存ではありません。

「共生」（シンビオシス）。

それは、ドイツの植物学者ベイリーが一八七〇年代にとなえた用語であり「異なる生物が一緒にくらすこと」を意味します。いいかえれば、おたがいにかかわりあいをもつことです。

しかし、かかわりあいなどというと、たいてい不都合な関係を連想します。かかわりあいになりたくない、などというでしょう。そんな緊張からはじまりながらも、また干渉しあいながらも、やがて相互依存にたどりつく。

その相互依存は、談合のようなもたれ合いではない、ほんとうの相互依存です。

それこそ最高の関係ではないでしょうか。

アプロディテとはまさに、この共生、相互干渉・相互依存という働きなのでした。これこそ、あのアプロディテの特性である「情愛と優美」の意味するところです。それは、ひろく生命に共通するものであり、しかも自然の奥ふかいところからでてくる力によるものだといえます。

こうして泡によって上陸した微生物どうしは、たがいに自分を維持しつつ、他と接触し結合しながら生活することになります。微生物どうしは、いわばハニカミながら一つになって生活するのです。

イボ状の共生体

さて、オゾン層ができたことにより、陸の上はかなり安全になってきました。しかしまだ乾燥とか、水や栄養の不足などさまざまな悪条件があります。これでは、せっかく上陸しても生きていくことはなかなかできません。

そこでアプロディテ・共生がでてくることになります。共生によって悪条件を突破するのです。これは『孫子』の兵法にもあることです。

「呉越同舟」。いつもは仲のわるい呉の国の人と、越の国の人とが、おなじ舟にのっても難風にあうなら、お互いにたすけあうようになる。悪条件では、力をあわせまいとしたって、あわせるようにならざるをえないということです。

このようにして、いわば呉生物と越生物は、共生して上陸できるのです。

たとえばクローバーやエンドウなどマメ科植物は、根粒バクテリアと共生することにより、チッ素などの栄養分のない場所に「上陸」していきます。

シロアリは、自分の体重の半分近くにもなる原生動物ミクソトリカと共生して、木材の中に「上陸」します。ミクソトリカはシロアリの消化管の中にすみこみ、木材の破片を分解してくれます。

このような意味での「上陸」で、いちばんたくましいのは地衣植物でしょう。

岩石や樹木肌に、ペンキをぬったようにへばりついている、コケみたいなのを見たことがありますか。あるはずなのに、みすごしている人がおおい。それが地衣植物です。

外見は一つの植物のようですが、ほんとうは光合成をする藻類と、キノコやカビのような菌類との共生体です。

地衣植物は、富士山の山頂火口や南極でもみられます。三〇〇〇メートル以上の高山や極地といった過酷な環境にのりだしていきます。また、山火事で灰になった土地や、火山の溶岩流におおわれた土地に、真っ先にのりこんでいくのも地衣植物です。

太古にまず上陸したのも、この地衣植物のようなものではないでしょうか。

まさにその通りで、緑藻類は菌類とむすびつきました。藻類―菌類の共生体です。そしてたとえば菌類は、藻類に枝や根をもたらします。一方、藻類は菌類に栄養分を供給します。このようなおたがいの助け合いによりようやく、共生体は上陸することに成功したのです。

もっとも、実際はこんなに単純なものではないでしょう。

菌類をベースとしながら、藻類のほかにも青緑バクテリアほかいくつもの微生物たちがかかわって、たすけあった共生体が上陸した。そしてそれがのちに一つの生き物として植物になっていったとみられます。

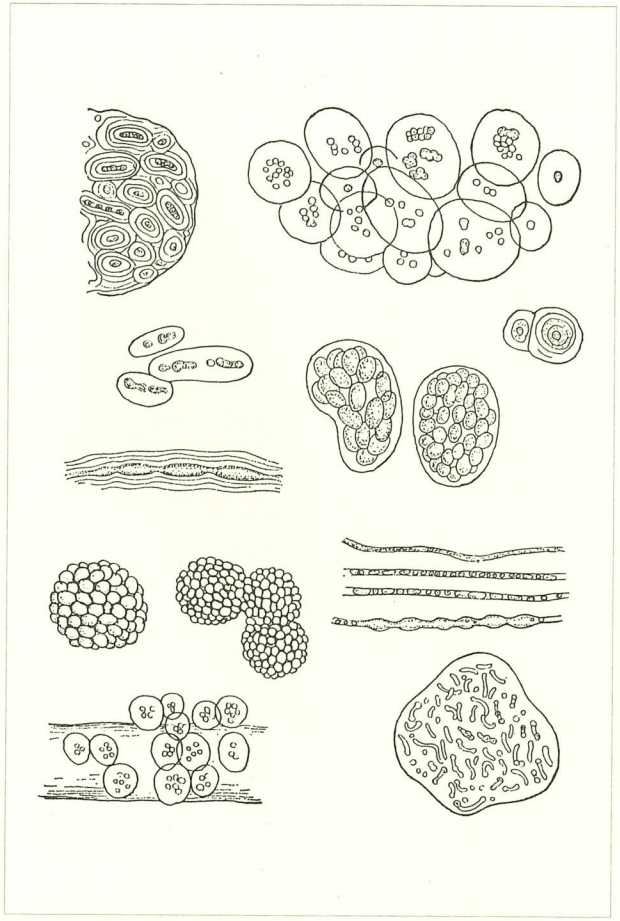
実際そのような最初の共生体をおもわせる、じつに奇妙な生き物が、現在でもいます。それはテングノムギメシ（天狗の麦飯）です。

長者味噌とか兼信味噌、飯砂ともよばれ、長野県の一〇〇〇メートル以上の火山性の山々でみられます。長野県の飯綱山の名も、この飯砂からきたのかもしれません。

その大きさは数ミリから一センチ。黄褐色をしたニカワ状のやわらかい塊で、イボのような形をしており、地下に三〇センチ～二メートルもの層をつくります。名称から想像されるように、食べることができるので山にはいるときは弁当がいらなかったそうです。

このテングノムギメシは、青緑バクテリアと細菌と菌類の共生体であることがわかっています。上陸したアプロディテの足もとにはえでた草は、このようなイボ状の共生体だったのでしょう。それがやがて、イボ状から発達して、糸状・葉状・樹状の地衣類となり、ついに植物になる。

さらにその植物をもとめて動物も上陸していったというわけです。



テングノムギメシ

ウラノスの血のしたたり

これでようやくクロノス事件もカタがついた、といいたいところです。しかしまだ一つのこっていました。男根は、ただ単に切断されただけではないからです。切ればそこから血がでるはずです。その血をみおとすわけにはいきません。

というのもそこからほとばしりでた血のしたたりを
大地がしっかりとうけとめ　さて年月がめぐると
力づよい復讐の女神たちと　きらめくヨロイをつけ
長槍を手にもった　おおいなる巨人たちをうみ
また　はてしない大地の上で　メリアとよばれるニンフたちをうみだしたからである。

まず、ウラノスの血がふきでて、そのしたたりはガイアの中にうけとめられる。そしてアプロディテのときと同様にながい年月がたちます。そして、そこからエリニュス（エリーニュース復讐の女神）とギガス（巨人）がうまれた。またメリアというニュンペ（ニンフ＝妖精）が生じたというのです。

ここで、まず注目したいのがエリニュスです。それだけでなく、とくに注目したいのもエリニュスです。それほどエリニュスは重要なものです。

エリニュスを復讐の女神ということから、被害者ウラノスがガイアやクロノスに対してもつ、復讐の念のようなものをつい連想したくなります。しかしエリニュスの復讐は、そういう意味でのおそろしい復讐ではありません。

それは「慣習法的な制裁の神格化」であり、血縁関係の掟をやぶる者に復讐、というよりは制裁するものであるとされます。重点は復讐にあるのではなく、血縁に関係する慣習・掟のほうにあるわけです。

それはまた「古来の掟」「本能的な慣習」であるともいいます。

とにかくエリニュスは、古来からの生物本能にもとづく血縁がらみの慣習であるといえます。それは代々つたわっていく遺伝のようなものといえます。

次にギガス（巨人）。これはギガ（一〇億）という単位として、その名が現在までのこっている、そのギガスです。いやそれよりも、ギガンテス、ジャイアントの巨人です。

ギガスは、ヨロイをつけて長い槍をもっています。

それでエリニュスの復讐をギガスが実行するようにもみえます。しかし短い槍とちがって、長い槍は守りをおもな目的とするものです。ヨロイも、きらめくヨロイとあるから、戦闘用ではありません。

ギガスはまさしくエリニュスを防衛するものです。

遺伝と防衛。それは具体的には、ＤＮＡ遺伝子と、それをまもる膜ということになります。さあ、これこそ真核細胞の特徴です。それまでは、ＤＮＡが核膜にかこまれていない前核細胞だけしかありませんでした。しかしあらたに真核細胞が誕生したという事件なのです。たいしたことないようにみえるでしょう。

しかしながら、生物進化においては大事件中の大事件なのです。最大級の事件といってもいいでしょう。

ごく単純な、単細胞の真核生物としては、アメーバ、ゾウリムシ、有孔虫、ケイ藻などがあります。これらの微生物は、前核生物よりも図体がおおきい。それでギガス、つまり巨人ということにもなります。

ともかく真核細胞の登場により「メリア」が生じました。

メリアとは、トネリコの木のことでもあります。トネリコは最古の樹木の象徴であり、また槍の柄にもつかわれます。北欧神話ならばユグドラジル、生命の宇宙樹です。

それが「はてしない大地の上で」生じたということだから、真核細胞の生物が後のあまねき生き物の主流となることを暗示していましょう。トネリコの木についてはまだまだいうことがある

けれども、それはまた後にします。

前核細胞から真核細胞へ。たしかにこれは、生物学においては飛躍的な大進化とされていることです。けれども、これがなぜ飛躍的なのか、大進化なのかは、あまり知られていないようです。だから、そういわれたってピンときません。

結論からいえば、真核生物になってはじめて、親から子へとつたわっていく遺伝がはじまったのです。だからこそ、エリニュスがでてくるわけです。

水平遺伝から垂直遺伝へ

でも、いきなりこんなことといわれたって、変な感じがするだけでしょう。

前核生物にだってもちろんＤＮＡがあるのだから、遺伝はもっと前からあるはずではないかと。青緑バクテリアのような前核生物に遺伝がないというのはおかしいと、みなさんは苦笑をされているかもしれません。

もちろん、前核生物も子孫にＤＮＡをつたえることはつたえます。でも、それだけではないのです。それよりももっとせわしく、他の前核生物たちとＤＮＡを交換しあっています。子孫につたえるのが垂直方向なら、こちらは水平方向です。

つまり前核生物においては、水平方向遺伝のほうがまさっているわけです。

ところが、ＤＮＡが細胞の中心にあつまり、核膜でつつまれると、水平方向のほうはへって、垂直方向つまり親から子への遺伝がメインになります。

このおおきな変化、垂直遺伝の始まり。そう、これこそエリニュスです。そしてメリアなのです。

では、そもそもの始まりである、ウラノスの血のしたたりを大地がうけとめた、というのはどういうことなのか。

これこそ、真核細胞の起源をいうものとなります。それまでは核のない前核細胞のものだったのに、核のあるものが登場した。それはなぜか、ということです。

それは空気中に酸素がふえてきたことに対する、生き物たちの反応としてあらわれたものでした。嫌気性の生き物たちは、酸素の毒による被害をうけます。このことは、根源悪の章ですでにのべました。ニュクス（夜）の子たちのしわざです。

生き物たちの大部分は死滅しました。しかしその一部はウラノスの血のしたたりとして「大地がしっかりうけとめ」た。つまりガイアの中で生きのびます。

でも、どうやって生きのびられたのでしょう。

なかでも一番よわそうな、表面が丈夫でない裸の微生物たちこそ、主役となります。
それらは、被害をさけるため次々とよりあつまります。そうして融合して、あちこちでおおきな一つの細胞をつくっていったのです。細胞の巨人化・巨大化です。
この細胞のギガス化には、おおきな利点があります。
大型であれば、体の体積に対する表面積の割合がちいさくなります。ちょっとわかりにくい説明です。豆腐を八等分してみてください。すると、切断された面の分だけ表面積がふえます。ここから類推してください。
酸素は表面から侵入するので、表面積がすくないということは、それだけ酸素の毒の影響がすくなくなることになります。
さらにDNAは表面からとおい、細胞の中心にあつめられました。しかもさらに「きらめくヨロイ」のような核膜でつつまれました。そうすれば、守りはいっそう力づよくなります。
このようにして「力づよいエリニュス」である、真核が誕生したのでした。
真核生物がいつ登場したのかは、よくわかっていません。しかし「巨人」型の微生物が二一億年前に出現しているので、そのころかとも、あるいは一五億年前かともみられています。
アプロディテが誕生したのは、その後のことになります。しかしすでに、アプロディテの共生への予感はあったのでした。そうして真核微生物たちのなかから、緑藻類や菌類も誕生し、その

共生体が陸上に進出していったのです。
これで、何度も何度もクロノス事件にもどったわけを、十分に納得していただけたかとおもいます。クロノス事件のおかげで、生物は垂直遺伝するようになるし、共生進化により陸地にあがることになる。
それほどクロノス事件は、地球生命の歴史において巨大事件だったのです。

○アプロディテ（情愛と優美の女神　あるいは共生）
○エリニュス（復讐の女神・慣習法的な制裁　あるいは遺伝）
○ギガス（巨人　あるいは遺伝の防衛）
○メリア（トネリコの木　あるいは真核細胞）

5 ゼウスの誕生

そのときに。その子ゼウスを　広大な大地ガイアは　わが身にうけとられた
ひろいクレタの地で　やしない育てるために

クロノスの子たち

ウラノス時代のあと、クロノスの時代にはいります。そしてクロノスは、レイアーとの間にかがやかしい六体の神々をもうけました。

「ところが、おおいなるクロノスは、これらの子たちを呑みこんでしまわれた」

といいます。なぜか？　ともかく、子がうまれたというわけにはいきません。

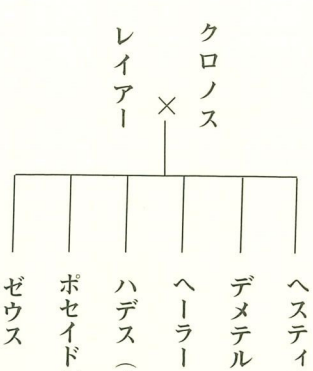
その子たちというのは、つまりクロノスの発展形なのだから、発展の可能性が可能性のまま、とどまってしまったことになります。

しかしなぜ、クロノスは、自分の子たちを呑みこんでしまったのか。それは、ガイアとウラノスから、

「自分の息子によって、いつの日か、打ちたおされる定めになっている」

と予告されていたからです。息子による父の打倒。それを警戒して、クロノスはとんでもないことをしでかしたのでした。

ともかく、どんな神々が誕生することになるのでしょう。



「ヘスティア、デメテル、黄金の靴はくヘーラー」。これら三体は女神です。

それから「地の下の館にすみ、冷酷な心もつ、たくましいハデス」「轟音とどろかす、大地をふるわす神ポセイドン」「かしこいゼウス、神々と人間どもの父、その雷鳴でひろい大地もふるえるのだ」。これら三体は男神です。

もちろん、このように最初からはっきりした形で生まれたわけではない。まだ可能性のままです。のち、このような神々となったということです。

でも、これらがどんな神々なのか、先まわりしてみてみましょう。これまでのイメージとちがうところもあるので、あらかじめイメージ修正をしておきたいからです。

(1) ヘスティア（ヘスティアー）

へっつい（かまど）は、家のうちでもっとも神聖なものとされていました。ギリシャばかりでなく昔の日本でも、かまどにはヘツヒ神がいました。ヘスティアは、その神聖な火処（ほど）をいいます。

たしかにゼウスはのち、このヘスティアに、神々のうちの第一の座をあたえることになります。

(2) デメテル（デーメーテール）

「あまたをはぐくむ」「女神のなかの女神」とされる大地母神（土地女神）。ガイアの根源的な生産力をもととする、母なる大地です。ガイアを大地とするなら、デメテルは土壌とするのがいいでしょう。

(3) ヘーラー

「黄金の靴はく」というのは王の妃を意味します。グリム版のシンデレラ（灰かぶり）では、

ガラスの靴ではなく黄金の靴をはいて王子と結婚します。この黄金の靴とおなじといえます。

ヘーラーはゼウスの正式の配偶者として、世界の家政一切を切りもりすることになります。世界の主婦（経営）権のようなものです。偶然ながら、昔の日本でも主婦権をヘラといい、飯杓子（しゃくし）でそれを象徴しました。

（4）ハデス（ハーデース）

地下の主。死者たちのいく冥界にいる冷酷な王ともいわれますが、それだけではありません。死とは反対に、よみがえり、という生命の循環の性質ももっています。それでハデスはやがて、デメテルの娘ペルセポネとともに、地下の館にすむことになる。それによって循環の性質がでてくることになります。

（5）ポセイドン（ポセイドーン）

「大地をささえ大地をふるわす」「轟音とどろかす」という神です。だからポセイドンよりも、ポセイドーンといったほうがぴったりです。しかし、地震をおこす怪物ではなく、大地の全活動力をあらわしています。

日本にも、中世～江戸時代の流行神として地震鯰がいました。この怪物鯰は地震をおこすだけ

でなく「世直し」をするのだといいます。世直しとは「世の中の建て直し、世界の再生」をいいます。

地震＝世直しとは、土地がなにかのきっかけで、おのずから息を吹きかえし、また起きあがるという気分的感覚からきているようです。この気分からすると、地震鯰とポセイドンとはにているといえます。さらにハデスともにているといえます。

のちにゼウスはポセイドンを、自分に次ぐ地位のものとしています。ポセイドンは、ふつうは海の神とされています。しかしそれは、ポントス（海）の孫娘の夫になってからの話です。

（6）ゼウス（ヅェウス）

「かしこい」そして「神々と人間どもの父」としてふるまう、おおきな支配力オイコス（エコ、家）の家父長権です。「その雷鳴でひろい大地も、ふるえるのだ」といい、ポセイドンよりさらに高次の力をもっています。

代理の母・身代わりの石

これらの神々のうちで、まず注目したいのはデメテルです。そしてこのデメテルに関連して、ハデス、ポセイドンです。

デメテルにまず注目したいわけは、それがいわゆる土地・陸地（デー）としての、母なる土壌（デー・メーテール）だからです。それは、アプロディテ（共生による進化）によって陸地にあがった生き物たちにとっての、母なる土壌です。

そんな土壌の底にいるハデスは、生き物たちの死と再生、また稔りをいいます。

そしてポセイドンは、その土壌の全活動力です。

だから、デメテル・ハデス・ポセイドンは、三神一体であるともいえます。この一体となったものに雰囲気がよくにているのが、また地震鯰なのです。

とはいえ、これらの神々は、他の姉妹神ともども、うまれてすぐにクロノスに呑みこまれてしまい、登場することができません。

例外は、最後に生まれたゼウスです。ゼウスだけは、母とガイアのたくらみにより、クロノスに呑みこまれるのをまぬがれます。

母レイアーは、それまで五体の子たちがクロノスに呑みこまれたのを悲しみ、そしてうらんでいました。レイアーは、両親（ガイアとウラノス）に助けをもとめます。さて、いよいよゼウスがうまれようとするときがきます。両親は身ごもったレイアーをクレタ島の里に避難させます。うまれた子ゼウスは、けわしい洞穴にかくまわれました。たしかにクレタ島には、ゼウス誕生の場とつたえられる洞穴が二カ所あります。それは「聖なる大地のかくしどころ」であり、つまりその子を、

「広大なガイアは、わが身にうけとった」

のでした。暗くしめった洞穴は大地ガイアの母胎のようなものです。

だからガイアは、いわば代理母としてゼウスをあらためてうんだことになります。ガイアはゼウスにとって代理母であり、しかも育ての母でもあるのです。

じつに、ゼウスはガイアの子でもあったのでした。

（ガイア）―― ゼウス

ガイアはさらに、ゼウスの身代わりとして、大石に産着をきせます。それをクロノスにあたえてだましたのです。クロノスはなにも気づかずに、石の赤ん坊を腹の中につめこんでしまいます。

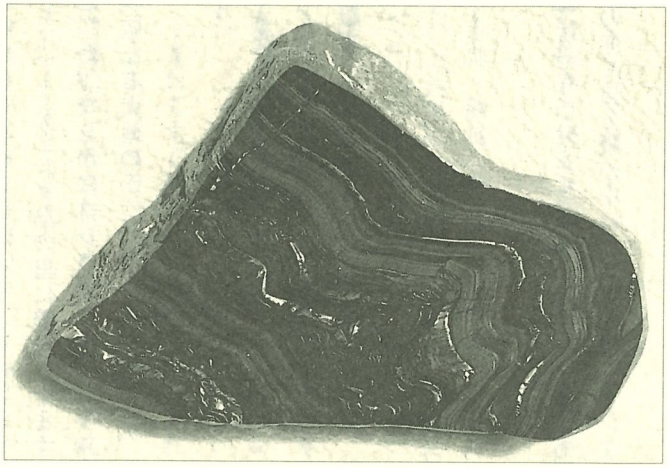
「そして、ひととせがめぐると」

つまりゼウスも十分に成長し時も熟したころ、大石にむせたクロノスは、それを吐きだしてしまいます。大石も生長して、ほんとうにおおきな石になったのでしょう。そのゼウス石のおかげで、腹中にいた子たちはみな吐きだされてしまいました。

さて、大石がゼウスの身代わりとなった。これはいったい、どういうことが具体的におこったのでしょう?

初期のゼウス、それは酸素をふくんだ大気圏でした。

その酸素は、クロノスの活動がもたらしたものでした。ゼウスはたしかにクロノスの子です。しかしながら酸素ははじめ、大気圏にはでていかなかった。いいかえれば、ゼウスはガイアの母胎にとどまったまま、酸素のある大気圏となることはありませんでした。



縞状鉄鉱石の断面模様

では酸素はどうなったのか。海水中にとけこんでいる鉄分をサビさせて、沈殿させたのでした。その沈殿物が「大石」をつくっていくわけです。この大石、すなわち縞状鉄鉱床の形成こそ、ゼウスの身代わりということになります。

やがて「ひととせがめぐると」海水の鉄分がなくなります。これが、ゼウスが成長したときにあたります。縞状鉄鉱床の形成も、これで完了。つまり、むせて「大石」として吐きだされたのです。

だからこの大石はまさに、われわれにとっても記念すべきものといえます。

この石を　ゼウスは　パルナッソスの谷間の
聖いピュトの地で　道ひろい大地の下に　安置なされた
後の世へのしるしとして　また死すべき身の人間どもにとっての不思議として。

この石は、自分とガイアがつながっていることをしめすものだ。また、あなたがたをクロノスの腹中から解放したものだ。おそらくゼウスは、それを強調したわけです。それで解放された兄弟姉妹たちは、ゼウスに感謝せざるをえません。

そこで彼らは、ガイアのうちにかくされていた、三つの力をおくります。それが、「雷鳴ブロンテスと、もえさかる雷電ステロベスと、電光アルゲス」です。それゆえに、ゼウスは雷神としてたたえられることにもなるのです。

キュクロプスのエネルギー

雷鳴・雷電・電光は、まとめて、

「豪胆なキュクロプス」（キュクロープス　一つ目巨人）

とよばれ、やはりガイアとウラノスとの間にうまれた子たちでした。いずれも、

「まるい一つの目が彼らの額について」

おり、しかもその目はたった一つしかありませんでした。キュクロプスは、噴火山の擬人化だとよくいわれています。噴火口のまるい穴がその目であり、噴火にともなう雷がその姿だというわけです。

しかしそれだけでは、わけがわかりません。そこで、心理学者のユングが三歳のころみたという、キュクロプスの夢でも参考にしてみることにしましょう。

三歳児の夢だなんて、おかしい。おそらく四〜五歳でしょう。でもユング自身にとっては最初のころの夢であり、また生涯わすれられない夢であったということから、「三つ子の魂、百まで」のいわれにのっとり、三歳でいいのです。

さて、ユング坊やは牧場にいて、ふと草むらに穴をみつけ、そのなかにはいっていきます。まるで不思議の国のアリスのようですね。階段を深くおりてゆくと部屋があり、その真ん中に黄金の玉座があります。

黄金の玉座というと、神さまでもいそうです。でもそこにあったのは、巨大な幹のようなものでした。さわると、皮膚のようでなまあたたかい。そのてっぺんは、つるんとしたノッペラボーの頭で、しかも目が一つしかないというグロテスクなもの。恐ろしくて身動きができません。上の方から母さんの声がします。

「ごらん。あれが人食いですよ」

この悪夢体験がのち、ユング心理学での、集団の無意識や普遍的無意識につながっていたようです。この無意識は、噴火山の奥底ふかくねむるマグマのようなものです。

ここでキュクロプスにもどりましょう。

キュクロプスも、噴火山ではありません。「豪胆な」というように、マグマのような、つよいエネルギーのことです。そのエネルギーは、噴火のときに発する火山雷のような、雷となってあら

われます。

しかしその雷は、ただの自然現象ではありません。ガイアの活動とふかい関係をもっている。そういう意味での雷の発生能力が、ゼウスの重要な能力となった。それがゼウスにあたえられたのです。

そのキュクロプス能力とは、簡単にいえば、高エネルギーの状態ということでもあります。たとえば手にもっている石は、地面にある石よりも高エネルギー状態にあります。空中にある石は、重力という自然力によって、下へ落ちていくはずです。しかし、そうはならない。手の支えによって自然力に、さからって、上にとどめられているからです。

エネルギーとは、自然力にさからう力、抗力なのです。

ゼウスに、高いエネルギーがあたえられた。ということは、ゼウスに、自然力に対して対抗する能力がそなわった、ということを意味します。それがあらたな戦いをひきおこしていきます。

これが、ティタン族（クロノスの兄弟）と、それに抗するゼウス軍（ゼウスの兄弟姉妹と、ティタン族の一部）との戦いです。

百腕もつ白い気象勢力

ゼウス軍とティタン族の戦いは泥沼化し、まる十年たっても決着がつきませんでした。抗力というのは、あくまで自然力に対抗するだけです。だから決着のつくはずがありません。レジスタンス闘争だけでは勝利にむすびつかない。

そこでまたガイアはゼウスに、あらたな味方をつけるようすすめます。それが、「ヘカトンケイル」（百腕巨人）たちです。ヘカトンケイルもまたキュクロプス同様、ガイアとウラノスとの間にうまれた子たちでした。コットス、ブリアレオス、ギュゲスの三体です。彼らは、

「粗暴なやからで、彼らの肩からは百の腕がのびていて、肩のところにはそれぞれ五十の首が生えていた、がんじょうな胴体の上に」

といい、また「近よることもかなわぬ強い力がそなわっていた」といいます。

岸におしよせる波浪。それがヘカトンケイルだといわれています。「百の腕がのびて」いる様子が波浪なのでしょう。その波浪には白くくだける波頭があります。「五十の首」というのがそれでしょう。

すると津波を連想するかもしれません。でも波浪は、岸におしよせるものとは限りません。外洋の高波だっていい。暴風のときには、高さ一五メートル以上にもなります。最高は三四メートルにもなり、津波の高さと変わりありません。

そんな高波のあれる海面では、波頭の泡で白一色になってしまうほどです。

この白色は、衛星写真でもみえるほどの大規模なものです。そして、地球の気候におおきな影響をあたえていることがわかっています。

海面がひろい範囲で白くなれば、太陽からの光は、海に吸収されずに反射されてしまいます。そのため海の温度がさがり、温度差のため海流や気象状況がかわります。

それだけではありません。海の泡は、海面でパチンとはじけるとき、海水とその成分を空気中に放出します。塩類や有機物や電子が、空気中に放出されるのです。塩類だけで一年間に数十億トンも大気中にもちこまれます。

また、プランクトンから発生した硫化ジメチルは、雲をつくる核となります。そして雲を形成しては雨をふらします。プランクトンが雲をつくっている、といってもよさそうです。

このような地球規模にわたるおおきな力こそ、ヘカトンケイルです。それはまさに「近よることもかなわぬ強い力」なのです。それがゼウスの味方についた。つまり、ゼウス・システムにこの強い力、気象勢力がとりこまれた、ということになるのです。

ゼウスの聖なる炎

こうしてようやく、ゼウス軍とティタン族の最後の決戦がきました。ゼウスみずから、飛びだしていきます。

「すこしの休みもなく、電光をあびせながら。その雷電は、雷鳴と電光をともなって、しきりにとんだ。その力づよい手から聖なる炎をまきあげながら」

ゼウスはもはや、たんなる雷神ではありません。それは「聖なる炎」をもたらす神とまでなっています。

はてしない森林は　あたりに　ものすごい悲鳴をあげた。
大地は　すべて煮えたち　大洋の流れや
不毛の海も　わきかえった。あつい蒸気が
地の上のティタンどもを　おしつつみ
名状しがたい火炎は　輝く上天へとたちのぼった。

表現はだいぶオーバーとはいえ、ヘカトンケイルの気象勢力を味方につけた、ゼウス軍の見事な勝利のありさまをえがいています。こうしてゼウスは、ティタン族をすっかりおしつつんでしまったのでした。

でも、雷や聖なる炎、またヘカトンケイルの味方などといっても、まだ漠然としてよくわからないでしょう。そこでもっと具体的な現象にあてはめてみることにします。

クロノスたちティタン族が、この地上にもたらしたものは、酸素の過剰という事態であったのを思いだしましょう。

空気中の酸素の割合がおおきくなれば、物は燃えやすくなるので火事がおきます。酸素の過剰に対してバランスをとるべく抵抗するのが、火事です。しかし酸素過剰ではあっても、放火のためのマッチがなくてはなりません。

そのマッチにあたるものが、落雷です。

この落雷のため、陸上の植物たちに山火事がおこります。それで「はてしない森林は、あたりに、ものすごい悲鳴をあげた」というわけです。

三億五千年前から、大規模な自然の火事がおきていたという証拠もみつかっています。現在でさえ、熱帯や温帯の森林でおこる山火事のおおくは落雷によるものです。この落雷による火事こそ「聖なる炎」ではないでしょうか。

そしてこの聖なる山火事は、さきほどのヘカトンケイルのように、地球規模のおおきな影響力をもっています。その影響は、大地も海も変動し、さらに「輝く上天へとたちのぼった」というほどです。

それは地球大気中の過剰な酸素をへらすとともに、それまで森林に吸収されていた太陽光を反射します。また炭酸ガスや熱や煙をばらまきます。そうして地球の気候にさまざまな影響をあたえていきます。

クロノスとゼウスの戦い。それは単純にいえば酸素の、放出と消費の戦いでもありました。酸素放出に対する酸素消費の抵抗です。

このため地球の大気中酸素の分量は、振り子のようにゆれ動きます。しかしついに、大気中の酸素は一定にたもたれるようになる。約二〇パーセントの濃度に調節されるようになります。

ゼウスは、そのようにして地球の気候を制御し調節するシステムとなっていきます。しかしそうなるには、まだまだおおきな試練がありました。

地球気候制御システムの完成

ガイアがゼウスに制御されるようになると、今度は地球の中心部からの影響を、全体としてうけることになります。中心部とはタルタロスのことでした。

このガイアとタルタロスの接触により、また大事件がおきます。

「巨大なガイアは、末っ子テュポエウスをうんだ。黄金なすアプロディテの手引きで、タルタロスと情愛のちぎりをされて」

テュポエウス（テュポーエウス）は、キュクロプスやヘカトンケイルよりも、もっと凶暴な怪物でした。なにもゼウスが憎くて、ガイアはこんな怪物をうんだわけではありません。ガイアにまとまりができたため、とうとう地球中心と相互作用の「情愛のちぎり」をするほどまでになったというだけです。

そのテュポエウスの肩からは、百もの竜の首がはえています。しかも黒い舌をちらちらさせ、両眼からは火をふきだし、口からは奇妙な声をだします。

この、世にもおそろしい怪物との戦いがはじまります。それは天も海も大地もゆれうごき、また炎につつまれるような、全地球規模の大戦です。すべての神々が、これにはおそれおののきます。なぜなら怪物は、

「言葉につくせぬ音あげる声」

をだすからなのです。それはどんな声なのでしょう。

すなわち　あるときには
神々の理解したまう声音（こわね）をはなったし　またあるときは
気性獰猛で　目に不遜な光をたたえ　たけだけしくほえたてる牡牛の声を
また　あるときは　残忍な胆（きも）もつ獅子の声を
また　あるときは　きくも奇妙な　けだものの子の鳴き声にもにたものを
さらにまた　あるときは　テュポエウスがシュウシュウとうそぶけば　高い山々は　なりとよもした

でもどうして声や音が、こんなにもおそろしい必要があるのか。そこには、どんな意味がひめられているのでしょうか。

これは実際におきた音に、幻聴がくわわっているとみられます。

統合失調症（精神分裂病）によくみられる、きわめて不快な幻聴です。統合失調症では聴覚が異常に過敏になり、わが身をはげしくさいなみます。その苦しさは想像を絶するものといわれます。

そんな音と奇妙な声のために苦しんだ一人に、画家ヴィンセント・ファン・ゴッホがいます。ゴッホが耳を切りおとしたのは、そのあまりの苦しさのためでした。

やはり統合失調症だったエドガー・アラン・ポーは「天と地のいっさいのものが、地獄からのものまできこえた」と書いています。

これと同じようなすさまじい苦痛が、ゼウスたち神々や、さらに地表全体をおそったのです。

統合失調症というのは、脳の情報処理システムのかく乱、すなわち統合の失調です。たとえていえば、電話網の交換系統が混乱したようなものです。これと同じような混乱が、ゼウスの制御システムにおこったのでした。

ゼウスはひとり、全力をふるいおこし、雷鳴・雷光・雷電をワシづかみにしておどりでました。そしてついに、あの百の竜の首をことごとく焼きつくしてしまいます。怪物はよろめきたおれます。そのとき怪物の体からは、おそるべき熱気がふきだして、大地をこがし溶かすほどでした。

このとき戦いにでたのは、ゼウスただひとりでした。なぜなら、相手の怪物は、ゼウス・システム自身の病いだからです。そして熱をだして病いがいえるように、ゼウスは回復しました。

ゼウスはこの怪物を、タルタロスへ投げこんでしまいます。ただ、このおそろしいテュポエウスが、置き土産のようにのこしていった子孫がいます。

それが、現在のわれわれも知っているものだということです。「湿りをおびてふく、荒々しい風ども」すなわちタイフーン（台風）です。

クイズのようですが、これでテュポエウスが何物かわかったでしょう。超巨大な台風のようなものです。いや、それ以上のものです。想像もつかないほどの気候システムのかく乱現象。あるいは気候大変動です。

いま問題とされている地球温暖化よりもっとすごいものでしょう。

しかしゼウスは、それを克服するほどまでの巨大な制御システムになりました。とはいえ、それは完璧なものではありません。そのため、ときおりかく乱されそうになることがある。それがタイフーンです。

ゼウスによる王権。

それはゼウスが地球気候制御システムとして完成されたことを意味しています。その完成によって、それまで性格があいまいだった、ゼウス軍のメンバーの役割分担がはっきりしていきます。それが、先にあげたゼウスの兄弟姉妹たちなのでした。

○ゼウスの兄弟姉妹たち
ヘスティア（へっついの火の女神　あるいはゼウス世界の統合の象徴）
ヘーラー（家庭生活の女神　あるいはゼウス世界の主婦権）
デメテル（大地母神　あるいは陸上生物にとっての母なる土地）
ハデス（地底の男神　あるいは生物の死と再生また稔り）
ポセイドン（土地をふるわす男神　あるいは土地の全活動力）

○キュクロプス
（一つ目巨人の雷鳴・雷電・電光　あるいは高エネルギー）

○ヘカトンケイル
（百腕巨人　あるいは気象勢力）

○ゼウス
（神々と人間どもの父　あるいは地球気候制御システム）

6　ゼウスによる王権

神々は　オリュンポスの　みはるかすゼウスに
彼が神々を統べ　治めるようにと懇請した　ガイアのすすめにしたがって

地球環境のビタミン

ゼウスの支配のもと、ヘスティア、ヘーラー、デメテル、ハデス、ポセイドンといった神々による世界がはじまります。でも、こうずらずらと並べられたって、なかなか理解できません。

そこで唐突ながら、これらの神々は、ビタミンのようなものとしてみましょう。そうすれば、すこしはなじみやすくなりそうです。人体環境におけるビタミンの役割と、地球環境における神々の役割は、なんだか似ているということです。

まずビタミンは、体の健康をたもつものと、おさえておきましょう。わたしたちの体を維持するシステムは、ビタミンによってささえられています。そのビタミンは、おおきく二つのグループにわけられています。

一つは、水にとけるビタミンで、B群とCなどです。

もう一つは、油にとけるビタミンで、A、D、Eなどです。

このうち、油にとけるほうのビタミンを、母なる大地・土壌に関係あるものとしてみます。そうすると、デメテルはビタミンA、ハデスはビタミンE、ポセイドンはビタミンDということになりそうです。

◎ビタミンAは、人体の土壌ともいうべき細胞や粘液に必要なものです。細胞が分かれ、変化したり、特殊な形になったり、複雑な生理作用をはじめるのにビタミンAがいります。また粘液を分泌して体の組織をまもるのにもビタミンAがいります。

デメテルはこのビタミンAのようにして、土壌を育てまもる女神・母なる大地です。

◎ビタミンEは、体をさびないようにさせる。つまり酸化（ニュクスの子たちでした）からまもるものです。酸素を呼吸すれば、体内で有害な活性酸素が発生して、細胞や栄養素を破壊します。破壊がひどければガンにもなります。

生き物たちの死と再生にかかわるハデスは、ビタミンEのようなものです。

◎ビタミンDは、カルシウムを吸収し体内に分配するのに必要です。カルシウムの九九パーセントが骨や歯をつくるのは誰でもご存じでしょう。しかし残り一パーセントが大変重要です。それは血液とともに体内をめぐり、心臓の筋肉をはじめとする筋肉の収縮につかわれます。また神経伝達やホルモンの作用にも必要です。

ポセイドンはこれと同じく、大地の骨格でありまた全活動力です。

次に、水にとけるほうのビタミン、B群とCです。B群はゼウスとヘスティア、Cはヘーラーにあたります。

◎ビタミンB群は、人体のあらゆるエネルギーを調節しています。

B群はエネルギーに点火します。しかも食物からのエネルギーを、ゆっくりと一定の速さで、一定の温度で、体内におくるように調節するのに役立っています。また、アミノ酸からタンパク質をつくるなど、体を組みあげるのにも必要です。

これとおなじようにしてゼウスは、地球環境のエネルギーを調節しながら、地球環境をつくっていきます。

ただし、ビタミンB群のなかで特殊なものとして、B_{12}があります。赤血球をつくったり、遺伝情報物質をつくるのに必要なものです。

それが、家の中心にあるかまどの火・ヘスティアにこじつけられそうです。もっとも、B群による体温調節がヘスティアのものだとしたほうが無難でしょう。

◎ビタミンCは、体内でさまざまな世話をしています。

細胞と細胞をしっかりつなげるコラーゲンをつくったり、副腎からホルモンを分泌したりするには、ビタミンCを必要とします。またビタミンCの摂取はカゼやガンの予防になるなどといわれるように、免疫の働きにも関係しています。

地球環境全般の世話をする生活の女神であるヘーラーが、これにあたるでしょう。

このようにビタミンとゼウスたち神々とをつなげてみると、人体の健康をたもつためにビタミ

ンがどのようなもので、どのような役割をしているのかがわかるのではないでしょうか。

逆に、神々をビタミンとむすびつけることにより、より一層、神々が身近に感じられるようになることでしょう。

神々のなかの神ゼウス

ゼウスの支配。それはティタン＝クロノス軍をやぶったときに確立していました。しかしその支配は、まだ「力づくで解決した」ものでしかありません。このことは、ティタン族との戦いがはじまったときに、ステュクスが指摘していたことなのでした。

ステュクスは大洋オケアノス（オーケアノス）の「もっとも畏敬すべき」娘です。畏敬すべきというのは、オケアノスの面影をよくもっている、ということでしょう。

そのオケアノスは、いわば大循環という見地から、ティタン族よりもゼウスの支配のほうがましだと考えました。ゼウスのほうが、クロノスよりも独裁的ではなく、自由なようにみえたわけです。

それで自分の代理ともいうべき娘ステュクスを、まずまっ先にゼウスのもとに参じさせます。

そのとき彼女は、四体の子たちを一緒に引きつれていきました。

その名を、ゼーロス（栄光）、ニーケー（勝利のにぎわい）、クラトス（権威・支配力）、ビアー（権力・暴力）といいます。

これらはゼウスの支配が、力ずくの覇権であることを意味しています。王権とはいえません。ゼウスはエスタブリッシュメントにすぎません。だから、ウラノスやクロノスのように、いずれ強者によってくつがえされる運命にあります。

そこでゼウスが勝利したのち、神々はゼウスに要求をだします。

「わたしたち神々を、あなたがまとめ治めてください」

覇権から王権への転換を意味する要求です。王権といっても、神々の同盟の盟主、神々のなかの神といった感じでしょう。

じつはこの要求はガイアが、ゼウスには内緒で、ひそかに神々にすすめたことでした。このガイアのはからいにより、いわば大地の民の要求により、ゼウスは、「神々のあいだに、ただしく権利をわかちあたえられた」のです。それが、ゼウスと女神たちとの結婚というかたちで表現されていきます。

まず最初の妻が「ならびなくかしこい」というメティス（明知）。ついで、テミス（自然法）、オケアノスの娘エウリュノメ、ムネモシュネ（記憶）、そして「神々のなかでもいちばん柔和な」

レートーです。

これらの女神たち、すなわち明知・自然法・記憶・柔和などはみな、ゼウスよりもずっと以前の、ふるい神々です。いわば、おばさん格にあたります。しかしこれまで、なにも権利をもっていなかった。その女神たちに権利がわかちあたえられたのです。

それからゼウスは、姉妹たちとも結婚します。デメテル（デーメーテール）、そしていちばん最後に「咲きにおう花嫁」となるヘーラーです。

これでは権力にまかせて、おおぜいの女をかこいこむのと変わりないじゃないか、といわれるかもしれませんね。しかも近親相姦まである。たしかに一般にはそういうふうに理解されているようです。そして彼女たちは、亭主を尻にしく奥さまのようにふるまうという。これはこれで面白いでしょう。

しかし、この結婚というのは、もっと重要な意味をもっています。

それは、ゼウス以前ではうもれていた偉大な能力が、ゼウスの支配する段階になり、ゼウスと組みあわされて、はじめて発揮されるようになる、ということです。またゼウスとともにうまれた偉大な能力も、ゼウスと組みあわされて、その力をいよいよ発揮するということも意味しています。

では具体的に、どのように発揮されるのか。それは、子をうむことによってです。それをみていくことにしましょう。

かがやく眼のアテナ

ゼウス　アテナ

メティス（明知）

ゼウスは、結婚の相手としてまず、メティス（メーティス）をえらびます。

メティスは、オケアノスとテテュス（テーテュス）のあいだの娘です。ステュクスやエウリュノメとおなじく、地上のわかわかしい生き物をそだてあげる乙女たちの一人です。メティスは、神々のうちでも「ならびなくかしこい」明知・洞察力です。

ところがゼウスは、このメティスを「腹のなかにのみこんで」しまいます。「のみこんで」とい

うよりは、包みいれたといったほうがいいでしょう。これは明知がゼウスの第一の特徴となることをも意味していますから。

そしてこれは、ガイアとウラノスが、ゼウスにすすめたことなのでした。

ゼウスがメティスをのみこんだとき、メティスは「かがやく眼の女神アテナ（アテーナー）」を妊娠していました。ガイアとウラノスは、その子が、

「並はずれてかしこい」

のを、しっかりとみぬいていました。もちろんゼウスやメティス以上にかしこいのです。

アテナがこのまま誕生すれば、やがてはゼウスの王権をうばうことになるかもしれません。それでゼウスに、メティスをのみこむようにすすめたのです。

この「父親におとらぬ気性と、かしこい思慮をそなえた娘」が、ゼウスに、「してよいこと・わるいことを助言してくれるように」という考えのもとに。そしてなんと、

ゼウスみずから　かがやく眼のアテナをうんだ　ご自分の頭から。
このかたは　かしこいかたで　トキの声をおこして軍勢をみちびき　疲れをしらず　また
女王である。
彼女は、喚声、戦い、闘争をたのしみたもうのだ。

軍勢をみちびく女王アテナ。なんだか自由の女神でも連想したくなります。それでのちにアテネなど、ポリス（城市）の守護神ともなるのでしょう。しかしです。ゼウスが頭からアテナをうむなんて、あまりにも奇妙な話ではないでしょうか。

いや、あわててはなりません。頭から子がうまれるといったって、頭がわれて、そこから子がうまれるとはかぎりません。頭から湯気がでるようにして、そのなかからアテナはうまれでたのではないでしょうか。

天空の湯気といえば、雲があるでしょう。

その雲の裂け目から太陽の光線が、扇のように地上にむかってさしています。その太陽はまるで、雲のなかの「かがやく眼」のよう。それがアテナです。なにしろアテナの本体は「かがやく眼」それ自体なのです。

その眼からさす光は、かがやく直線の矢のようにみえます。ビーム、光線・輝き・方向指示です。その定規のようにまっすぐで直進するビームは「してよいこと・わるいことを助言」する、戦闘的な「かしこい思慮」を意味します。

アテナは明知（メティス）をよりはっきりさせたもので、よき判断・基準をつかさどる女神です。このアテナにより、ゼウスの王権が確立し、もう誰にもくつがえされることがなくなり、安

定するのです。

いいかえればアテナは、ゼウスという地球環境調節システムの、いわば自然の理性の光にあたるものといえましょう。

秩序・正義・咲きにおう平和の三女神

ゼウスが二番目に、つれ合いとするのはテミスです。

テミスは、ガイアとウラノスの娘で、ゼウスの父であるクロノスの姉にあたります。テミスは、置きさだめられたもの・掟・法を意味します。ただし人間が人工的にさだめたようなものではありません。

それは神々が共同生活するなかで、おのずからできあがった文化の型であり、自然法・自然の定めです。このテミスがいなくては、ゼウスの世界はめちゃくちゃになってしまいます。

そのテミスとの間にうまれるのが、季節（ホーラ　複数ホーライ）の三女神です。これはホメロスでははっきりしてなくて、ヘシオドスによりはじめて明らかにされたことであることを、あらためて確認しておきましょう。その三女神とは、

「秩序、正義、咲きにおう平和」です。秩序はエウノミア（エウノミアー）、正義はディケー、平和はエイレネ（エイレーネー）といいます。しかも、この女神たちは、

「死すべき人間どもの仕事に心をくばられる」

といいます。ここで、人間たちに関係する女神が登場するというわけです。

ただし、この場面ではまだまだ人間というよりは、そのずっととおい祖先である生き物たちをさしているのでしょう。

これら三女神は、テミスに潜在していた能力が、ゼウスとの結婚により、よりはっきりとわかれて出現したものです。自然の法としてもっとも基本となるのは、きちんと定められた季節のめ

ぐりです。

それはさらに、生き物たちにとって、秩序であり、正義であり、そしてさきわう平和となります。だから秩序といっても、かたくるしい秩序ではなく、ランダム（でたらめ）の反対の意味での秩序です。

秩序というのは、季節のめぐりがきちんとしている、ということなのです。

それにより、たとえば植物は生長して、おのずからすくすくと頂点にまで達し、花をひらき、実をむすびます。それは生き物たちの仕事の法（ホーラ）となるのです。

なおディケーは『仕事と日々』において、きわめて重要な女神となります。もとはただの門番でしたが、ヘシオドスが大抜てきしたのです。だから、

「正義」

という言葉についても、もうすこし説明しておきましょう。

なぜなら正義といっても「正義の味方」というときのような正義ではないからです。そういう正義というのは、観念あるいは概念としての、こわばった正義でしょう。

これに対してディケーの正義は、植物をすくすくと生長させるようなちから、すきとおった気高いちからなのです。そして、秩序やさきわう平和とセットになっています。

ゼウスとテミスとの間には、モイラ（運命）の女神たちもうまれます。

クロト（クロートー）、ラケシス、アトロポスです。でも、これらのモイラはニュクス（夜）の子たちであったはずですね。おかしいではないか、ヘシオドスもいい加減なものだ。こう思うでしょう。

事実、そのような指摘もたしかにあります。しかしここでのモイラは、

「死すべき身の人間どもに、幸運と不運をさずけるのだ」

とあり、夜の子たちのようなくらい宿命の意味合いはありません。

運命の三女神のうち、過去をうたいつぐアトロポスは遺伝みたいなものでしょう。しかし現在を織りつむぐクロトと、未来への糸口を分けあたえるラケシスがいます。ここには遺伝しながら変化していく進化（幸運）があります。

自然の法にもとづく秩序・正義・平和があり、そのもとで生き物たちが「仕事」をし、そして進化していく。そのなかで幸運に進化していくけれども、そのかわり不運に淘汰されていくものもあるという。

そういうモイラたちが、ここで誕生したのです。

ゆたかな生態系とその循環

ゼウス
エウリュノメ ——×—— 優雅（カリス）の三女神

エウリュノメ（エウリュノメー）は、ひろく生きる力を意味しています。メティスと同じくオケアノスの娘で「姿うるわしい」女神です。それがゼウスとつれ合いになることにより、「頬うつくしい」カリス（複数カリテス）すなわち美・歓楽の三女神として出現します。

その名を、アグライア（かがやき）、エウプロシュネ（よろこび）、タリア（さかえ）といいます。なにしろ、

「彼女たちが眼差しをむけると、その眼からは、四肢の力をなえさせるエロスがあふれでた。その眉の下で、うつくしくウインクされるのだ」

といいます。カリスは生命の美です。

その美からあふれでるエロスは、アプロディテのエロスからさらにすすんで、生き物たちの間にくまなくはたらく、エロスの健康な喜びをうたっています。

そのエロスにより生き物たちはかがやいて、よろこびながら、さかえていきます。若返って成長し繁栄し、そしてゆたかな生態系をつくりあげていきます。

ゼウス　ハデス
デメテル ——×—— ペルセポネ ——×

土壌大地の女神「あまたをはぐくむ」デメテルは、

「白い腕の」ペルセポネ（ペルセプホネー）

をうみます。そしてゼウスの配慮のもとに、ハデスはペルセポネをさらって、大切なつれ合いとします。このハデス（ハーデス）は、地下にいて生き物たちの死と再生にかかわる男神でした。

このようにしてデメテルのもつ、土壌の女神としての側面が、よりはっきりしていきます。ペ

ルセポネは、地中においてハデスの働きを実際にいとなんでいる女神であり、地中ゆえに日焼けしていない白い腕の働きなのです。コウジ菌の白い菌糸のようなものです。

いいかえればそれは、地中で死骸を分解しては、ふたたび生き物に吸収されるよう養分に転換している、生態系の分解還元者・土壌バクテリアにほかなりません。この分解者があって、生態系の循環がはじめてなりたちます。

これで、かがやく眼アテナのもと、季節ホーラの三女神・運命モイラの三女神、優雅カリスの三女神がそろい、そして母なる土壌の地下の女神がそろいました。

ゼウスの世界はまさに、物語や歌にふさわしいものになりました。

こうして、生態系の循環がなりたったところで、ムーサたちが誕生します。

ゼウス
ムネモシュネ ―― × ―― ムーサたち

ムネモシュネは記憶の女神でした。記憶というのは、過去に経験したことを保存することです。しかし保存・記銘だけが記憶なのではありません。それをふたたびとりだす想起とあわせてこそ、記憶となるのです。

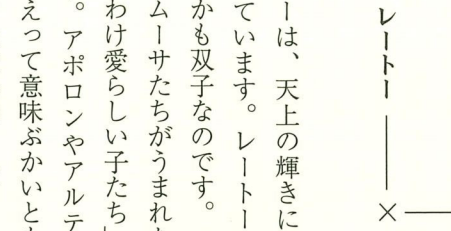
それだけではありません。さらに、とりだしたものを、いま現在とてらし合わせ、さらに将来を予測します。ここが、いわゆる記憶力とはちがうところです。記憶というのを、そういう能力としてとらえたいのです。

ムーサたちの誕生は、そのような意味での記憶の働きが、生態系レベルでもできたことを意味しています。

その意味では、ムーサたちの誕生は、生態系のこころの誕生でもある、といってもいいでしょう。けれども生態系がこころをもっている、というと誤解をまねきかねますが、ここでいう「こころ」とは、一種のただよう空気、全体的ムードのようなものでしょう。

そしてこの時点ではじめて、なにが「最初に生じたもの」だったのかがはっきりしてきます。また「すでに生じたことがら」と「これから生じることがら」とが、はっきりとみえてくるわけです。

双子の働き、アポロンとアルテミス



レートーは、天上の輝きに関係するコイオスとポイベの間の娘で、アステリア（星空）とは姉妹になっています。レートーとゼウスの子はアポロン（アポローン）とアルテミスとして出現します。しかも双子なのです。

まさにムーサたちがうまれた後にふさわしい、

「とりわけ愛らしい子たち」

なのです。アポロンやアルテミスという名称が、なにを意味しているのかはわかっていません。それがかえって意味ぶかいともいえます。

アポロンは太陽神としてよく知られています。しかし太陽ならば、すでにヘリオスがいるので、

むしろ光明の神としたほうがいいでしょう。

ヘシオドスは、ポイボス（かがやく）アポロンとだけいっています。なんだか母レートーの両親であるコイオスとポイベのまざったような感じですね。

また「弓矢をよろこぶ」アルテミスといっています。

しかし、アポロンの輝きとアルテミスの弓矢を、別々なものと考えてはなりません。アポロンとアルテミスは双子だからです。

もとは、かがやく弓矢、ともいうべきひとつのものでした。

それがかがやく弓とかがやく矢、ボーとアローとして双子にわかれます。弓は、うつくしい輝きと一緒です。その輝きゆえ、弓は矢をいる武器ではなくなり、弦をはじいて音をだす楽器、すなわち竪琴となります。

それが、かがやくアポロンです。太陽の光明にてらされて、生き物たちのなかにひそんでいる生命力が、竪琴のポロンポロンとかきならす音楽となって発動する。そんなありさまがアポロンなのでしょう。

もちろん、太陽の光があるだけではそうなりません。世界がムーサたちに祝福されるような状態になったからこそ、はじめて太陽光がそういう光明をもたらすようになったのだといえます。

ふるいアポロン信仰をしらべると、アポロンは、生き物たちの繁栄と増殖をまもる神だという

ことです。それにはやはり、竪琴のしらべのようなふかい生命力の琴線の発動がなくてはなりません。そんな光明をもたらす神がアポロンです。

これに対するのが「弓矢をよろこぶ」アルテミスです。

アルテミスは、かがやくようにキリリとはった弓から発する、かがやくような矢です。「矢のような」といわれるような、すばしこさ。その野生。それがアルテミスです。

アルテミスは山野の生き物たちの守り神であるとともに、狩りの神でもあります。狩りをするおかげで、生き物たちは絶滅からまもられます。守りと狩りは一緒です。

それは変な理屈だというかもしれません。

たしかに狩りは、生き物をころすだけのようにみえます。しかし本来それは、生き物たちを絶滅させないためにおこなわれる、という側面をもっていました。

たとえば、ある特定の生き物だけが激増すれば、その生き物の主食である食物はどんどんたべられて激減します。そのため食物が不足して、生き物はかえって全滅してしまう恐れがあります。

そんなときに狩りをします。狩りは、ふえすぎた生き物だけをころすものでした。それを獲物としていただくのです。動物だけでなく樹木にも狩りがあります。森林の間伐がそれです。

狩りとはいわば生態系の保全育成というわけです。守りと狩りはコインの裏表で、やはり一体です。毛もの篇に守とかいて「狩」とは、よく考えたものです。

このようにアルテミスは、生態系（エコシステム）をまもりそだてる調節作用としての女神です。生態系の生命を発動させ保全育成する働き。それがアポロンとアルテミスの双子神です。

エコシステムの完成

ゼウス

ヘーラー ——×—— ヘーベー　アレース　エイレイテュイア

「いちばん最後に、ゼウスはヘーラーを、さきにおう花嫁となさった」と記されているヘーラーは、ゼウスのオイコス（エコ・家）の主婦権でした。

そしてヘーラーは、青春の女神ヘーベー、武神アレース、お産と分娩つまり助産の女神エイレイテュイアをうみました。青春といっても、ここではお産・分娩に関係する青春であり、ヘーラーの役割が強調されているわけです。

しかし武神、つまり戦争の神というのは、ちょっとわかりにくい。しかもアレースは神々にも人間にも評判がよくありません。ホメロスの『イーリアス』によると、ゼウスがアレースにむかって、こんな憎しみの言葉をなげつけています。

「おまえは母ヘーラーの、手におえぬ強情な心をうけついでいる」

やはりアレースは、ヘーラーゆずりの性格をもっています。戦争の神ではありません。社会の秩序を強情にも維持しようという、治安の神でしょう。軍隊というよりは、警察や検察や公安の神のようなものです。

おもしろいことに、神々にも人間にも評判のよくないアレースは、アプロディテと結婚します。それ以外の女神は相手にしてくれなかったのかもしれません。

そしてアレースはアプロディテとの間に、ポボス（狼狽）、ディモス（恐慌）、ハルモニア（調和、ただし緊張をはらんでの釣りあい）をうみます。狼狽と恐慌による調和。やはり、強烈な治安維持力を連想してしまいますね。

生態系のわかわかしい繁殖や、また治安維持力がここでうたわれているわけです。これで、生態系ががっちり安定したとみていいのでしょう。

ただしヘーラーにはまだ、おかしな子がいたのでした。

ヘーラーはまた、ゼウスなしに一人で、ヘパイストス（ヘープハィストス）をうみました。「技

ヘーラー ―― ヘパイストス

にかけては、一番すぐれている」という「両足曲がりの神」です。火と鍛冶との神です。古来、火山がヘパイストスにたとえられていました。

火山の下には、鍛冶の神の仕事場があるということです。火山の噴火する音は、金属を槌でトンチンカンとたたいている響きでしょうし、火と煙がふきだすのは、それが煙突だからでしょう。

このヘパイストスは、ヘーラーのもつたくましい仕事力を、極限にまで発展させたものであることがわかります。でも、ゼウスとまったく関係なく一人でうんだ、というのがおもしろい。

ホメロスなどでは、ヘパイストスは、ゼウスとヘーラーの間の子とされています。ところがヘシオドスは、わざわざヘーラーが一人でうんだことにしてしまいました。

ヘーラーが「夫に腹をたてて、仲違いをして」いたときに妊娠しうまれた、とだけ簡単に説明しています。しかしそれだけで、その腹立ちのすごさは、まるで火山のようであった。それが目にみえるようです。

しかしヘーラーはそれを爆発させたわけではない。かといって、我慢したわけでもありません。ヘーラーは、腹立ちのエネルギーを仕事にむけたのです。それがヘパイストスなのです。べつ

にゼウスから特権をさずけられなくても、十分に両足で自立できる。というわけで、ヘパイストスはヘーラーが一人でうんだことになります。

もちろんそれは、生態系がひとまず完成され安定したうえでのことなのです。そしてヘパイストスの誕生は、生態系が自立した働きを、仕事としてはじめたことを意味しています。

以上で、ゼウスと女神たちとの結婚が完成します。

それは神々のあいだに、ただしく権利をわかちあたえるためのものでした。いいかえれば、生態系のシステムが分化されて、それぞれ独自の働きをするようになったのです。

ヘルメス・ディオニュソス・ヘラクレスの三段階

これでオリュンポスを代表する神々がそろいました。しかしまだ有名な神々がぬけています。いわゆるオリュンポスの十二神がまだそろっていませんね。

その十二神とは、まずヘスティアを家の中心にかかげ、ゼウスとヘーラー。アテナ。アポロンとアルテミス。アレスとアプロディテ。ヘパイストス。そしてヘルメスです。これにデメテルとポセイドンをくわえます。あるいはヘスティアを別格としてはずし、ディオニュソスをくわえます。

このうちのヘルメスとディオニュソスがぬけているわけです。しかし、これには重要な意味がありそうです。そのあとに「結婚雑編」なるものがあって、彼らはヘラクレスとともに、そこにはいっています。

雑編とはいっても、付け足しではなさそうです。なぜならヘルメスの母は「ゼウスのむごい強制により、ひろい天をささえている」という巨人アトラースの娘。ディオニュソスの母は「死すべき身の女」で半神半人。そしてヘラクレスの母は人間なのです。

そんな彼女たちとゼウスとのあいだの子は、あらたな発展の段階につながるものといえます。

ゼウス × マイア ―― ヘルメス

ゼウス × セメレ ―― ディオニュソス

ゼウス × アルクメネ ―― ヘラクレス

○ヘルメス（ヘルメース）

「神々の使者」すなわち伝令使かつ通訳です。

ヘルメスという名はヘルマからきています。ヘルマは、村と村の境界の道路ぎわにたつ石柱です。もとは豊饒と多産をねがう境界神だったのが、やがて、工人や芸人をかねた商人など、旅する人々の道案内や座の神になっていきました。

これは日本における道祖神・チマタの神、塞（サヘ）の神やサルタヒコとおなじ。また旅芸人クグツのあがめる陌（ハク）神、人形芝居師の百太夫、さらにエビス神とおなじものです。日本ではこの市神エビスで止まりのようです。

しかし、古代ギリシャでは、さらにヘルメスという神にまで発展しました。

ヘルメスは、通信や通商の神です。しかも、先にのべた神々からなる生態系のなかで、情報や価値のやりとりの仲立ちをする神です。

神々というのは、いわば生態系の部品であり、それぞれ特殊な性能をもっています。だからゼウスという設計思想（アーキテクチュア）のもとに、それらをすりあわせ、まとめあげる必要があります。

そのようなコミュニケーションや、緊密な調整をする触媒にあたる、いわば生態系の錬金術師が、ヘルメスです。

そしてヘルメスのかくれた働きにより、生態系は地球規模のひろがりをもつまでになります。それが地球生態圏（エコスフィア）あるいは生物圏（バイオスフィア）です。

○ディオニュソス（ディオニューソス）

「かがやかしい息子、にぎやかな」とよばれています。ぶどう酒の神としてあまりにも有名ですね。ところがこの神は、あまりにも異質なものとして、もともとゼウスたちの系図にははいっていませんでした。

それをヘシオドスは、わざわざゼウスの息子としてくみこんだのです。だから「かがやかしい息子」すなわちゼウスの息子といって強調しています。これには、まったくおどろかされてしまいます。

なにしろ近代の西欧では、ディオニュソスはアポロンとするどく対比されています。合理的なアポロンに対する、非合理的な生命の爆発がディオニュソスです。

神々による生態系が、ヘルメスによってうまくまとめあげられたとはいえ、それでまるくおさまってしまうはずはない。ゼウスにはまだまだ、不気味で底しれぬ「にぎやかな」原始生命の異質な側面がのこっており、それがディオニュソスだというのです。

この異質な面というのは、おそらくキュクロプス（一つ目巨人）あたりからくるものなのでし

ょう。巨大マグマのような強烈なエネルギーです。

生態系はまだまだ自発的にかく乱（ゆらぎ）する可能性をもっているのです。

ヘシオドスは、そのディオニュソスを、クレタの王ミノスの娘であるアリアドネ（アリアドネー）と結婚させています。ただし迷宮伝説とアリアドネの糸で知られる、あのアリアドネではなさそうです。

なぜなら、アリアドネという名前はどうも人間の名らしくない、といわれているからです。「亜麻色の髪をしたアリアドネ」というので、ベージュ系の色をした亜麻糸のイメージがあります。

たしかにアリアドネは、大地あるいは土壌の女神系の神の名らしいといわれています。とすると「黄金なす髪のディオニュソス」は、大女神のわかい愛人、発酵するぶどう酒とそのふしぎな力ということになります。

○ヘラクレス（ヘーラークレース）

さて、生態系の不気味な自発的かく乱は、ただ生命の暴発でおわるのではありません。地球環境レベルにおいては、動的な平衡というかたちで、より高度の調和へと組みこまれみちびかれます。スサノヲが英雄神に変身するみたいに。

それがヒーロークレース、いやヘーラークレースです。英雄（ヒーロー）です。ヘラクレスというと、どうも、筋骨隆々とした戦士を思いうかべがちです。しかし英雄とは、なにもたくましい戦士だけをいうのではありません。

ヒーローとは、すぐれた見とおしをもって、あたらしい社会を切りひらく指導者であり預言者をいいます。この読みの能力も、ゼウスの「不滅の知」の発展したものであり、だからこそ、おおきなちからをもつのです。

英雄ヘラクレスとは、地球生物圏が変化変遷しながら、より高度の調和へあたらしく切りひらかれて組みあがっていくことと、ふかい関係にある働きなのです。

このように、ヘルメスでホップ、ディオニュソスでステップ、ヘラクレスでジャンプするかたちになっています。いいかえれば、生態系のコミュニケーションが第一段、自発的ゆらぎが第二段、そして変化変遷しながらの調和が第三段と、三段跳びのようにして、地球生態圏・生物圏を成立させていることがわかるでしょう。

さて、これで『テオゴニア』はおしまいになっています。

「では、ごきげんよう。あなたがた、オリュンポスにおられる方々よ」

しかしながら、まだおしまいではありません。なぜなら、とても大事な神々の話を最後のためにとっておいたからです。そういえば、第二章で、イアペトスについては後でのべる、といっておきながら、ぜんぜん書いてありませんね。

もちろん、その息子プロメテウスについても。また、ヘラクレスがしばられたプロメテウスをすくったことについても。

○ゼウスの覇権をしめす神々
ゼーロス（栄光）ニーケー（勝利のにぎわい）
クラトス（権威）ビアー（権力）

○女神とゼウスとの子たち（生態系の完成）
アテナ（かがやく眼・軍勢の女神　あるいは自然のもつよき判断）
季節（ホーラ）の三女神／エウノミア・ディケー・エイレネ（秩序・正義・平和　あるいは季節のめぐりによる生長と開花）
運命（モイラ）の三女神／クロト・ラケシス・アトロポス（生き物たちの過去・現在・未来　あるいは進化）
優雅（カリス）の三女神／アグライア・エウプロシュネ・タリア（かがやき・よろこび・さかえ　あるいは生命の生長繁栄する美）
ペルセポネ（地下の女神　あるいは土壌の分解者）
ムーサたち（詩歌学芸の女神　あるいは生態系のこころ）
アポロン（光明神　あるいは生態系の生命の発動）
アルテミス（狩りの女神　あるいは生態系の保全育成）

ヘーベー（青春の女神　あるいは生態系のわかわかしい繁殖）
アレース（武神　あるいは生態系全体の治安維持）
エイレイテュイア（助産の女神　あるいは繁殖の助け）

○ヘーラーの子
ヘパイストス（火と鍛冶の男神　あるいは生態系としての自立した働き）

○ゼウスの注目する子たち（地球生物圏の成立）
ヘルメス（伝令の男神　あるいは情報・価値のやりとりの仲立ち）
ディオニュソス（酒乱の男神　あるいは自発的なゆらぎ）
ヘラクレス（英雄　あるいは変化変遷しながら調和をめざす生物圏モデル）

7　プロメテウス　生命知の反逆

ゼウスの胸は怒りにもえ　憤怒がその心にはいりこんだ
奸策によって仕立てられた　牡牛の白い骨をみられたときに。

ふしぎな系統イアペトス

イアペトス（イーアペトス）という名。それは、ギリシャ語にはない異国風のひびきをもっているといわれています。

もちろんイアペトスはたしかに、ガイアとウラノスとの間にうまれたティタン族十二神のひとりです。オケアノス、テミス、ムネモシュネ、そしてクロノスたちとは兄弟姉妹です。

しかしこの神の名称からすると、ほかの兄弟たちとはどうも、ちがう。

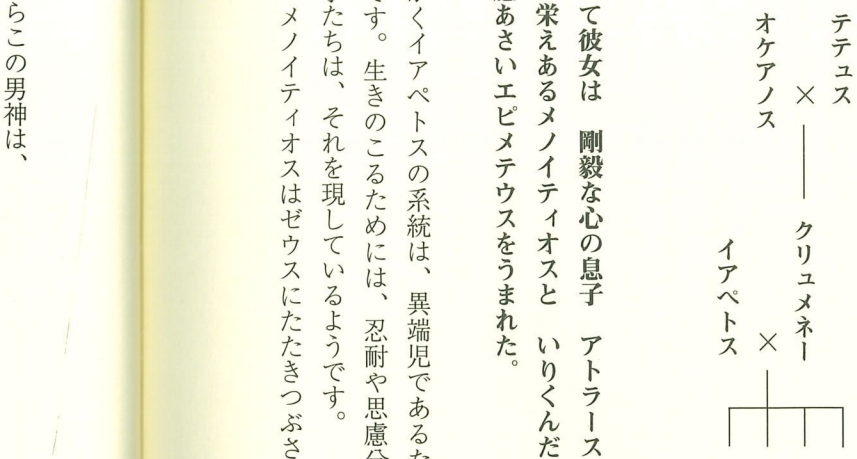
イーアとばかり、ひとりだけ浮きあがってひびいているような感じです。それは、クロノスの系統とは別のもうひとつの系統、あるいは正反対の系統をにおわすもの、とされています。

つまり、これまでずうっと述べつづけてきた、クロノス～ゼウスという神々の系統とは別の系統がある。しかもそれは別というよりは、正反対ともいえる系統です。それが、イアペトスの系統だというわけです。

このふしぎな系統は、イアペトスとクリュメネーが一緒になることで始まります。クリュメネーは、オケアニデスのうちのひとりです。オケアニデスとは、渦まく大洋オケアノスと渦まく内海テテュス（テーテュス）との間の娘たちでした。それらは生き物を養いはぐくむ泉たちです。

そして彼らの間に四体の子たちが生まれます。以上を系図にあらわすと次のようになります。

この子たちの性格から、イアペトスの系統の異質さがわかってくるでしょう。



そして彼女は　剛毅な心の息子　アトラースをうまれた。
また栄えあるメノイティオスと　いりくんだ　さまざまな策にとむプロメテウスと
思慮あさいエピメテウスをうまれた。

ともかくイアペトスの系統は、異端児であるため、生きのこるのにたいへんな苦労をしいられるはずです。生きのこるためには、忍耐や思慮分別といったものがなくてはなりません。これら四体の子たちは、それを現しているようです。

まず、メノイティオスはゼウスにたたきつぶされます。

なぜならこの男神は、

「傲岸不遜な態度と度をこえた慢心」

という性格をもつからだといいます。きびしい環境では、このような性格は破滅のもと。生きのびるためには、そんな破滅的性格があってはなりません。ゼウスはさらに、彼を「燃えさかる雷電でうち、エレボス（静かな生）へ」送りこんでいます。

ゼウスはまたアトラースを「疲れしらぬ頭と腕で、立ったままの姿勢で」天をささえるよう強制しています。

天をささえる巨人としてよく知られるアトラースは、両腕と頭の三点（トラス）で天をがっちりと支えさせられています。でも有名なアトラースの巨人像を目にうかべる必要はありません。

それよりも、ギリシャの神殿の柱です。

それは石の柱なのに、たわんでふくらんでいる、かのようではありませんか。それは神殿の屋根のものすごい重みだけでなく、生きていくうえでのあらゆる重みをささえて、ふかい忍耐のうちにあります。

このエンタシスとよばれる柱のふくらみこそ、アトラースの魂をよく表現しているといえます。

前もって知る・後から知る

不遜な態度をおさえこみ、じっと忍耐する。

それはそれで男らしく立派な態度といえましょう。しかしそれだけでは、あきらめとため息まじりの、堪忍だけのなま悟りで終わります。そうならないためには、さらにたくみな思慮や策というものがなくてはなりません。

そういう思慮や策というのは、もちろん、この重苦しい現状を打開していくためのものです。そのためには、ゼウスの圧力をだしぬかなければなりません。それには、ただの思慮分別では、あまりにもたりません。

思慮を二つにわけて、あらかじめ（プロ）の思慮と、あとから（エピ）の思慮と。そんな、プロ・エピの二重の思慮（メーテウス）が必要となります。

それがプロメテウス（プロメーテウス）とエピメテウス（エピメーテウス）です。

プロメテウスという名前は、前もって知る者を意味します。前もって考える、先を見とおす能力をもっている者です。

またエピメテウスという名前は、後から知る者を意味します。このためよく、エピメテウスは、手遅れになってはじめて気がつく愚鈍な弟だといわれ、馬鹿にされています。

しかし後から知るというのは、実際にやってみた後で知るということだから、「思慮あさい」とはいえ、ただ愚鈍なわけではありません。むしろ経験・実験してみたあとで知るという確実なものです。

これとくらべると、プロメテウスのほうはかしこいようでいて、どこかたのしくオッチョコチョイのところがあるかもしれません。

プロローグとしての先見知と、それについていくエピローグとしての経験知ということで、プロとエピのメーテウスをとらえておくのがよいでしょう。

不遜な態度（メノイティオス）は闇にかくす。忍耐（アトラース）が大切。そして先見知（プロメテウス）と経験知（エピメテウス）をはたらかす。このような生存のための努力、あるいは技術といったもの。これこそ、イアペトスの系統だといえます。

さて、このイアペトスの系統に、不遜な態度をかくさせ、忍耐をしいるようにさせたのは何者だったでしょう？

それはゼウスでした。ここに注目します。

ゼウスというのは、地球生物圏を制御し調節するシステムのことでした。そのゼウスからみると、イアペトスの子たちはその制約にさからおうとする、やっかいな異質分子・対抗勢力にあたるわけです。

ゼウスからすれば当然、つぶすべきものはつぶしてしまい、押さえるべきものは押さえこんでしまいたいでしょう。

そこで対抗する勢力は、ひたすら生きのびるために不遜な態度はかくして忍耐。さらにかさねて、先をよむとともに経験をふんでいきながら、たくみに生きぬこうとします。

きびしい環境の圧力に対する、生存のための努力。まさにダーウィンのいう「ストラッグル・フォー・エクジスタンス」を思いうかべますね。

そう、イアペトスの子たちは地球生物圏における進化システムといえるのです。

そんな進化の子たちを代表するのが、プロメテウスです。そしてプロメテウスは、ゼウスに対抗するべく、たのしくふしぎな事件を次々とおこしていきます。

胃袋か・脂肪のかたまりか

まずは、いけにえ事件です。

神々と人間との間に、争いがあったころのことです。その争いとは、いけにえの食べ物を、神々と人間とで、どのように分配するかというものです。

そのときプロメテウスは、判定の役をかってでました。

判定役というからには、公平な立場にあり、両者の中間にいなくてはなりません。しかしプロメテウスは人間の味方になっていたのでした。それでひそかに謀りごとを考えます。

プロメテウスは、おおきな牛を犠牲にして切りさいて、二つにわけます。

彼は　一方の者（ゼウス）の前には　肉と脂肪にとんだ臓物を
牛皮のうえに　おいたのだ　それらを牡牛の胃袋でつつんで。
他方の人間どもの前には　牡牛の白い骨を　わざたくみに仕立てて
つやつやしい脂肪でそれをつつんで　おいた。

ゼウスの前におかれたのは牛の胃袋です。

人間の前におかれたのは、つやつやしい脂肪のかたまりです。

ただし胃袋の中には、食べられる肉と臓物がつめこまれています。脂肪の中には、食べられない白骨がかくされています。この仕掛けこそ、策士プロメテウスの職人芸のような「偽装」、謀りごとなのでした。

さてゼウスです。自分の前におかれた、まずそうな胃袋。人間の前におかれた、うまそうな脂

肪。その両方をくらべてゼウスは、とても不満げです。

「友よ、君は、なんと不公平な分け方をしたものか」

プロメテウスはそれにこたえていいます。おだやかな微笑をうかべながら、そしてたくみな謀りごとをかくしながら。

「偉大なゼウスよ。これら分け前のうち、あなたの御心が、あなたにお命じになる方を、どうかおとりくださいませ」

その微笑をみて、ゼウスはさすがに、こやつ何か企みがあるなと察知しました。しかし不満をいったからには、もう取り消しはできません。

さて　ゼウスは　両の手で白い脂肪を取りあげられたけれども
彼の胸は怒りにもえ　憤怒がその心にはいりこんだ
奸策によって仕立てられた　牡牛の白い骨をみられたときに。

ゼウスは、神々の食べ物として、脂肪と骨のほうをえらびました。いや、えらばされるはめになりました。このときから、人間たちは神々にささげる食べ物として「かぐわしい祭壇で、白い骨をもやす」ことになった、ということです。

このいけにえ事件の物語は、骨をやいて神々にささげる習慣の起源を説明するだけのものかもしれません。それはそれで面白い。さらに、火葬をするのは死者を神々にささげるためではないかと空想したくもなります。

しかし、あとではっきりするけれども、「人間」を、人間のとおいとおい祖先である、微生物とみなすことにします。いいかえれば、いちばん最初の動物、原生動物みたいな微生物です。

もっとも原生動物といっただけでは、ぴんとこないでしょう。そこでまず原生動物でなく、原生生物があったとします。

これは、動物・植物の区別がつく以前の状態にある、ミドリムシのような生き物です。ミドリは植物、ムシは動物を意味します。そのミドリムシは植物になるか動物になるか、まよったままついに今日にいたったみたいな奇妙な生き物です。

しかしほとんどの原生生物は進化して、やがて動物と植物にわかれていった。そのわかれた最初のころの動物を原生動物というわけです。

この原生動物を「人間」とよぶわけだから、いわば原生植物のほうは「神々」となります。そのもとの原生生物は、人間と神々の区別がミドリムシのように、まだはっきりしていなかったころにあたります。

しかしなぜ、動物と植物の二つにわかれていったのでしょうか？（ほんとうはカビ類をいれる

と三つですが、ここでは二つにしておきます。）

それは栄養法の違いです。

いかにして「食べ物」を手にいれるかという違いがもとで、動物・植物の二つにわかれていったのです。しかも異なる栄養法の流れにある生き物は、食べ物がちがうのだから、おたがいにあらそうことがない。それどころか共存しながら発展できるのです。

ここで「食べ物」という言葉がでてきましたね。

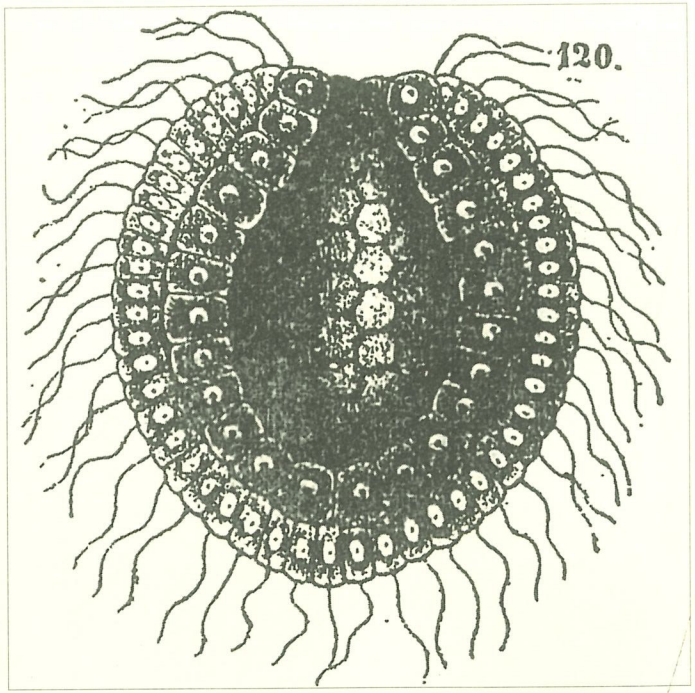
そう、さきほどの、神々と人間の間での食べ物の分配とおおいに関係があります。それは植物と動物の間で、いかにして食べ物を手にいれるかの違いができた、ということにつながっています。

さてここで、いけにえ、すなわち生物の死骸があるとしましょう。それは分解（切りさかれ）して有機物の破片（肉と臓物）と無機物（骨）の二つにわかれます。

光合成のできる植物（神々）は無機物を肥料として食べ物にし、動物（人間）は有機物を食べ物にします。このような分配の原則が確立されたので、植物と動物という二つの流れは、その後発展していくことになります。

しかしなぜ、肉と臓物が「胃袋」につめられなくてはならないのでしょうか？

この胃袋というのは、



ガストレア（ヘッケル画）

「ガステル」
というギリシャ語の訳です。ガステルという言葉は、胃・腹・食欲を意味します。
ガステルこそじつに、動物の性質をよく示す言葉なのです。
宮澤賢治が「ヘッケル博士」とよんだ、偉大な動物学者がいます。エルンスト・ヘッケルです。博士は、さまざまな動物たちに共通の祖先形をしたものを「ガストレア」と命名しました。それは袋状をしており、その袋に食べ物をとりこんで消化します。
肉と臓物をつめこんだ胃袋。それは、そのガストレアを予感させるものだったといえるのです。

ウイキョウの茎に火をかくした秘密

神々の食べ物は、栄養のある肉や臓物ではなく、栄養のない骨のほう、しかもそれをもやした灰や煙ときまりました。当然といえばあまりにも当然です。
これが反対ならば、人間どもは生きていけません。
しかし、プロメテウスに一杯くわされたことを知った、ゼウスの怒りはなかなかおさまりません。しかも察知したのにもかかわらず、そうせざるをえなかったのだから、なおさらです。

そしてゼウスは、トネリコとしての人間に「火」をあたえるのをやめにします。

疲れしらぬ火の勢いを　トネリコに　あたえようとはされなかった
地上にくらす死すべき身の人間どもには。
だが　イアペトスのいさましい息子は　ゼウスの裏をかいて
疲れしらぬ火の　遠目にも著しい輝きを　ぬすんだのだ
中が空のオオウイキョウ（の茎）にいれて。これは心底をさす出来事であった

トネリコについては、すでにアプロディテ誕生の章で、メリアの説明のところでのべました。ウラノスの男根が切断されて血がながれ、大地にうけとめられます。
そこから、メリア（トネリコ）がうまれたのでした。
トネリコは、槍の柄につかわれる材木です。現在ではその仲間のヤチダモがよく野球のバットにつかわれています。そのわけは、かたいからです。でも、かたいものは衝撃でおれやすいはず。しかしトネリコは、しなやかであり、おれにくいのです。
弾力があってしなやかな木。それがトネリコです。かたいけれどしなやか、それを柔弾性とよびましょう。ついでながら、漢字「柔」は、「矛（ほこ）＋木」で、ホコの柄にもちいる木をあらわします。

弾性にとむ木です。中国の周の時代には「ヌリアゥ」とも発音され、なんだかメリアににていますね。

その柔軟性というより柔弾性にとんだ原初の真核細胞の生き物、それがやがて、人類としての人間（もっとも柔弾性のある生き物によるシステム）にまで進化していくわけです。

ここでいうトネリコは、しかも人間の祖先、それはサルみたいな状態の原始の人類よりもはるかにとおい、まだ微生物状態の動物なのです。そのトネリコに、ゼウスは火をあたえようとしませんでした。

このゼウスの仕打ちに対して、プロメテウスは「火」をぬすみだして人間どもにあたえます。そのやり方がじつに巧妙です。ウイキョウの中空になった茎のなかに、火をかくしたというのですから。

ウイキョウ（フェネル）とは、沼地の草で、その茎は、外側が緑色でしめっています。しかし内側はかわいている。だから、このなかに火種をいれても火はきえず、しかも、外からそれをみてもわかりません。

このようにして知恵者プロメテウスは、ゼウスの目をぬすみ、トネリコに火をあたえました。でも、この「火」すなわち「疲れしらぬ火の勢い」とは、いったいなんなのでしょう？

原始の人類が火を利用するようになった、という話ならわかります。たしかにふつう、そのように解釈されています。しかし、原初の動物に火があたえられたとは、どういうことなのか。それを考えるために、細胞をみてみましょう。

細胞には、酸素によってもえる「火」のようなものがあります。その火でもって、疲れをしらぬ勢いをえています。細胞のなかで酸素呼吸をしてエネルギーを生産するということです。

それがミトコンドリアです。

そのミトコンドリアが、原初の動物トネリコにはあたえられていなかった。そもそもなかったのか。あるいは、動物としてスタートするときに、葉緑素とともにミトコンドリアが脱落、または退化してしまったのかもしれません。

スタートのときの環境が、光や酸素のとぼしい条件であったら、脱落あるいは退化というのは十分にありうることです。事実、動物の腸のなかなど、光がなく酸素のすくないところには、ミトコンドリアのない微生物がいます。

しかしやがて、原初の動物はミトコンドリアをもつようになります。

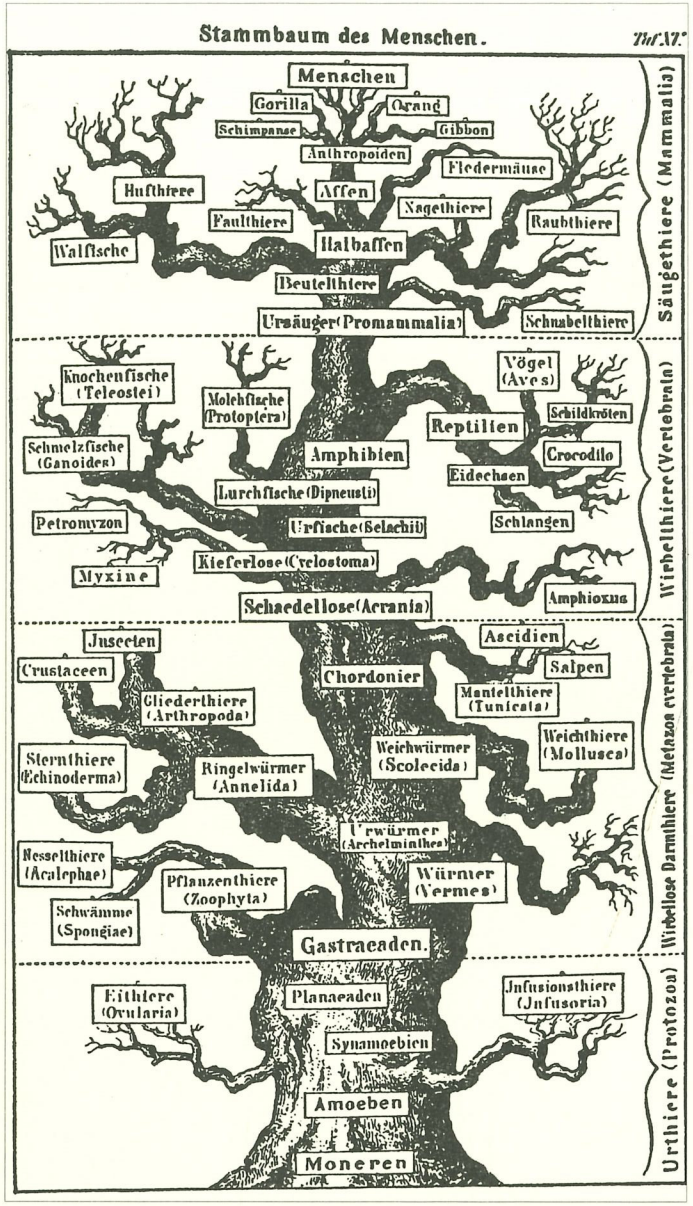
それは、ミトコンドリアをもつ好酸素細菌が、原初動物のなかにはいりこんで共生するようになったからです。

そう、この好酸素細菌こそ、茎のなかに火をもったウイキョウというわけです。

なおミトコンドリアの起源について、現在では、ガイア仮説の提唱者の一人でもあるリン・マ

ーギュリスの、好酸素細菌による共生説が定説になっています。

このようにしてプロメテウスは、まんまとゼウスをだしぬいて、人間に火、すなわちミトコンドリアをあたえました。しかしもちろん、それでひっこむゼウスではありません。



○イアペトスの子たち（生命知・地球生物圏における進化システム）
アトラース（天をささえる巨神　あるいは忍耐）
メノイティオス（傲岸と慢心の男神　あるいは圧力下における破滅的要素）
プロメテウス（前もって知る男神　あるいは先見の知）
エピメテウス（後から知る男神　あるいは経験の知）

○神々と人間どもの間での食べ物の分配（植物と動物の分かれ）
脂肪につつまれた白い骨（無機物　あるいは植物の食べ物）
胃袋につめこまれた肉と臓物（有機物　あるいは動物の食べ物）
ガステル（胃袋　あるいは胃・腹・食欲をもつ動物の祖先）

○トネリコ（かたくてしなやかな木　あるいは人類へつながる微生物の先祖）

○ウイキョウの茎にかくされた火
（トネリコたちに火をあたえた仕掛け　あるいはミトコンドリアの共生）

8　うつくしき禍根

その冠には　あまたの彫りもの　みるもふしぎなもの
陸地と海がはぐくむかぎりの　おそるべき生き物が彫りこまれていた

パンドーラではない「女の族」の祖先

いつのまにか人間どもが、きらめく火をもっている。
それをみて驚いたのはゼウスです。自分は、人間どもには火を与えないようにしたはずなのに。こんなことが、あってはならない、と。
しかし、もう手遅れです。
ならば、その「火の代償」となるわざわいを、与えようではないか。そこでゼウスは、ヘパイストス（ヘープハィストス）に命じて、わざわいとなる物をつくらせます。ヘパイストスは「技にかけては一番にすぐれている」という神でした。
ヘパイストスは、そのたくみな技で、
「花はずかしい乙女」
を土から造りだします。この乙女が、人間どもの「わざわい」になるというわけです。
しかしヘパイストスは、それだけでは足りないと考えました。そして「ゼウスによろこばれようとなさって」ということで、乙女だけでなく、さらに別の物を細工して制作しています。それが「黄金の冠」です。
もっとも「よろこばれようと」というのは、そう単純にうけとれません。これにもまたなにか

細工がありそうです。ともかく、その黄金の冠をみてみましょう。

その冠には　あまたの彫りもの　みるもふしぎなもの
陸地と海がはぐくむかぎりの　おそるべき生き物が彫りこまれていた。
それらを　ヘパイストスは　たくさん　驚くべきもの　人の声もつ　生き物の姿を
造りこまれたのだ。その優美の輝きは　彫りものにくまなく　息づいていた。

土からつくられた乙女を飾りつけるのは、かがやく眼の女神アテナの役です。
アテナは乙女に帯をつけてやり、白銀色の衣装でよそおわせます。そうして、
「みごとな造りのヴェールを、みるもふしぎなもの」
をかぶせてやります。そしてその上に、ヘパイストスの細工したあの黄金の冠をかぶせたのです。
ここでちょっと、ヴェールも冠も、両方とも、
「みるもふしぎなもの」
であることをおさえておきましょう。
こうしてゼウスは人間どものために、よきもの（カロン）である火の代償として、
「カロン・カコン」（うつくしき禍根）

を用意したのです。そしてそのカロンでありカコンでもある乙女を、
「ほかの神々も人間どももいっしょにいるところへと、つれていかれた」
のです。そのため人間どもだけでなく、神々にまで、カロン・カコンがふりかかってしまう。そのことがここに暗示されています。いいかえれば、動物にも植物にも共通することだけど、ということわりです。

しかしストーリーとしては、あくまで人間どもへの禍根としてすすめられます。人間どもにこそ、そのカロン・カコンの影響がきわだってあらわれるからです。

ここで、あぁ例の「パンドーラ」のことだなと、早とちりしないでください。

この乙女は、そんな名前ではありません。いや、名前がないのです。パンドーラという名前のある乙女がでてくるのは『仕事と日々』のほうであり、この『テオゴニア』（神々の起源・生成）ではありません。

ふつうギリシャ神話を解説するときには、たいてい『テオゴニア』と『仕事と日々』を一緒にしています。しかし、話がいくらにているからといって、ごっちゃにするわけにはいきません。しかも例のパンドーラの壺などでてきません。

この乙女とパンドーラは、あくまで別のもの。それを強調しておきます。

オス・メス世界のパラドックス

さて乙女は、衣装とヴェールそして黄金の冠で、みごとに飾りつけられて、きゃっきゃと無心によろこんでいます。それをみて、その場にいる神々と人間たちは「驚嘆の思い」におそわれるのでした。

なぜなら乙女は、ゼウスのたくらんだ「人間どもにとって手におえない、徹底した落とし穴」だったから。つまりこの乙女から、

「女の族」

という、とんでもない落とし穴がうまれたからだというのです。

ここで、ならばそれまでの人間たちは、男ばかりだったのだろうか、などと考えるかもしれません。しかし女がいるから男がいるのであり、男がいるから女がいるのです。

だから、それまでは、男女の性別がなかった。それが、火をもつようになってから、男女の区別ができたということになりましょう。

男女の性別。いいかえればメス・オス、雌雄性です。

しかしもちろん、オス・メスの区別があるというだけでとどまりません。オス・メスの性別をセックスといいます。そこから派生して連想するのは、性の交わりです。さらに、有性生殖です。

すなわち、男女の性別ができたという事件はまた、無性生殖から有性生殖へ、というおおきな進化がおきた、ということでもあるのです。なにしろそれまでの生殖は、分裂などによる無性生殖でした。それがオス・メスの性による生殖になったわけです。

でも、その有性生殖がどうして「おおきなわざわい」であり、カコンなのでしょう。

そのわけは、有性生殖は無性生殖よりもやっかいだからです。しかも、とびきりやっかい。これを、有性生殖のパラドックスといいます。

しかし有性生殖は無性生殖よりも進化したものだから、やっかいというのはおかしく感じるかもしれません。どうして、やっかいなのでしょう?

オスのほうからみてみましょう。まず、メスをさがさなくてはなりません。気にいったメスがようやくみつかっても、そのメスをめぐって他のオスたちと争います。かろうじてそれに勝利しても、メスに気にいってもらえなくてはなりません。

さらに、せっかくつがいになっても、やっかいなことはいろいろでてきます。いわゆる高等動物になればなるほどでてきます。あたらしいボスザルが、前のボスザルの子を殺しまくるなどという、おぞましい子殺しさえあります。

つがいの相手をしっかりつかむために、どれほどのムダなエネルギーが浪費されたでしょう。有性生殖とは、じつにムダのおおい生殖方式ではないでしょうか。

それこそじつに、ゼウスが人間にもたらした火の代償、カコンなのです。

しかしです。それなら有性生殖をする生物は、ほろんでしまったはずです。でも、そうはならなかった。ヘパイストスもアテナも、ゼウスの命令に従いながらも、けっして言いなりにはなっていなかったからです。

なにしろヘパイストスは、ゼウスなしにヘーラーがひとりでうんだ子です。ゼウスに忠実なはずがありません。アテナだって、ゼウスに対して「してよいこと・わるいことを助言」する能力をもっています。

二人ともゼウスとは別のもくろみを、ちゃんともっています。そして、それを示しているのが、あの黄金の冠とヴェールだったのです。

そういえば、両方とも「みるもふしぎなもの」でした。それは、カコン・わざわいであるはずなのに、ふしぎなことに、かえって人間どもに限りない発展をうながすのです。その限りないということを、たれさがるヴェールがあらわしています。

また、その発展していく様子が、黄金の冠には彫りこまれています。これこそ、ヘパイストスの細工なのでした。

その発展により「陸地と海がはぐくむ限りの、おそるべき生き物」がつくりだされていきます。そしてついには「人の声もつ生き物」が誕生するのです。

凶暴で気味わるい金切り声をだす怪物や怪人なんかを想像するかもしれません。しかしその怪物怪人こそ、地球上におそるべきほど多種多様に繁栄した生き物たちであり、またほかならぬ人類なのですが。

有性生殖においては、卵子と精子の両方の遺伝子が混合します。そのため子孫は親のコピーとはならず、多様に変化していきます。親とにているところもあれば、にていないところもある。その、にていないところが重要なのです。

さらに個体が多様に変化するなかから、環境条件によっては生物種が別々に分かれる可能性もでてきます。このように生物が多種多様に変化するなかで、人類の誕生する条件もととのってくることになります。

黄金の冠には、あやういようにみえた有性生殖の成功する未来像が、まぼろしのように彫りこまれていたのでした。たしかに、カコンの彼方には「優美の輝き」が「息づいていた」のです。

たくましく再生する肝臓

ゼウスが人間どもにもたらしたはずのカコンは、このようにゼウスの意図したとおりにはなり

ません。カロンの代償のはずであるカコンが、カロンなるカコン、うつくしきよき禍根となっていく。意図は、くつがえされてしまうのです。

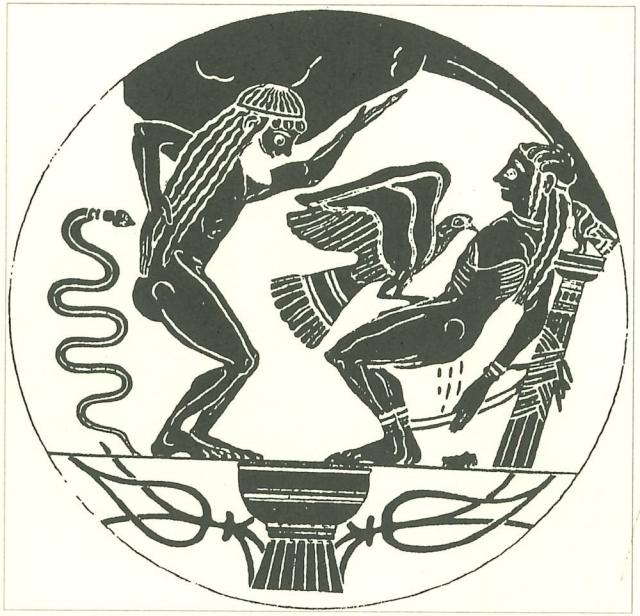
これでは、ゼウスはおさまるはずがありません。

ゼウスのはげしい怒りは、ついにプロメテウスに向けられます。そもそもあやつが、人間どもに火を与えたのがいけないのだ、と。それに、食い物のうらみもありました。あやつにこそ、カコンをもたらさなくてはならないのだ。

そしてゼウスは　策にたけたプロメテウスを縛りつけた　カセすなわち
冷酷な縄目でもって。カセの縄を　ふとい柱のまん中に打ちこまれたのだ。
そして　彼に　翼ながいワシをけしかけられた　このワシは
彼の不滅の肝臓を日ごと食らったが　肝臓は　おなじ分量だけ生えだすのだった
夜のまに　翼ながい鳥が昼のまに食らったのとおなじ分量だけ。

ついにゼウスはプロメテウスを拘束し、ふとい柱に縛りつけてしまいます。

そのプロメテウスにワシがおそいかかります。ワシは肝臓をくちばしでつつき、えぐりだして食らいつく。肝臓というのは、肋骨の下にあります。だから肝臓をつつくには、下のほうからふ



肝臓をワシに食われるプロメテウス（右）
天をささえるアトラース（左）

かくえぐることになります。

だからその激痛は、たまらないものでしょう。しかもそれが毎日毎日つづくというのだから、ゼウスはじつにむごい仕打ちをしたものです。

しかし、プロメテウスに同情ばかりしていては、事の本質を見おとしてしまいます。

ワシが攻撃を毎日つづけられるということ。そのほうに目をつけましょう。

それができるのは、夜になると肝臓が再生されて、もとどおりになるからです。もし再生しなければ、やがて肝臓はなくなってしまいます。なくなれば、ワシも攻撃できなくなってしまうでしょう。

肝臓は、あらゆる臓器のなかで、もっともたくましい再生能力をもっています。それを肝再生といいます。ラットの肝臓を三分の二ほど切りとっても、わずか三日でもとにもどるほどです。

肝臓は、再生能力を象徴しているといえます。

プロメテウスの肝臓が、昼間には傷ついても、夜になれば、再生される。いくら傷ついても、また再生されます。それが、いつまでもつづく。

ここが大事なところなのです。

ゼウスのけしかけるワシは、環境の制約といったところです。ゼウスはいわば環境の摂理として、きびしい制約としての強制力をもちます。

そのためプロメテウスという進化力は束縛されてしまいます。しかし縛りつけられ傷つけられたといっても、それで進化力がなくなるわけではありません。

その進化力は、再生力としてあるのです。プラナリアやヒトデのようなたくましい再生力、それが縛りつけられたプロメテウスの正体です。

再生とは、いいかえれば、外部環境からのワシのような攻撃を乗りこえて、自分の生命を維持し保ちつづけることです。そのさい、「策にたけた」さまざまな維持の工夫もなされています。それがプロメテウスです。

ヘラクレスの地球偉業

しかしながら、やがて、きびしい環境の制約・強制もとけるときがきます。それが、ヘラクレスの登場です。ヘラクレスは、プロメテウスにおそいかかるワシを退治します。彼はプロメテウスの「ひどい苦痛をはらい、苦痛から彼をすくった」のです。

このとき、ゼウスはまだ「立腹はしていた」ものの、もう怒りません。「その怒りを鎮められた」のです。というのも　智略にかけては（プロメテウスが）尊大なクロノスの御子（ゼウス）と

互角に張りあうほどであったから。

ここでようやく、ほんとうの意味でのプロメテウスの進化力が出現します。そして、ゼウスとプロメテウス、つまり地球環境の制御システムと進化システム、その両方の智略（システム）が対等に、あいそろうことになりました。

それはもはや、猛烈な攻撃とたくましい再生との、はてしなき闘争ではありません。

いいかえれば、制御システムのゼウスが、ヘラクレスの段階にまで発達してようやく、進化システムのプロメテウスと和解したのです。いや、それこそかえってゼウスの「御意向」なのだと、ヘシオドスは説明しています。

「ヘラクレスのほまれが、あまたをやしなう大地ガイアのうえで、以前にもましていやますようにとの御意向」があるのだと。

ヘラクレスとは、地球生物圏が変化変遷しながらあらたに発展していくという、より高度になった制御システムのことでした。プロメテウスは、そのヘラクレスに参加・合流したのです。

なお、プロメテウスの兄弟であるアトラースの、縁の下の役割も、忘れてはなりません。アトラースにはマイアという娘がいます。ほかならぬそのマイアとゼウスとの間に、ヘルメス（ヘルメース）が生まれたのでした。

ヘルメスは、地球生物圏がよりよく発展していくにあたって、緊密な連携のもとに調整をする

流通システムでした。そのヘルメスという土台力でホップし、ディオニュソスでステップし、そしてジャンプしたのがヘラクレスなのでした。

そのヘラクレスは「つらい労役をおえたのち」に、ゼウスとヘーラーの間の娘、ヘーベーを「雪をいただくオリュンポスで、かしこい妻」とします。ヘーベーは、若さ・青春・繁殖、さらに束縛からの解放、そして生命の自由はつらつとしたよろこびを意味します。

さいわいなる者かな　不死の神々の間にあって偉業をなしとげ　いまや
わずらいもなく　不老のまま　とわにくらす彼は。

ヘシオドスはこのように、ヘラクレスのおおいなる地球偉業をたたえています。

こうして今度こそ、

「では、ごきげんよう。あなたがた、オリュンポスにおられる方々よ」

です。神々は、もういません。「今あること、この先あること、すでに生じたことがら」だけが、ここにあります。

ふたたび宇宙球（エピロゴスにかえて）

そしていま、わたしたちは、ガイアとともに生きているのを感じようとしています。

そのガイアとは、いいかえれば、ガイアの上でいやますヘラクレスであり、あるいは和解したゼウスとプロメテウスでもあります。つまり地球生物圏であるとともに、そのすばらしいシステムなのでした。

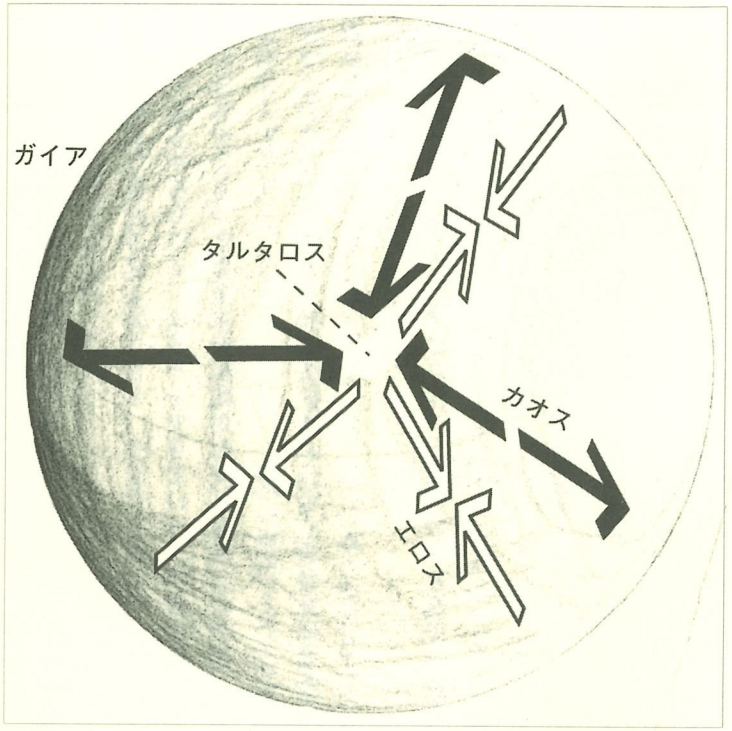
しかしなぜガイアが、ガイアのままでなく、このようなかたちにまで発展したのでしょう。それは、ガイアだけでなく、カオス、タルタロス、エロスがともにあるからにほかなりません。つまり、「原初に生じた」四つ組みあってのものなのです。

そこでもう一度、この原初の宇宙球をふりかえってみましょう。

それを図式的にあらわせば、

○球体の中心と表面をひらく分裂力（カオス）
○球体の表面（ガイア）
○球体の中心（タルタロス）
○球体の中心と表面をむすぶ結合力（エロス）

でした。そしてこの球体はすなわち地球だったわけです。けれども、そもそもこの四つ組みは、



宇宙の四つ組・見立て図

宇宙のもとに潜在する根源現象として、極微領域から巨大宇宙レベルまで、いつでもどこでもはたらいているのではないでしょうか。

いくつか例をあげてみましょう。

たとえば原子。あらゆるものは、原子からできている。物理学者のファインマンは、これを現代の科学知識のうちで、もっとも重要な仮説としています。この原子は、原子核を中心とし、周囲を電子がまわっています。

でもパチンコ玉のような電子がまわっているような、理科教科書のイメージは、もうやめにしたいもの。実際には、パチンコ玉なんかがまわっているのではなく、なんだかもやもやした雲（電子雲）でおおわれているだけですから。

ただし電気状態からみれば、原子核はプラス（陽）であり電子雲はマイナス（陰）と、はっきりしています。この陰陽は、ものすごい電気引力によってたがいに引きあっています。

ならば引きあって、一緒になってしまうはずではないでしょうか。いや、そもそも原子などできないはずではないでしょうか。でも原子はあります。

カオスが、この原子核と電子雲とをわけているからです。それは不確定性原理（関係）とよばれる、ふしぎな力です。不確定性関係とは、この宇宙にもともとある、ゆらぎであり、それがカオスにあたるといえます。

電子雲は、ガイアにあたります。その奥底の原子核はタルタロス。そして原子核と電子雲は、陽と陰とのあいだではたらく、電気引力（クーロン力）としてのエロスにより引きあいます。こうして原子はなりたっているのです。

このように、原子にも四つ組みがはたらいているのがみてとれます。

原子ガイアから宇宙ガイアまで

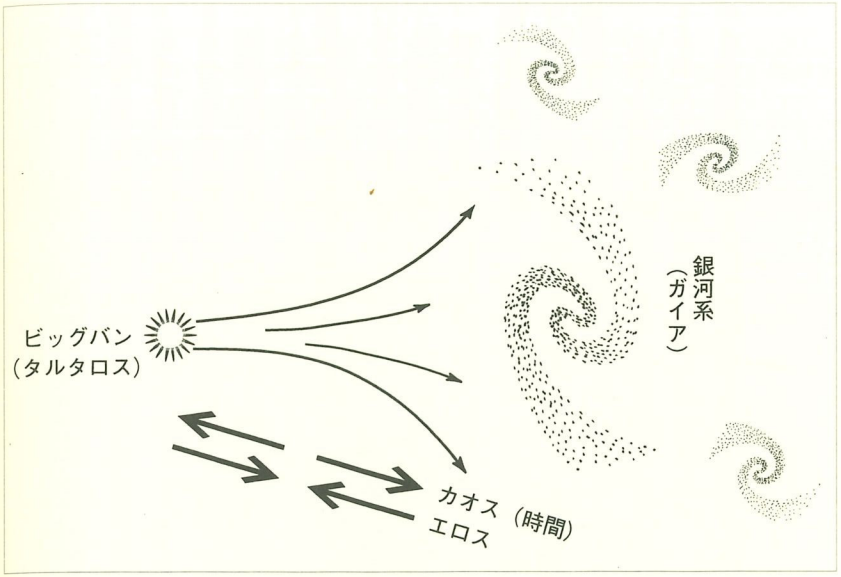
今度は目を大空にむけてみましょう。

晴れた昼間には太陽がてります。晴れた夜ならたくさんの天体、恒星がみえます。しかし太陽もその恒星のひとつです。このありふれた天体、太陽の構造をみてみましょう。

わたしたちの目にみえる太陽は、うすい膜状の対流層でおおわれています。温度六千度であり黒点もそこにできます。

しかし太陽の熱源は、奥底の中心部にあり、そこで水素からヘリウムをつくりながら大量の熱をうみだす、熱核融合反応がおきています。

この太陽表面の薄膜（対流層）はガイアであり、奥底はタルタロスです。そして薄膜と中心部



マクロコスモスにおける四つ組

の間を放射層がわけへだてています。それがカオス。さらにエロスにより、太陽はひとつにまとまっています。

太陽系をみても、今度は惑星たちがガイアとなっています。そして太陽がタルタロス。カオスは遠心力として地球と惑星たちをひきはなし、エロスは引力となって、惑星たちの安定した公転の運行がたもたれています。

さらに、巨大なスケールの宇宙全体をみてみましょう。

私たちのいる銀河系をはじめとする宇宙の天体たち、これをガイアとしてみましょう。では、

ガイアの奥底にあたる、タルタロスはなにか。おぼろにかすむ宇宙の果て？　これはむずかしいですね。

そこでとりあえず、ビッグバン仮説を採用することにします。ビッグバンが実在するということではありません。話をわかりやすくするためです。するとタルタロスは、宇宙の始まりの架空の一点、ビッグバンにあたることになります。

カオスは、現在のわたしたちと、ビッグバンをへだてている力です。それを私たちは時間としてもとらえています。エロスは、ビッグバンと現在をむすぶとともに、宇宙全体をもまとめあげる力となります。

ビッグバンがタルタロスにあたるなんて、おもしろいでしょう。ビッグバンについての興味は、タルタロスについての興味にあたるわけです。

でもそれとともに、ビッグバンのことよりも、宇宙のカオスに由来する、巨大な時間そのもののほうに、がぜん興味がわいてきませんか。また宇宙のエロスにも親しみがわいてきませんか。

これこそ、四つ組みの発想のうながすところです。

そのカオスとエロスの働きによる巨大な時間の集積のなかで、光や素粒子は原子・分子の微塵になっていきます。そして宇宙規模のガイアが複雑化して発展していきます。銀河や星や惑星となり、生物となり、ついに生態系ができ人類もでてくるのです。

こうして宇宙ガイアも原子ガイアも、わたしたちの身のまわりにあるガイアになっていきます。すなわち、地球表面のうすい膜のなか、あらゆる生き物たちや人類とともにいる、大地の女神としてのガイアです。

しかし、そのガイアはただの大地、大地の女神ではありません。それはそのまま、今生きている私たちの銀河系でもあり、また太陽でもあり、そしてまた地球でもあるのです。ガイアには、そのまま銀河系や太陽がかさなっています。

ガイアのなかのガイア、それが地球生物圏のシステムとしてのガイアです。

このようなガイアこそ、ムーサたちの最高の贈り物ではないでしょうか。

そしてこの地球上では、ミクロ・レベルからマクロ・レベルまでの、さまざまな宇宙の秘密がかさなり、もっとも複雑なかたちであらわれている。その結果、ゼウスやプロメテウスやヘラクレスが登場するまでにいたる、ということになるのです。

原初生命体から地球生物圏まで

地球ガイアの誕生についても、ふりかえってみましょう。なにはさておき、これがいちばん大切だからです。生物はいつ発生したかとか、宇宙の起源はどうなっているか、などよりもはるかに重要なことなのです。

けれども、それが二七億年前のことというと、がっかりするかもしれません。それよりもっと以前の、生物の発生のほうに、どうしても興味がいってしまうかもしれません。

でも、それ以前に誕生したのは、いわば「生」ではあっても、まだ「生命」ではなかったのです。

生命の「命」には、人間のいのちが感じられます。人間のいのちにまでつながっていく原初生命体の誕生。これこそわたしたち人間にとっては、人間にまでつながるとはかぎらない、いわゆる生物発生よりも、はるかに切実なものではないでしょうか。

しかもガイアの誕生は、カオスの働きによって、地球が「生きた惑星」として誕生したことと連動しています。すなわち地球がつよい磁場をもったことと、まず関係があるのです。

生きた地球との関連。そして共進化。そう、これこそ生命の秘密なのです。

誕生したばかりのガイアは、青緑色をしたどろどろのかたまりでした。それが地球上の浅い海をくまなくうずめていきました。また太陽光のエネルギーをためこみました。いわゆる海や山でさえ、そこからうまれるのです。

さあ、ガイアは生長していきます。

ガイアは光合成により酸素をさかんに発生します。その活動をクロノスといいます。クロノスのしわざによって、ガイア表面のバリアーがこわれ、やがてウラノスすなわち上空のオゾン層ができることになります。

ガイアの働きに大小の循環がおき、生命としての文化ができ、生命のリズムやおおきな調和周期性もできます。それがオケアノスをはじめとするティタン十二神です。そうしてクロノスはますます活発になります。

けれどもその影で、酸素のもたらす猛毒のため、生命活動に動乱がおきます。それがニュクスの子たちで、カオスの性質をひきついでいます。そこから諸悪の系列がつぎつぎにうまれます。

ガイアに危機がせまります。

しかし酸素呼吸というエネルギー革命がおき、かろうじて危機はのりこえられます。けれども今度は、生命エネルギーが過剰となったために、エリス・生存への争いがおきます。そこからまたさまざまな悪徳の子たちがうまれでます。

しかし、これに対するいわば反作用としてまた一方では、エロスの働きがおこり、アプロディテが誕生しています。すなわち共生です。

ガイアの生き物たちに大変革がおこり、真核生物がうまれます。さらに共生によって、いよいよ陸上に進出していきます。

ガイアが海からさらに陸をおおい、大気中の酸素が十分すぎるほどになった。そのときが、すなわちゼウスの登場です。

そのさいゼウスは、つよいエネルギーをもちます。それが一つ目巨人のキュクロプスです。さらに地球規模のおおきな影響力をもつまでにいたります。それが百腕巨人のヘカトンケイルです。

これらの巨人たちをくみこんだゼウスは、クロノスに勝利して酸素濃度を一定にするとともに、不安定な大気圏をほどよく安定させます。さらに怪物テュポエウスに勝利して、地球システムとしての安定性を確立します。

こうしてゼウスは、地球気候制御システムに生長します。ゼウスはさらに生長して、地球規模の生態圏をかたちづくっていきます。それがオリュンポスの神々で、ここで地球環境の制御システムとしてのゼウスが完成します。

しかし地球生物圏にはもうひとつ、進化システムがありました。それがプロメテウスです。この進化システムによって、生態系の消費者となる動物性の微生物があらわれます。そして原始動物は火、ミトコンドリアをもつようになります。

生き物たちはさらに有性生殖をするようになります。この生殖法によって、地球上の生物は多種多様にふえるようになり、やがて人類もうまれることになります。

ところが制御システムにとって、進化システムは一種やっかい物です。「環境」に対する「開発」

のようなもので、なかなかなじみにくい。

しかし制御システムは、ヘルメスによる情報化や、ディオニュソスによる動的平衡をえることによって、より高度になった地球生物圏の調節システムとなります。それがヘラクレスです。

こうして調節システムは進化システムと、ついに「和解」します。そして地球生物圏にかかせない、両輪のようなシステムとなるということです。

ムーサたちがヘシオドスに教えたという、紀元前七〇〇年ころの超神話。その『テオゴニア』を、こんなふうに「ガイア」のサイエンスで読みとけば、誰でも荒唐無稽だとして反発したくなるに違いありません。

なにしろヘシオドスのいたころは、素朴な自然探究さえなかったといわれているのですから。彼より一〇〇年ちょっとたって、最初の自然論者がようやく誕生するのです。

まずは有名なタレースが登場します。彼は天文学者・土木技術者であり、万物のアルケー（元のもの）を「水」の生命イメージでとらえました。そしてタレースより一〇歳ほどわかい、アナクシマンドロスです。

彼はもうすでに進化論のような考えに達しています。熱せられ混じりあった泥水から、最初の生き物がトゲ状の外皮につつまれて生じた。最初は水中でくらしていた。やがてそのうちのあるものは上陸した。人間は初めは魚ににた生き物であった、などとのべています。じつに、おどろくべきことではありませんか。

さらにピタゴラスは、地球を球体としました。ヘラクレイトスは「万物は流転する」とのべて、生命の特色は流動にあることを初めて指摘しました。

それでもヘシオドスが、彼らよりあとに登場したというならば、反発はそれほどでもないと思われます。残念ですね。

いやどうして、残念なことはありません。なぜなら、ヘシオドスが吟唱したり書いたものが、そっくりそのまま伝えられたわけではないからです。彼よりのち二〇〇年ほどは、彼の作品がどのようにして伝えられたのか、まったくわかっていません。

ヘシオドスの校訂本をだしたソルムセンは、ヘシオドスが「作詩したものを、吟唱詩人たちが彼らのやり方で語り伝えた」とのべています。

つまり、現在のこされている形の『テオゴニア』は、ヘシオドス自身が作詩したのとまったく同じものではない。二〇〇年ほどかけて「初版が大幅に加筆修正」されたとみることもできるわけです。

そのあいだ、吟唱詩人たちと自然論者たちは、たがいに影響を与えあったはずです。

たとえば怪物哲人パルメニデス（紀元前四七五年ころ）が、ヘシオドスを十分に意識している

ことは、よく知られています。彼もまた女神から教えをうけたといい、なんとも奇怪なことに、「真実」にもとづく「いつわり」を難解な口ぶりでとくのです。

そして吟唱詩人たちも、このような哲人また自然論者たちの流れを意識しました。また、おおいに参考にしたことは十分にありえます。

このようにしてできあがった『テオゴニア』が、二一世紀現代の地球生命論のめざす方向をすでに予感していた。というなら、首をかしげつつも、ある程度は納得していただけるかもしれません。

もちろん確たる証拠があるわけではない。しかし破天荒にみえるとはいえ、ここまで書いてきたようにギリシャ神話がガイアで読みとけるということこそ、証拠のかわりになるといってもよいでしょう。

○火の代償の乙女（女の族、あるいは雌雄性と有性生殖）

○みるもふしぎなもの
ヴェール（限りない発展）
黄金の冠（多種多様に繁栄する生物および人類出現への予感）

○ゼウスのワシ（環境のきびしい制約）
○プロメテウスの肝臓（再生力による生存の維持）

○ゼウスとプロメテウスの和解（地球生物圏の調節システムに進化システムが参加合流）

●参考となる本の案内

『神統記』ヘシオドス（岩波文庫）

『ギリシア神話』呉茂一（新潮文庫）
ギリシャ神話への手引きとして信頼できる最良の書。古代ギリシャの信仰や祭儀から神々の名の意味などまで、しっかり読みこむための基礎となる関連事項にもひろくおよんでいる。しかもヘシオドスの『神統記』を、「まずこれを基準として」いるのもいい。

『ギリシア神話の時間論』フィリップソン（東海大学出版会）
対立しながら共同するという「極性」の見地にもとづいて『テオゴニア』における神々の系譜をとりあげている。ドイツ的に難解な書き方とはいえ、極性はゲーテが自然研究するさいの特色でもあり、ギリシャ神話の生命論として読みとることもできる。

『ソクラテス以前の哲学者』廣川洋一（講談社学術文庫）
タレースを最初の哲学者とするのが通説であるのに対して、ヘシオドスこそ最初の思想家であったことをはっきりと主張している。またこの著者の『ギリシア思想の生誕』（河出書房新社）では、このことがくわしく説明されている。

『ギリシア思想の素地』久保正彰（岩波新書）
ヘシオドスの語りの独創性と、大地ガイアの根源的な役割をあきらかにしている。

『神話と宗教』オットー（筑摩書房）

『古代ギリシアの思想』山川偉也（講談社学術文庫）

『ギリシア世界の黎明』太田秀道（吉川弘文館）

『ギリシア神話の世界観』藤縄謙三（新潮選書）

『古代芸術のコスモロジー』ヒンクス（平凡社）

『ギリシアの生化学』木村雄吉（中央公論社）

『仕事と日』ヘシオドス（岩波文庫）

『ガイア』ジェームス・ラヴロック（産調出版）
ガイア仮説の提唱者によるガイド・ブック。科学者たちの誤解や非難に対して、地球生物圏のシステム科学としての地球生理学を基礎からていねいに解説している。写真や図版が中心で、かつ重要な用語には説明もある。

『共生生命体の30億年』リン・マーギュリス（草思社）
進化の「共生」説の提唱者が、共生とガイアの二仮説こそ、まったくあたらしい生命観をもたらす学説だと主張する。ポップ文化による流行がガイア仮説を歪曲してしまったことも、当惑しながら指摘している。

『生命と地球の歴史』丸山茂・磯崎行雄（岩波新書）

生物と地球が、おたがいにつよく影響をあたえながら進化してきたという新説。27億年前と19億年前を重要なマジックナンバーとしている。

『地球の海と生命』西村三郎（海鳴社）

ほか『生命と宇宙』小林道憲（ミネルヴァ書房）／『地球を動かしてきた生命』ウェストブルック（国際書院）／『生命と地球の共進化』川上紳一（ＮＨＫブックス）／『進化の創造力』ライヒホルフ（青土社）／『ラン藻という生きもの』藤田善彦・大城香（東京大学出版会）／『生命進化４０億年の風景』中村運（化学同人）／『過去のヴィジョン』テイヤール・ド・シャルダン（みすず書房）／『モンテッソーリの教育』モンテッソーリ（あすなろ書房）

あとがき

地球をうすくおおっている一つの巨大な生物体。

その偉大なはたらきに、ふと、ガイアという名を思いついたのは、『蠅の王』でよく知られる作家でした。「地球大気の化学的異常性から知られる恒常性の傾向をもつサイバネティック・システム」という堅苦しい言葉を「ガイア」といいかえたわけです。

それは、悪や暗黒の悪夢をのりこえた人による、すばらしいひらめきでした。流行語になったからではありません。それによって、古代のギリシャ神話と現代の地球観が、二七〇〇年ものへだたりをこえて接触したからです。

それにしても、あいかわらず大きな疑問がくすぶっていることでしょう。

「なぜ、そんな古代なのに、ガイアのことがこれほどまで、はっきりとわかっていたのだろう?」

ムーサ（ミューズ）たちがささやいた。

ただこのように、ヘシオドスはのべているだけです。しかし、そのムーサたちの母といえばムネーモシュネー。生命の偉大な記憶の文化でした。

生命の記憶は、ムネメともいわれていました。おそらくムネーモシュネーの略なのでしょう。それは無意識あるいは下意識としかいいようのない記憶、それと気づかれることのない記憶とされています。

それは体内という環境にしるされた記憶であり、また外なる環境にきざまれた記憶でもあります。それら内部・外部の環境をあまねくひっくるめて、ムジケー（ミュージック）にまとめあげかなでられている、地球生物圏の記憶です。

そんなムネメにより、たとえば鳥たちなら巣作りや渡りをしたりしています。わたしたち人間は、そのごく一部に気づいて、あやしくふしぎな夢や記憶やミュージックとして、それをとらえてもいます。あるいはそれを、いわば「原始海洋」としてイメージしているかもしれません。

そういえば、血液をなめれば海水のような味がします。体液の成分を分析しても、たしかに太古の海水とよくにています。しかしそれだけでなく、ゆったりとくつろいだときなど、原始海洋ひいては原初の天／海の交響するよび声みたいなものを、かすかにきいているのではないでしょうか。

この偉大なムネメは、たとえば石っこ賢治さんのいう「苔にむされた花崗岩の古い五輪の塔」みたいなものであって、さまざまなことを知らせてくれるはずです。

たとえばガイアは真空からわきたつ雲や酵母のように、ゆらゆらゆれ動きながらも、安定してうごめいている。そのようにみごとに調節されているように感じられることがあります。そこに「ゼウス」（またその娘アテナ）の働きがみいだされたことでしょう。

あるいは大地（土壌）をみれば、それが作物や草木にとってよい土か・わるい土かが、なんとなくわかります。するどい人々なら、はっきりかぎ分けていましょう。まさに生体の全感覚でもって察知しているわけです。

作物にとってよい土は微生物相がゆたかで、また季節により入れかわっています。が、そんなこと知らなくても、そこにすきとおった白い腕のような、透明なちからがイメージされる。それをみておもわず「ペルセプホネー」とさけんだでしょう。

そんな土壌が植物たちをよくそだてあげます。それを虫や鳥や動物たちがたべ、排出されたものがまた土壌にかえっていく。このようにして循環する流れが、たしかに感じられてくる。そういう大地土壌を、地の母「デー・メーテール」とも、したしく呼びたくなったことでしょう。

あるいはまた「つぎのせかい」へつづこうとしている妹がいる。そんな悲しみのむこうに「瓔珞やあやしいうすものをつけ　移らずしかもしずかにゆききする　巨きなすあしの生物たち」のような、名前のない乙女を見いだそうとしていたかもしれません。

……おそらくこんなぐあいにして、精密な観測機器がなくても、大自然をうるおしている根源力がシンボリックに、とらえられていったのではないでしょうか？

訳者紹介

梁瀬光世（やなせ・みつせ）
エッセイスト、科学ジャーナリスト。
科学を根底で生かしているもの・科学をこえてゆくものに興味をもつ。なかでも童話や物語や神話に注目し、おもな著書として『灰かぶり姫の瞳』（幻冬社文庫）、『赤ずきんは２度うまれる』（幻冬社文庫）、『白雪姫の復讐』（学研文庫）などがある。
ＮＥＸＵＳ　http://oak.zero.ad.jp/nexus/

ガイアのたくらみ
――ギリシャ神話の「いつわり」と「真実」

2004年 2 月 30 日　第 1 刷

著　者――梁瀬光世
発行者――村上克江
発行所――株式会社 新水社
東京都千代田区神田神保町 2 - 2
Tel. 03(3261)8794　振替 00150-7-36898
http:www.shinsui.co.jp
印刷所――モリモト印刷 株式会社
製本所――ナショナル製本協同組合

© Mitsuse Yanase, Shinsui Sha , 2004, Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、小社にご連絡ください。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-88385-054-4

女はみんな女神

ジーン・シノダ・ボーレン［著］
村本詔司・邦子［訳］／定価：本体2233円（税別）

女性の性格をギリシャ神話の七人の女神（アルテミス、アテーナー、ヘスティアー、ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネー、アプロディーテー）になぞらえて、多彩な女性の心理・性格を分析。女性が自分を理解し、受け入れるための格好の書。

現代人と愛

ロバート・A．ジョンソン［著］
長田光展［訳］／定価：本体1796円（税別）

不朽の名作『トリスタンとイゾルデ』の愛の姿をユング心理学の視点で読みとき、現代人の心の成熟と、男と女のよりよい関係を模索する。

ウィルヘルム・ライヒ　生涯と業績 [上・下]

マイロン・シャラフ［著］
村本詔司・国永史子［訳］／定価：各巻本体4500円（税別）

上巻はライヒの子ども時代のトラウマ、フロイトとの葛藤、そしてフロイトと袂をわかちアメリカへ渡るところまでを描く。下巻はアメリカでオルゴンなどを発明するが、罪にとわれ、刑務所で死亡するまでを、膨大な資料、丹念な調査、インタビューにより鮮やかに描く。索引、文献も充実。